発 刊 登 録 番 号
11-1741332-100005-01

OPEN 공공누리 출처표시 상업용금지 공공저작물 자유이용허락



32 日帝強制動員被害者支援財団翻訳叢書

尹秉烈コレクション

散らばったあの日の記憶

―強制動員収集資料集―

対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会 編
日本語翻訳協力委員会 訳

日帝強制動員被害者支援財団

散らばったあの日の記憶

―強制動員収集資料集―

対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会 編
日本語翻訳協力委員会 訳

日帝強制動員被害者支援財団

日帝強制動員被害者支援財団 翻訳叢書 32
散らばったあの日の記憶 —強制動員収集資料集—

初版印刷	2026 年 11 月 30 日
初版発行	2026 年 11 月 30 日
韓国語版編著	対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会
韓国語版発行	2013 年 8 月
日本語版発行所	日帝強制動員被害者支援財団 ソウル特別市鐘路区鐘路 1 ギル 42 利馬ビル 6 階 http://www.fomo.or.kr
翻訳	日本語翻訳協力委員会 江川耕一
校訂	竹内康人
監修	許光茂（現日帝強制動員＆平和研究会 研究委員、元韓国国務総理所属「対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会」調査課長・審査課長） 訳注は〔　　〕で示した。 翻訳にあたり誤りは訂正した。説明を加えた箇所がある。
発刊登録番号	11-1741332-100005-01

本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、
著作権法上での例外を除き、禁じられています。

刊行の挨拶

財団法人日帝強制動員被害者支援財団（以下、財団）は、2019 年から日本の「強制動員真相究明ネットワーク―日本語翻訳協力委員会」と韓国内関連分野の研究者たちの惜しみない支援により、強制動員関連書籍を日本語に翻訳・出版してきました。それに加えて 2025 年からは強制動員関連日本語書籍を韓国語に翻訳・出版しています。2026 年にも日本語 3 種と韓国語 1 種についてそれぞれ 300 部ずつ合計 1200 部を発刊し韓国内の関連機関や大学のみならず、真相究明ネットワークの協力を得て、日本国内の研究者や活動家、公共機関などに配布しています。

2026 年発刊書籍は次のとおりです。

まず、本書は、2004 年 11 月に発足した対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会（以下、支援委員会）が、強制動員の被害を調査する過程で収集した貴重な資料を綴り、2013 年 8 月に刊行した『散らばったあの日の記憶－強制動員収集資料集－』を翻訳したものです。最も多く強制動員された日本をはじめ、韓半島（本文では日本語使用者の便宜上、「朝鮮半島」）、東南アジア及び南太平洋地域、サハリンと中国などについての簡略な地域説明とともに、軍人、軍務員（軍属）、労務者として強制動員された実態が把握できる写真、文書、物品等について寄贈者を明記し収録しました。

この他、財団が今年、日本語に翻訳出版した本は次のとおりです。

『朝鮮人軍労務者地域別動員実態―沖縄強制動員者の口述と社会的記憶を中心に―』は、当財団が 2017 年から推進してきた強制動員被害及び真相究明のための調査研究事業の 2020 年度の成果であり、沖縄強制動員被害者の口述資料を探し再解釈して、光復後、日韓両国で抑圧されていた社会的記憶の問題に光を当てました。強制動員被害者を記憶し、彼らの犠牲を社会共同体が共に追悼する歴史的な経験を記憶資産として蘇らせ、歴史研究者たちだけではなく、人類全体の歴史的な教訓として立て直せるよう強制動員に対する記憶を多様な次元で解釈し活用することを提案しています。

『日本近代産業施設・朝鮮人強制動員被害実態』は、新潟県の佐渡鉱山を「明治日本の産業革命遺産」という名称でユネスコ世界文化遺産に登録しようとする日本政府の動向に対応するための研究であり、財団が 2017 年から始めた調査研究事業の 2021 年度の成果です。当研究は、明治日本の産業遺産のうち、4 社 7 ヶ所に強制動員された朝鮮人の状況および被害者数等に関して、国内外の研究を整理・検証したものであります。

さらに、今年、韓国語に翻訳・出版した日本語書籍は室田元美氏が 2018 年 11 月に著した『ルポ 土地の記憶－戦争の傷痕は語り続ける』です。この本は著者が日本の各地を旅しながら、その土地に伝わる太平洋戦争について記録したものです。長崎県の軍艦島をはじめ、群馬県、沖縄県など訪問地域の戦争の傷痕や朝鮮人・中国人・連合軍捕虜等の強制動員・強制労働の日本各地の現場を調査して、被害者の訴訟を支援してきた日本の活動家たちの経験を盛り込んでいます。ここに、北海道の朱鞠内の強制労働博物館と遺骨収集が進行中である山口県宇部市の長生炭鉱の内容を新たに追加しました。著者はこの本を通じて歴史と過去から学んで、平和や人権を大切にする人々の国際的な連帯を願っています。

このように財団は、旧委員会（日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会・対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会）の日帝強制動員被害真相調査の成果と財団の研究成果を日本語で翻訳・出版する一方、2025 年から日本で刊行された日帝強制動員関連の書籍を韓国語で翻訳・出版しています。この作業を通して強制動員分野の国内外研究の拡散と、成果物の活発な活用による平和や人権回復への寄与を期待しています。

これからも財団は強制動員分野の多様な研究結果や学術・教育資料を翻訳・出版・配布して、強制動員関連の研究

成果が韓国と日本を越え国際的に拡散できるよう、力を尽くします。皆様の持続的な関心と支援をお願いいたします。
ありがとうございます。

2026 年 11 月 30 日
財団法人日帝強制動員被害者支援財団

発刊の辞



2004 年 11 月にわが委員会が発足して以来、日帝により強制動員された韓国人たちの被害実態を調査する中で収集された貴重な資料を、今回一冊の本にまとめて発刊することになりました。

この本一冊に被害者たちの苦痛のすべてを盛りこむことはできないとしても、残されている画像のひとつひとつの全てが、あの時代の苦しみと過酷な歴史の真実を無言のまま語ってくれると思います。

この間、わが委員会は強制動員の被害調査と支援活動だけでなく、歴史の渦中で倒れていった先人たちの軌跡をひとつひとつ探し出すため努力しました。また、被害者たちの記憶の断片と痕跡を発掘し、すべての国民が共有できるように写真など各種の記録の収集活動にも力を入れてきました。

今回発刊された収集資料集『散らばったあの日の記憶』には『強制動員寄贈資料集』(2006 年)、展示会(2007 ～ 2008 年)、各種口述資料集などを通じて紹介された重要資料と未公開資料 350 点余りが収録されています。ここに載せられている色褪せた写真、すりきれた文書など古くてほころびた多くの物は強制動員の真実を語ってくれる貴重な資産です。

韓国人が最も多く動員された日本をはじめ、国内〔朝鮮半島〕、東南アジア及び南太平洋地域とサハリン、中国などに区分して、軍人、軍務員(軍属)、労務者の強制動員の実像を一冊の本で把握できるようにしました。また資料の理解を助けるため、動員地域についての簡略な地域状況と各動員地域別の被害者数を図に示しました。

わずか満 13 才の幼い時に北海道三菱鉱業(株)新下川鉱山へ動員された金泰淳(キム・テスン)氏の写真が特に心に残ります。まだ両親に面倒を見てもらうべき幼い少年が、左の胸に日帝の徴用に応じた人物であることを意味する「応徴士」という「徽章」をつけ、不動の姿勢で撮った写真です。これは日帝の残酷さと凄惨な当時の状況を示している象徴のひとつとして胸が打たれます。

結婚した次の日に徴用された若き新郎と「朝鮮女子勤労挺身隊」という美名の下に動員された幼い 10 代の女子の姿は、熱帯の南太平洋から凍土のサハリンにまで引っ張られていった被害者たちの苦痛を生々しく証言しています。日帝の強制動員とその後に展開した冷戦体制によって、サハリンの被害者と遺族たちの冬は今も終わっていません。

この本が発刊されるまでには、色褪せた資料を生き返らせて再構成し、収集した資料のひとつひとつの考証に細心な注意を注いでくれた実務者たちと、いろいろな支援を惜しまなかった多くの方々の隠れた苦労がありました。そして何よりも 70 年余りの歳月の間、大切にしまってきた貴重な資料を快く寄贈してくださった皆さまにもう一度、心からお礼の言葉を申し上げます。

『散らばったあの日の記憶』が祖国を失った民族の痛みとして記憶されるだけではなく、日帝強制動員被害の真相を知らせ、被害者たちが夢見た「豊かな祖国」を成し遂げる意味ある始まりとなることを切に願うばかりです。

対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会
委員長 朴仁煥

Foreword

The collected data of Japanese compulsory mobilization Editorial
『Fragmented memories of that day』

Since our committee has been established on November, 2004, we could collect precious data through investigations on the damage of Koreans compulsory mobilized by Japan and could finally publish this book.

We agree with that we couldn't put all the pains that they had been suffered into this book but every pictures in the book are telling us the sorrowful pains of the age and the truth of the dark history.

We haven't only spent so much time for the investigation on the compulsory mobilization and the support activities, but also to find the deeds of our ancestors who had been disappeared into the mists of history. Also, we have made efforts at collecting the photographs and the documentary evidences through finding the broken memories and the vestiges of victims for sharing them with the entire nation.

The book,『Fragmented memories of that day』, includes 350 numbers of the significant and disclosed data from 'The collection of the donated data on the compulsory mobilization'（2006）, 'The exhibition'（2007, 2008）and various collections of oral data. The faded photographs, the old documents and data in the book are our priceless assets telling us the truth of the compulsory mobilization.

We classified each part into Japan where most of Koreans had been mobilized, Korea, Southeast asia, the South Pacific area, Sakhalin and China so that you can understand the realities of the compulsory mobilization of soldiers, civilian workers and laborers through the book. Also, to help your understanding about mobilization areas, brief explanations for the status of that time and the numbers of victims have been presented in the picture.

I still remember the photograph of Kim Taesun who was compulsory mobilized to Shinsimokawa coal mine, Mitsubishi mining industry corporation, in Hokkai-do of Japan when he was just only 13 years old. A boy who deserve to be grew up with parents' love, was standing at attention in the picture wearing Ungzingsa badge in his left breast which means the person was compulsory mobilized by the Japan empire. The photograph broke my heart with the cruelty of Japan and the tragic situation of that time.

The pictures of a new groom who was compulsory mobilized after a day of wedding and a girl of early teens who was compulsory mobilized to Japanese rape camps tell us the indescribable pains continued from the burning South Pacific to the frozen land, Sakhalin. The victims and their family in Sakhalin suffered from compulsory mobilization and the followed cold war system, are still living in the never-ending winter.

To publish the book, all of the working groups made many efforts to vitalize the old faded data to be vivid and

they did their best to take care of the data. In addition, there were encouraging supports from numbers of people. Above all, we would like to thank all the donators once again who treasured the precious data for about 70 years.

We do not hope that the book, 『Fragmented memories of that day』 remains just as the torment of Koreans and Korean history but it is important to know the truth of the compulsory mobilization clearly. We sincerely wish for the book to be a meaningful beginning of the better Korea which they have been dreaming.

The Commission on Verification and Support for the Victims of Forced Mobilization under Japanese Colonialism in Korea
Chairman Park, In - Hwan

散らばったあの日の記憶

はじめに

この資料集は日帝時期に強制動員された被害者あるいはその家族たちが、2005 年から 2011 年まで強制動員関連資料を我が委員会に寄贈したものの中から選定して収録したものである。

資料集の発刊準備において軍人、軍務員、労務者などを類型別に分類しようとしたが、被害者とその家族の観点や初めて強制動員に触れる方々の理解のため、被害者が最後に動員された地域別に分類する構成とした。

強制動員された朝鮮人がもっとも多かった日本をはじめ、朝鮮半島、サハリン、中国（満州を含む）、東南アジア・南太平洋地域に区分した。日本では強制動員の主要地域をさらに地方別に細かく分けた。東南アジア・南太平洋は当時、南洋群島、南方などと呼ばれていたが、現在の名称を適用して分類した。

今回収録された資料は寄贈を受けたもののうち 353 点が収録されており、写真資料が 183 点、文書資料が 109 点、博物資料が 59 点、名簿資料が 2 点である。寄贈者一人が複数の寄贈をした場合、その中でもっとも代表的なものを選び収録したが、互いの関連性など理解を高めるために、可能な場合にはすべてを収録した。

写真資料はいつ、どこで、何をしながら撮影したのか、できるだけ出処情報を入れ、写真の中の被害者が誰なのかも説明した。「応徴士」として動員された幼い子どもたちの写真、動員されていく夫と若い妻の家族写真、陸軍兵志願者が訓練所へ入所する写真なども含まれている。

文書資料は戦時期に増産を督励するための一環として、日本政府または企業から被害者へ送った文書が主である。また「表彰状」や「賞状」などが多く、その他に身分証、徴用告知書、死亡証明書、罹災証明書などの資料がある。当時の厳しかった生活を詩の形式を借りて記録した「北海道苦楽歌」、帰還した当時を回顧しながら書いた「李鍾錫の回顧録」なども収録した。

博物資料は動員者の無事を祈るため作った「千人針」、炭鉱の坑道での灯火である「カンテラ」、寒い地域に軍人として動員された被害者の軍帽、下着などがある。

これらの資料は我々には貴重な資産である。収録した資料を一枚一枚、一点一点選定する過程で、祖国を失った民族の苦痛と強制動員という歴史的事実を再び考えてみることができた。

残されている資料は、70 年以上も過ぎた今、生存している被害者たちがだんだん減っている状況で当時の生々しい実状を語ってくれる唯一のものである。それらの資料が集まると、また別の証言になり、証拠にもなる。強制動員収集資料集『散らばったあの日の記憶』は、当時を熾烈に生きた犠牲者たちの記憶の蓄積を示す、もう一つの歴史である。

色褪せ、すり減り、裂けた資料も、持ち主にはもっとも綺麗で、輝き、完璧な資料であろう。こんな貴重な資料を快く寄贈してくださった方々に、今回の収集資料集がこの上ない慰労になることを祈っている。より多くの資料を収録できなかったことは心残りであるが、これを始めにより多くの資料が収集、記録され、生きている歴史の真実として後世に残ることを期待してやまない。

凡例

■ 収録された資料の収集方式は「寄贈」である。「寄贈」とは資料の原所蔵者がわが委員会規程によって定められた手続きを踏み、原本資料を寄贈したものであり、所蔵及び活用に対する同意を得た資料である。原本は委員会が所蔵している。

〔委員会は 2015 年 12 月 31 日まで運営後、解散。2026 年現在、資料の所蔵は韓国国立日帝強制動員歴史館（https://www.fomo.or.kr/museum/kor/CMS/Board/Board.do?mCode=MN0020）、韓国国立中央博物館 E ミュージアム（https://www.emuseum.go.kr/main）で検索可能〕

■ 資料の画像の下段に資料名と寄贈者（提供者）の名前を記載した。資料名は資料自体の題目がある場合はそのまま使用し、題目がない場合は資料の内容をもとに任意に定めて記載した。

■ 固有名詞（名前、地名、会社名など）にルビを付けた場合がある。「北海道炭礦汽船株式会社」の「礦」のように固有の漢字で表記する場合はそのまま表記した。

■ 資料は動員された地域別に区分して紹介した。それぞれの資料は被害者の動員類型と動員地の簡略な情報とともに記載した。ただし、動員及び帰還時期（死亡及び行方不明時点を含む）、創氏名等はできるだけ記載を避けた。

- 地域の区分は便宜上「委員会」の調査方式を準用して、朝鮮半島、日本、中国（台湾含む）、サハリン、東南アジア・太平洋地域に区分した。〔本文では日本語使用者の便宜上、「韓半島」・「韓国国内」・「韓国人」などの代わりに「朝鮮半島」・「朝鮮」・「朝鮮人」などの用語を使用したところがある。〕
- それぞれの地域は地図の画像を入れ、地域的理解を高めた。
- 資料集の構成にあたって強制動員と関連した用語、参考事項や、特定の論争点となる事項は、本文または地域と地域の間に別途記載した。

■ 強制動員被害者の現況は 2012 年 11 月 30 日時点での委員会の処理結果による。

〔現在、委員会の活動は終了されており、韓国国立国会図書館ウェブサイトから活動結果報告書（韓国語）をダウンロードすることができる。（https://dl.nanet.go.kr/SearchDetailView.do?cn=MONO1201625424）〕

訳注

訳注は〔　　〕で示した。

誤植・誤記は訂正した。誤記を削除した箇所がある。

地名や動員先の解説で、訂正、補足した箇所がある。

改行し、句読点を入れ、旧字体を新字体に直した箇所がある。

人名は原則として初出のみ漢字に韓国語発音の片仮名表記を（　）でつけた。

漢字不明の場合は韓国語発音の片仮名表記のみとした。

朝鮮半島の地名で道・郡などを補足した箇所がある。

資料の大きさは省略した。

「軍属」の説明で「軍務員」と表記した箇所がある。

炭鉱の表記には「炭礦」など様々あるが、説明の際は炭鉱を用いた。

目次

日本地域

北海道地方
北海道 15

東北地方
秋田県 37

関東地方
茨城県 39
栃木県 41
千葉県 42
東京都 43
神奈川県 46

中部地方
新潟県 55
長野県 56
岐阜県 57
静岡県 59
愛知県 60

関西地方
三重県 67
滋賀県 68
京都府 71
大阪府 72
兵庫県 79

中国地方
鳥取県 85
岡山県 86
広島県 87
山口県 90

四国地方
高知県 99

九州・沖縄地方
福岡県 101
佐賀県 108
長崎県 109
熊本県 115
大分県 116
鹿児島県 117
沖縄県 119

朝鮮地域
朝鮮地域 122
朝鮮半島 123

その他地域

中国
中国 139

サハリン地域
サハリン 153

東南アジア・南太平洋
東南アジア・南太平洋地域 161

コラム

日本地域
尹秉烈コレクション 28
李鍾錫回顧録 34
農耕勤務隊 52
戦時体制期における女性労働力の動員と
朝鮮女子勤労挺身隊 62
広島・長崎における朝鮮人原爆被害 94

その他地域
シベリアに抑留された朝鮮人捕虜 150
黒い大陸から来た手紙 158
南洋群島斡旋労働者 172

付録

索引
用語索引 176
寄贈者一覧 186

動員地域別被害者状況

動員地域		都道府県など	軍人	軍務員	労務	その他	計
日本	北海道	北海道	574	1,744	37,900	2	40,220
	東北	青森県	120	1,222	1,047		2,389
		岩手県	9	6	872		887
		宮城県	49	42	481		572
		秋田県	14	7	1,129		1,150
		山形県	2		164		166
		福島県	57	27	1,167		1,251
	関東	茨城県	355	46	797		1,198
		栃木県	640	7	686		1,333
		群馬県	74	54	319		447
		埼玉県	26	66	122		214
		千葉県	167	43	90		300
		東京都	367	1,300	1,544		3,211
		神奈川県	408	1,936	1,384		3,728
	中部	新潟県	73	32	613		718
		富山県	34	50	488		572
		石川県	22	8	111		141
		福井県	72	6	131		209
		山梨県	8	21	70		99
		長野県	302	48	516		866
		岐阜県	20	6	551		577
		静岡県	598	60	849		1,507
		愛知県	650	462	2,159		3,271
	関西	三重県	66	32	189		287
		滋賀県	51	3	108		162
		京都府	225	583	170		978
		大阪府	534	1,044	5,034	1	6,613
		兵庫県	198	195	2,711		3,104
		奈良県	16	61	75		152
		和歌山県	47	45	165		257
	中国	鳥取県	46	21	52		119
		島根県	43	7	94		144
		岡山県	47	43	503		593
		広島県	444	1,549	2,655	1	4,649
		山口県	355	386	2,903		3,644
	四国	徳島県	19	23	17		59
		香川県	39	11	29		79
		愛媛県	16	32	139		187
		高知県	66	26	106		198
	九州	福岡県	828	743	12,685		14,256
		佐賀県	82	21	1,606		1,709
		長崎県	432	1,572	5,404		7,408
		熊本県	194	53	416	1	664
		大分県	156	76	251		483
		宮崎県	174	54	168		396
		鹿児島県	381	650	350		1,381
	沖縄	沖縄県	173	2,171	327	1	2,672
朝鮮半島		朝鮮半島	7,077	1,343	15,039	62	23,521
その他		中国	8,267	1,565	2,039	13	11,884
		サハリン	141	290	7,176	1	7,608
		東南アジア・南太平洋	2,226	10,820	4,634	11	17,691
計			26,984	30,612	118,235	93	175,924

※ 委員会への申告数から作成（2012 年 11 月 30 日現在）


釧路協和
錬成

日本
地域

日本は戦時体制期に最も多くの朝鮮人が動員された地域である。当時、朝鮮から日本に動員された人たちはおおよそ 80 万人ほどだが、すでに就職と留学を理由に日本に在住し、日本で動員された朝鮮人の数まで合わせるならば、相当の数になる。国家総動員法と国民徴用令など各種の法により動員された朝鮮人たちは、戦争の物資をつくる工場へ、または原料を掘る炭鉱や鉱山へ、または軍隊へ動員された。

Japan was where most of Koreans had been compulsory mobilized during the war. The number of mobilized people was about 800,000 at that time. To consider that there were a lot of compulsory mobilized people who stayed in Japan for the reasons of studying or working, the number is still unpredictable. They were forced to work in the companies making the war materials, coal mines and mines under the laws of the national mobilization and the national conscription.

北海道地方



北海道は日本最北端に位置する地域であるが、面積が韓国とほぼ同じぐらいの大きな島である。北海道は地下資源が豊富であり、明治期より炭鉱と金属鉱山などの開発が活発になされた。戦争を起こし、さらに多くの産出が必要となった日本は、炭鉱、金属鉱山、土木工事場へと朝鮮から大規模な人員を強制動員した。

朝鮮人を最も多く強制動員した代表的な炭鉱会社は、北海道炭礦汽船（株）、三井鉱山（株）、三菱鉱業（株）、住友石炭鉱業（株）など、金属鉱山では住友鉱業（株）鴻之舞鉱山、帝国砂白金有限会社の雨竜鉱業所（鷹泊）、野村鉱業株式会社イトムカ鉱山などがある。朝鮮人労務者の大多数は危険度が高い坑内労働に投入された。戦争末期になるほど甚大な生産量増加が求められ、労働災害も激増して死亡する者も続出した。

土木工事場に動員された労務者の場合、「タコ部屋」※に収容され厳しい監視と統制下で過酷な労働生活を強要された。朝鮮人が強制動員されていた代表的な軍需工場には、日本製鉄輪西製鉄所、日本製鋼所室蘭製作所があり、造船業では函館船渠、運輸業では日本通運などが代表的である。

◉ 出典

1. 日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会、『写真で見る強制動員の話 日本・北海道編』（韓国語）、2009 年〔日本語訳初版、日帝強制動員被害者支援財団、2020 年〕
2. 鄭惠瓊『朝鮮の青年よ 皇国臣民となれ』（韓国語）、西海文集、2010 年

※ タコ部屋（蛸部屋）：懲罰部屋、蛸部屋。タコ漁で壺に入ったタコが自分の足を切って食べるということから「過酷な労働の現場」を意味する。タコ部屋は本来、囚人や借金を負い借用金を返すために身売りした人たちを閉じ込めた懲罰部屋であるが、朝鮮人で脱出履歴があったり、生産量が少ない鉱夫を閉じ込めたという。〔タコ部屋の語源については定説がない。『写真で見る強制動員の話 日本・北海道編』（日本語）、71 頁〕

北海道



釧路協和会尺別支部錬成会記念

1942.8（ソン・スングム、ハ・ヒテの寄贈）



昭和炭鉱帰還労務者記念団体写真

北海道にある昭和炭鉱に動員された李宗潤（イ・ジョンユン）が、解放後、同僚たちと撮影した団体写真であり、写真下段に「富川郡部隊北海道昭和炭山記念」と記載されている。李宗潤は左端で腕章をつけている。（李ソヌの寄贈）〔富川郡は京畿道の郡〕



尺別炭鉱坑口で撮影した団体写真

北海道釧路市にある雄別鉄道炭鉱（株）尺別炭鉱に動員された鄭聖得（チョン・ソンドゥク）が、同僚たちと一緒に坑口で撮影した団体写真である。（ソン・スングムの寄贈）



給与封筒

北海道にある明治鉱業株式会社昭和鉱業所に動員された尹元容（ユン・ウォニョン）の給与封筒である。給与封筒には支給内容と控除内容が記載されている。（権ヒョンスクの寄贈）



新美唄炭鉱・済州島労務隊 1 周年記念写真

北海道にある三井新美唄炭鉱に動員された朴元萬（パク・ウォンマン）が、済州島出身の労務隊同僚たちと 1 周年記念で撮影した団体写真である。写真上段に「三井新美唄炭礦　済州島労務隊一周年紀年」と記載されている。（朴元萬の寄贈）



死亡診断書　1943.12.25
浅茅野飛行場

北海道の弘山病院で発給した全海平（チョン・ヘピョン）の死亡診断書である。死亡診断書には全海平の姓名、性別、生年月日、職業、発病時期、死亡時期などが書かれている。全海平は北海道の丹野組土工夫として浅茅野陸軍第 1、2 飛行場工事場に動員されて作業中、1943 年 12 月 25 日死亡した。（全ウシクの寄贈）

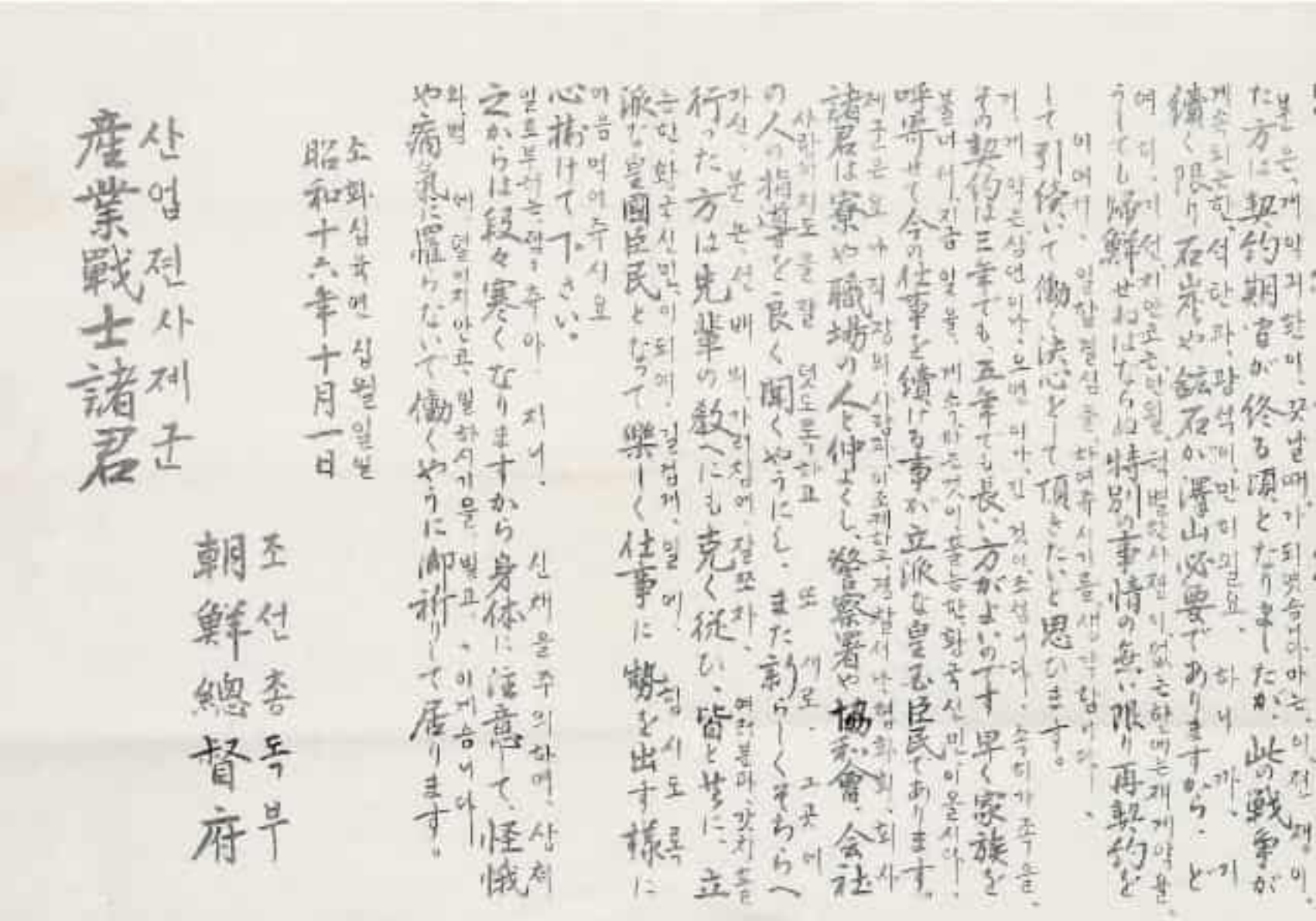


浅野雨竜炭鉱労務者団体写真

北海道にある浅野雨竜炭鉱に動員された崔夢得（チェ・モンドゥク）と同僚たちの団体写真である。崔夢得は「逃亡を防ぐため、監視の目的で写真を撮影した」と口述した。（崔夢得の寄贈）

産業戦士への朝鮮総督府の手紙　1941.10.1

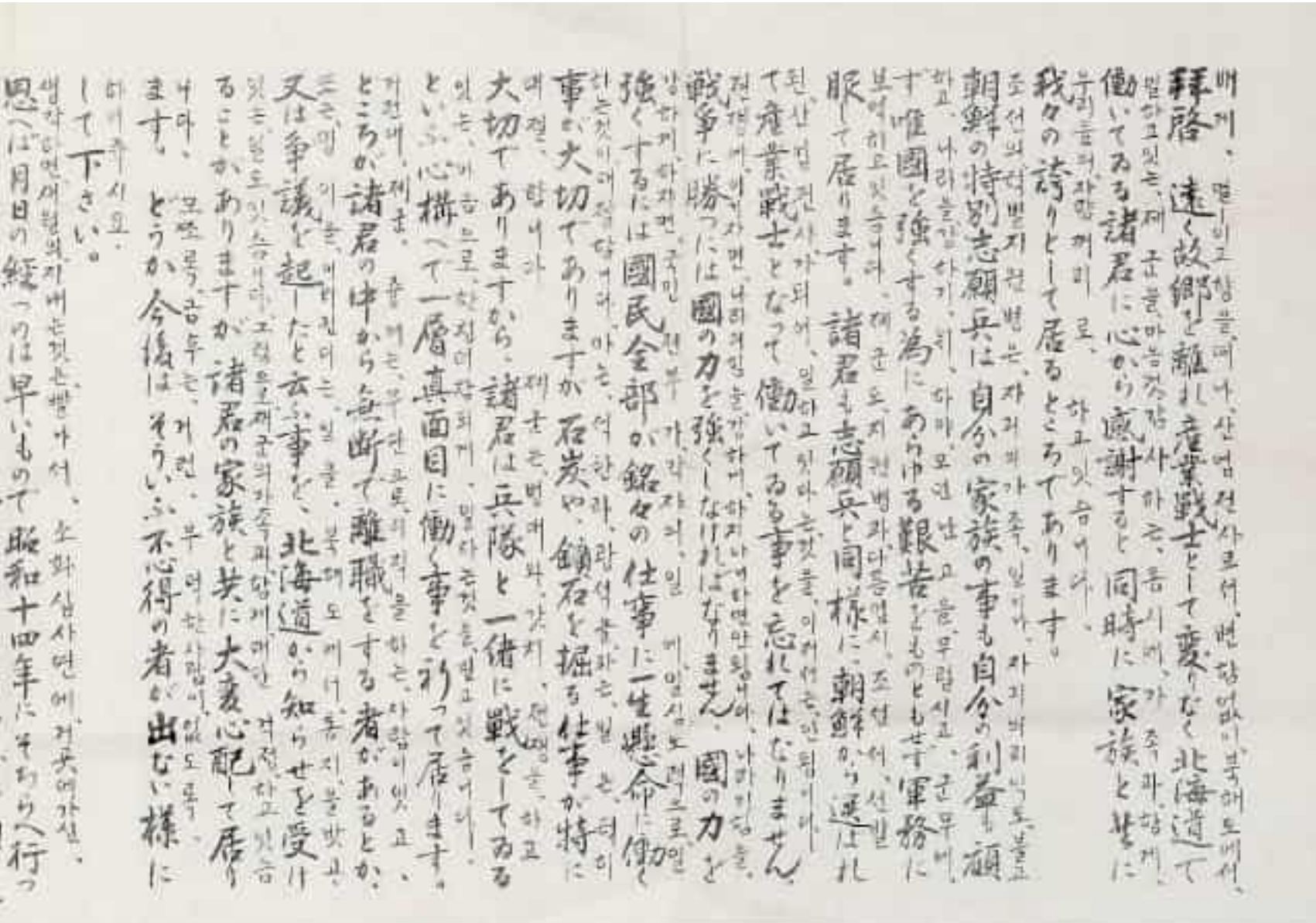
逃亡することなく故郷の家族のため産業戦士として仕事せよという朝鮮総督府の手紙である。（李ヨンスの寄贈）



産業戦士諸君

昭和十六年十月一日

朝鮮總督府





炭鉱の坑口で弟と撮影した写真

北海道札幌市にある炭坑に動員された朱永基（チュ・ヨンギ、右）と弟の朱永準（チュ・ヨンジュン、左）の写真である。電球をつけた帽子、地下足袋などの労務の服装をしている。（朱サンウクの寄贈）



北海道炭礦汽船（株）空知鉱業所労務動員の際の団体写真

北海道にある北海道炭礦汽船株式会社空知鉱業所に動員された当時、任丙成（イム・ビョンソン）と同僚たちが雪に覆われた神社の前で撮影した記念写真である。（任ヨンの寄贈）



死亡通知書　1941.8.20

北海道にある北海道炭礦汽船株式会社空知鉱業所に動員されていた朴夏錫（パク・ハソク）が、1941 年 6 月 4 日落盤事故で死亡したという死亡通知書である。この文書は朴夏錫の死亡及びその後の処置と関連して、北海道炭礦汽船株式会社空知鉱業所から慶尚南道の宜寧警察署長に送った書信である。朴夏錫の動員日時、死亡日、死亡原因を確認できる。（朴ヘジン（朴夏錫の息子）の寄贈）



北海道苦楽歌

北海道にある三菱鉱業株式会社大夕張鉱業所に動員された姜三術（カン・サムスル）が、1943 年頃より作成した 4 音節の歌辞形式の文である。姜三術は北海道苦楽歌と題した文に動員当時の状況、移動経路、作業場及び作業環境、炭鉱内生活などを具体的に記述し、強制動員地での寂しさと苦痛の心理状態を詩的に表現した。北海道苦楽歌は息子の姜聲鉀（カン・ソンガプ）により、冊子として発刊された。（姜聲鉀の寄贈）

〔歌辞（歌辭）：韓国の韻文文学の一形式。4・4 調（4 音節の連続体）あるいは 7・5 調（7 音節と 5 音節の連続体）に基づいた散文に近い韻文。詳細は以下を参考。
https://db.history.go.kr/diachronic/level.do?levelId=oh_020_0040_0020_0020,
https://db.history.go.kr/diachronic/level.do?levelId=nh_045_0040_0010_0020_0040
（2026.4.24. 検索）〕

北海道苦楽歌

辛いよ 辛い／家を離れるのが 辛い／そのうちに 日が迫り／12 月 初二日／
朝食を 食べた後／行装整え 出発する際／できないよ できない／父母離別 できない／
二十歳青春 若い妻が／涙を流し 言う言葉／万里の遠征 行く貴方／
何が 困って／何が 足りなくて／この様に　行くのよ／そうこうして　別れ／

わが面〔普門面〕に 到着すると／左右に 座った書記／12 人が 集まった／巡査 3 人 歩哨に立ち／
わが面長 語った後に／面事務所 離れて／郡庁で 調査受け／警察署に 入ると／
一郡〔醴泉郡〕から 集まった人／73 人 集まった人／旅館に 入って／ひと眠りも できず／
そうこうし 夜が明け／朝飯を 食べ／募集のため 数三人が／近寄って きては／
今日から 古い服脱いで／洋服着て 紳士になれ／服一着ずつ 出してくれる／
その服貰って 着た後に／細かく 検査して／新所管邑に 泊まって／また一夜を 過ごした／

醴泉邑に 一晩泊り／初四日 明け方の朝／金泉行に 乗るため／駅前に 出たら／
南空 空中に／鳴きながら行く あの雁や／お前の 行き先はどこで／あんなに 鳴いて行くのか／
今日この日 この身も／お前のように 身は定まらず／いつのまにか 駅に着き／金泉行に 乗る／

速いこと 汽車の速力／黒煙 汽笛／故郷痕跡 跡形もなく／金泉駅に 着いた／
急いで降りた 駅前で／汽車時間を 待って／釜山行き 乗って／あっという間に 釜山に来て／
旅館に 入って／朝飯を取った後に／水上警察 検査受けるが／厳めしいこと この上なく／
細かい調査は 限りない／また一晩 過ごし / 萬頃蒼波 広い海／連絡船に 乗ると／
水上 二階／水下 一階／

日本国に 到着し／連絡船を 降りると／左右に 刑事巡査／何の調査 こんなに多いの／
駅前で 饅頭ひとつ／貰って 食べた後／東京行き 直行車／さっさと 乗り／
無数の 停車場／一つ一つ 見て／文明の 今世界よ／このように 発達するのか／
東京駅に 到着し／皇居遥拝 しようと／敬礼の 礼をして／電車を 乗って来て／
あの城か この城か／気さえ 遠くなる／

青森行に 乗り／青森駅に 到着したら／また海に 行き当り／連絡船が 乗船待ち／
その連絡船 急いで乗ると／大夕張は どこだ／矢のように 早い汽車／大夕張に 着いた／

12 月 2 日朝／家を離れ 此処まで／12 日 夕方に／目的地に 到着すると／
日数は どれくらいか／10 日間に なる／四方を 見渡すと／山中道端 ここでは ないか／
引率者に ついて行って／一心寮に 入って見ると／人夫室が 12 号で／事務室は 一つだ／
特別室も 一つで／炊事場は 一つだ／4 号室が 指定され／4 号室に 入って見ると／
寒々した 板の間に／22 名 同居だ／大夕張で 朝鮮の寮が／7 つの寮が あったが／

一心寮と 忠誠寮は／慶北人が 独り占め／わが半島 同胞人／何千人に なった／

夜明けの鳥 鳴いたか／時計の鐘が 時を打つ／5 時と 30 分は／明確に 仕事にいく時間／
初鐘の音に 起きて／朝飯を 食べて／弁当ひとつ 包み持ち／坑内衣服 整えて／
慌ただしく 入っていく／タバコ検査 厳重だ／坑内服を 全部着て／電灯パッと 点いた／
その電灯を 額の上に／帽子の端に 付けてみる／重いこと この上ない／外れること 始終／
駕籠のような 丸い電車／12 人が 乗って／電車いっぱいに なった／のろのろ 行く電車／
坑内に 行く際／涙流しながら 思うと／真っ暗闇 坑内に／何しに 入るのか／

現場に 行く道は／ここもかしこも 梯子のようだ／脚は なんでこんなに／痛くて 堪らない／
シャベルは どうして／こんなにも 重たいか／帽子と 電燈灯は／数限りなく 外れる／
降り立って みると／周りは すべて平地／天井を 見上げるに／横木 砕け／
鋭く 突き出た石が／頭を 殴るようで／腰を 伸ばせずに／這って 入って行くと／

こうしろ ああしろ／数多く させるが／言葉を知らず この半端者／何にも 分からない／
周りを見ると 朝鮮人が／10 数人 居たけど／内地人が 主人〔主将、監視員〕だから／日本語が 通用するのみ／
スコップで すくって入れる／早くしろ 催促する／一分も 休まず／一分も 休む間がない／

ぎっしり 並んだ坑木／崩れる 音聞いてみろ／はかない この命／どうして 守るのか／
星を見て 出たのが／星を見て 帰って来た／10 時間 働いたが／14 時間 かかった／
働いて 家に帰っても／誰も迎える 人はない／

行けないよ 行けない／脚が痛くて 行けない／寮長に 言うと／怒って 言うことには／
働けないなら ここに／何しに 来たか／大罪でも 犯した者なのか／刑務所の囚人と 変わりがない／
見えるのは けが人／聞こえるのは 死んだという話／〔毎日何人か 死んで来るので〕／
それを見るたびに／わが目は 驚く／
2 回は 飯呉れて／1 回は お粥を呉れる／元気な 若者が／腹を空かせて 堪えられない／

朝鮮の 我が家は／夕飯を 食べる時に／私は何故 働きに行くの／スコップを掴んで 考えるに／
今頃 我が家では／ぐっすり 眠っているだろうが／ここ私の この体は／深い 土の中で／
昼夜を 知らず／こんな 苦労をするのか／密かに溢れる 涙 / 本当に たくさん泣いた／

〔韓国語の原書では後半部分のみを掲載したが、訳書では『写真で見る強制動員の話－日本・北海道編－』（日本語、2020 年）77 頁とほぼ同じ内容を掲載。〕



諸給与其他明細表・夕張炭鉱

北海道にある夕張炭鉱に動員された朴鍾成（パク・ジョンソン）の諸給与其他明細表である。動員中に手の小指の切断事故に遭い、障害扶助料を受けた事実が記載されている。（朴鍾成の寄贈）



辞令・函館船渠　1943.7.11

北海道にある函館船渠株式会社で、趙炳春（チョ・ビョンチュン）を機械職場工員に命ずるという内容の文書である。辞令の中央上段に函館船渠株式会社のマークが描かれている。（趙炳春の寄贈）



一時帰鮮証明書　1943.11.27

故郷の父親が危篤だとして一時帰国しなければならない趙炳春に、函館警察署が 1943 年 11 月 27 日発給した証明書である。趙炳春は函館船渠株式会社に労務者として動員された。（趙炳春の寄贈）



給与封筒・三井砂川炭鉱

北海道にある三井砂川鉱業所に動員された李鳳玉（イ・ボンオク）の 10 月分の給与封筒である。（李ヨンスの寄贈）



日本赤十字社有功勲章

北海道にある大夕張鉱業所に動員された徐正萬（ソ・ジョンマン）が、さらに 2 年延長勤務して受けた勲章である。勲章の裏側に「明治 21 年（1888）日本赤十字社」と刻まれている。（徐正萬の寄贈）



外套・伊奈牛鉱山

北海道にある住友石炭鉱業株式会社伊奈牛鉱業所に動員されていた尹炳俊（ユン・ビョンジュン）が、帰還当時着ていた外套である。（尹ピョンウォンの寄贈）



毛布

北海道にある住友石炭鉱業株式会社伊奈牛鉱業所に動員されていた尹炳俊が、当時使用したものである。毛布には「昭和十七年製大支検定」と書かれている。（尹ピョンウォンの寄贈）



判子と判子ケース

北海道にある大夕張鉱業所に動員された徐正萬が、動員先で作った判子である。徐正萬の口述によれば、水晶判子と言って作ったがガラス判子であり、創氏名で作ったので帰還以後は使うことが無かったという。（徐正萬の寄贈）



弁当箱

北海道のある炭鉱に動員された高鳳基（コ・ボンギ）が昼食時に使用したものである。（高ユンホの寄贈）



三井芦別鉱業所労務者団体写真

北海道にある三井芦別鉱業所に動員された宋義永（ソン・ウィヨン）が、同僚たちと労務の服装で撮影した写真である。宋義永は左側から二番目にいる。（宋義永の寄贈）



従業員証・夕張炭鉱

北海道にある夕張炭鉱に動員された朴鍾成に発給された従業証である。表面には従業証番号（13890）、姓名、住所、採用日が、裏面には注意事項（心得）と鉱業所名が記載されている。（朴鍾成の寄贈）



新下川鉱山に動員された幼い労務者　1944

北海道にある三菱鉱業株式会社新下川鉱山に動員された金泰淳（キム・テスン）が、名寄市に外出した時、撮影した個人写真である。撮影当時、金泰淳の年齢は 15 歳で、左側の胸には「応徴士」のマークが付けられていた。（金泰淳の寄贈）



新幌内鉱業所の寮の前で撮影、解放記念団体写真　1945.9

北海道にある北海道炭礦汽船株式会社新幌内鉱業所に動員された張仁植（チャン・インシク）の団体写真である。張仁植の口述によれば、背景にある左側の建物は寄宿舎であり、右側の建物は食堂だという。また、写真の中の人物はみな論山〔忠清南道論山郡〕から動員された人たちであり、解放 1 ヶ月後に一緒に集まり記念写真として撮影したものだという。張仁植は最前列の右側から四番目にいる。（張仁植の寄贈）

尹秉烈コレクション

1924 年忠清南道洪城郡に生まれた尹秉烈（ユン・ビョンニョル）は、家の暮らし向きが困難で、昼は農作業を手伝い、夜は夜学に通っていた。そのなかで 1942 年 1 月、北海道炭鉱で人を募集するという広告を見た。1 日 3 円の賃金という言葉に、どうせ行かされる徴用ならば、今行く方がましだと思い、尹秉烈は友人何人かと募集に応じ、洪城郡から釜山へ、釜山から日本へ行き、日本で汽車に乗り、再び船に乗り北海道に到着した。尹秉烈は北海道にある北海道炭礦汽船（株）空知鉱業所神威炭鉱に動員された。体が壮健であり、穴の深いところで、暗くて恐怖の中で作業をさせられた。人によっては仕事を頑張ればさらに多くの賃金をもらったという。しかし会社側では貯金、食事代、甚だしきは着回しの作業服代まで賃金から引いたという。そこで働いている間、尹秉烈が 1 ヶ月働いて得た金はせいぜい 80 円から 90 円であった。それ以下である場合も多かった。こうして得た金を家に送るのは難しかった。2 年の契約を満了した尹秉烈は、強制的にさらに 2 年延長させられた。解放となって故郷に帰るまで 4 年を超える月日を、尹秉烈は神威炭鉱でひどい寒さと狭い穴の中で送ったのだ。解放となった後、尹秉烈は自分が使っていたタバコ箱から、使用した封筒、日本の銭と紙幣、タバコの粉、領収証、給与明細書、家族とやり取りした手紙まで、そのすべてのものをトランクにそっくりそのまま詰めて戻ってきた。



タバコ箱とタバコの粉

北海道にある北海道炭礦汽船株式会社空知鉱業所神威炭鉱に動員された尹秉烈が当時使用したものである。（尹秉烈の寄贈）





日本の銭と紙幣

尹秉烈（北炭空知・神威炭鉱に動員）が使用したものである。（尹秉烈の寄贈）



靴下

尹秉烈（北炭空知・神威炭鉱に動員）が購入した靴下である。（尹秉烈の寄贈）



トランク

尹秉烈（北炭空知・神威炭鉱に動員）が、解放後購入し帰還時に持ってきたものである。（尹秉烈の寄贈）



「住みやすい北海道の炭鉱」・空知鉱業所

尹秉烈がもらった北海道炭礦汽船株式会社空知鉱業所の広報冊子である。「故郷に贈る」という炭鉱の宣伝文と、全６枚の炭鉱の写真とその説明文がある。（尹秉烈の寄贈）







チリ紙と封筒

尹秉烈が神威炭鉱で使用したものである。（尹秉烈の寄贈）



徴用告知書

徴用告知書　1944.4.25

北海道庁長官の名義で 1944 年 4 月 25 日尹秉烈に交付された徴用告知書である。告知書番号は 2267 番であり、告知書には尹秉烈の本籍、創氏名、生年月日、作業場、担当業務などが記載されている。（尹秉烈の寄贈）



餞別金封筒

尹秉烈が今野栄吾からもらった餞別金封筒である。封筒には「御餞別　北海道空知郡歌志内町字神威鉱社宅 今野栄吾」と書かれている。〔歌志内町は現・歌志内市〕（尹秉烈の寄贈）



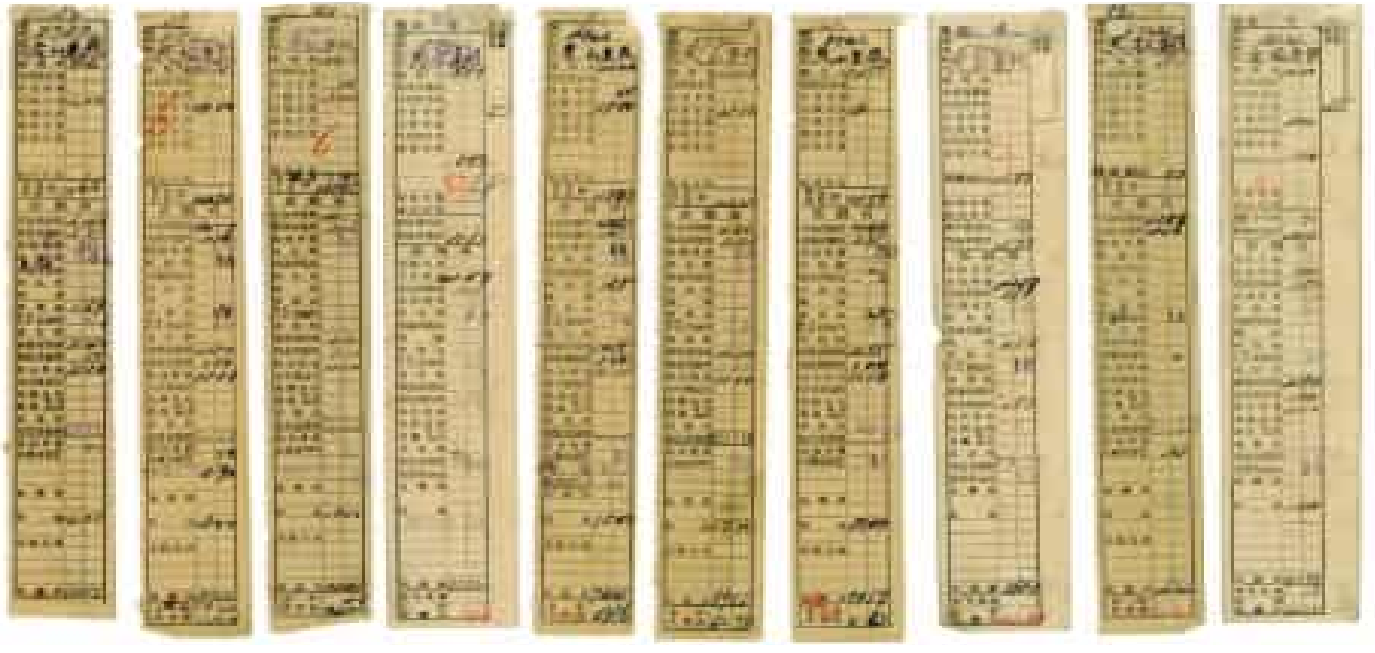
電信為替受領証書 1943・1944

尹秉烈が 1943 年 1 月 19 日 50 円 、1943 年 8 月 24 日 80 円、1944 年 5 月 10 日 490 円を送金した後、石狩神威郵便局で受け取ったものである。（尹秉烈の寄贈）
〔領収書に「石狩神威」の消印が押されている。〕



特殊郵便物受領証　1943・1944・1945

尹秉烈が尹秉熙（ユン・ビョンヒ、尹秉烈の兄）と尹東熙（ユン・ドンヒ）に 1943 年 1 月 18 日、1943 年 6 月 22 日、1943 年 9 月 22 日、1943 年 12 月 18 日、1944 年 8 月 4 日、1945 年 6 月 25 日など全 6 回に渡り郵便物を送った後、神威郵便局で受け取ったものである。（尹秉烈の寄贈）



給与明細書 1945

尹秉烈の給与明細書で彼の創氏名（武松秉烈）と鉱夫番号（8742）が書かれている。給与明細書は大きくは賃金と控除金の二つの部分に分けられていて、一番下段の残額支払金（差引支払高）欄には賃金が控除を超過すれば黒字で、控除が賃金を超過すれば赤字で記載された。控除が賃金を超過すると会社に債務が積もり、実際に労務者が受ける賃金はなくなる。（尹秉烈の寄贈）





身分証

尹秉烈（北炭空知・神威炭鉱に動員）が動員された時、受け取った身分証である。尹秉烈の姓名、職名、鉱夫番号、住所、採用日時が記載されていて、裏面には心得が書かれていた。尹秉烈の証言によれば、毎日、この身分証を持って通わなければならず、仕事をしに行く時は事務室に身分証と木札を差し出し、仕事が終われば身分証と木札を戻されたという。事務室ではこの身分証と木札を見て出勤と退勤を把握したという。（尹秉烈の寄贈）

心得

1　本証は始業の際必ず繰込所に提出すべし
2　終業の際は稼働操業証と引換に受取るべし
3　本証の受渡は必ず本人自身にてなすべし
4　本証紛失の場合は直に事務所に到り再交付を受くべし
（手数料金 15 銭）

空知鉱業所



手紙

尹秉烈が家族とやり取りした 10 枚の手紙と 5 つの封筒である。尹秉烈は「炭鉱から家に送る手紙は監督官が検閲するので、疑いを受けるような言葉は使わないで、安否や挨拶だけを伝えた」と口述した。（尹秉烈の寄贈）



決戦増産手当給与通知書　1944

通知書には定着手当、出勤手当、出炭手当、支給額総計、規約貯金、鉱夫預金、所得税、現金支払額が書かれている。昭和 19（1944）年度 1 期分、2 期分など、期別に支給していたものとみられる。（尹秉烈の寄贈）



李鍾錫回顧録



李鍾錫　（イ・ジョンソク）

1919 年、慶尚北道清道郡錦川面で出生

1944 年旧暦 9 月 14 日（新暦 10 月 30 日）北海道にある砂金鉱山（所在未詳）に動員

1945 年 8 月、解放後、故郷に帰還

李鍾錫の回顧録は、彼が強制動員され、「どうすることもできず」、慣れ親しんだ故郷を離れて釜山、日本の下関、青森を経て北海道に到着するまで、苦労した旅程と故郷に置いてきた父母、兄弟を懐かしがる心と重苦しい心を余すところなく表現している。

故郷に戻って当時を思い出しながら書いた彼の文章は、慶尚道方言を話す通りに書いたため、一部解釈しにくい部分もあるが、あの当時の「どうすることもできず」行く、いやでも行かなければならないという彼の心情が十分に込められている。

この回顧録は、旧暦 9 月 14 日に故郷を離れ、旧暦 10 月 7 日に北海道に到着したその長い旅程と、旧暦 10 月に腹まで雪が積もっている北海道での訓練と労働生活を詳しく描いている。李鍾錫本人がどの作業場に動員されたのか文章には表現されていなくとも、李鍾錫の表現の隅々に当時の強制動員被害者の心情がそのまま表れていて、彼らの状況を理解するのによい資料となると思われるため、ここに一部を紹介する。

李鍾錫は「誰を問わず、青年の身は国家に捧げた身。（中略）青年たちは戦場にも行かされ、徴用にも行かされたが、この時、私たち青年の身は自分のものであっても自分の思うとおりにできず、戦場に来いと言われたら行き、徴用にも来いと言われて行くしかない。その時、青年たちの心は閉ざされるが、さらに、父母の心はどうだったのだろうか。その当時、私たちは徴用で、『どうすることもできず』北海道まで行った」と記録していた。





（李スンガプの寄贈）

李鍾錫（イ・ジョンソク）の回顧録から

私たちが故郷に戻るのはもう無理だ。このように遠くまで行くのだから、故郷に戻ることは考えられない。私たちは心の中で、ここから故郷に戻ることはできないと思った。そんな時に私たちの心はどんなだったか？ 私たちの心は閉ざされ、車酔いに苦しめられ、嘔吐し、腹にあるもの全てを吐き出した。車の長い搭乗で全身は壊れそうに痛かった。死ぬ思いであった。死なないで生きていたので戻れたのだが、本当に死ぬかと思った。

そのように苦労し、もう着いたかと聞いたら、まだ半分の半分〔1/4〕が残っていると言われたので、私たちの言葉〔慶尚道方言〕で、「わぁ！ 本当に遠い、吐きながら行って、死ぬかも」と話した。ジャガイモを入れたご飯を食べて、車酔いに苦労しながら、おおよそ 6 日昼夜ぶりに、ようやく青森の海辺まできた。3 日昼夜も移動した車が狭く、来た人の皆が交代して席に座っては来たが、足はもちろんのこと、全身が痛くて青森の海辺に来て車から降りる際は、まともに歩くことができなかった。どうにかこうにかして行き、青森で連絡船に乗った。その連絡船に乗って渡れば、北海道の地だと言われた。

いま、北海道行きの連絡船が離れていく！ これから北海道の地は近づいていくのに、私たちの故郷はどこなのか、東西〔方向〕もわからず、心が焦がれた。連絡船で行く距離が、まだ遠いのに山の方を見ると、旧暦 10 月初めに、すでに雪が白い蒸し餅のように降った！ もう、雪があんなに降ったから、どれくらい寒いだろうと話しながら北海道に着き、皆が連絡船から降りた。降りると、もう顔が寒さでひりひりする。そんなにもう雪が降っているので、どれくらい寒かったのか？ けれど、どうしようもなく無情な汽車の中に体を乗せて行った。

行くには行ったが全身が壊れそうで、どうすることもできず行った。私たちの体はとても痛くて、車酔いでたくさん苦しめられたから、便所に行くとめまいで倒れたりした。でもどんなことがあっても死ぬことがあっても、国のためだとどうしようもなく行った。その苦労を思い出すと、言葉で言い尽くせない。そうして北海道の私たちの働く場所の近くの停留所まで来て、降りた。無情な汽車の中に、私たちの体を載せて 7 昼夜、丸 10 日を乗って来た。降りると主人〔引率者〕について行き、訓練所に入って 1 ヶ月間、訓練を受けた。その後、働く所〔作業場〕に戻り、仕事となった。私たちは旧暦 9 月 14 日に出発し、旧暦 10 月 7 日に到着した。

一晩寝て、その翌日から昼夜もなく雪が降り、丸 20 日も降り続いた。その間、日光は一度もない。1 ヶ月して天気がよい日は 3、4 日しかない。だから、雪がどれぐらい降るのか？ 雪がそんなにたくさん降っているのに、麦わら帽子をかぶって、雨具をつけて、丸一日仕事させる。だからどれくらい苦労したのか？ 私たちが訓練を受けた時に働いた村とは違う。働いたところは同様に昼夜なく雪がずっと 20 日は降り続き、日光は一つもない。雪がそんなに降るのに月は旧暦 10 月だ。降雪量はほぼ 8 尺〔お臍がある腰まで〕になったが、訓練しながら飯を炊く。木の枝を分けて用意したが、雪がとても多かった。私たちの身は国に捧げたものとされ、どうすることもできず、主人の指示する通りにすべてしなければならなかった。

私たちが数万里の他国にまで来るとき、私たちの自由、権利は少しもなかった。だから数万里の他国にまで来た。それで主人が言うようにしなければならない。そうするなかで、死んでもしなければならない。学校に訓練に行くと言われ、行ってみれば、雪が降って臍まで埋まっていた。その寒さ、その雪を全部踏みしめながら、その場で訓練を受けていると、足に雪の溶けた水が染み、手足が冷えて、手足がついているのか落ちているのかわからないほど凍って、感覚がなくなった。どれくらい寒かっただろうか？ そんな苦労をさせ、またその後に石炭を採りに行けと言われた。遠さは比較すれば、上芳旨〔李鍾錫の故郷である、慶尚北道清道郡錦川面から 2 ｋｍ位離れた場所〕まで行くのと同じように遠く、雪も 8 尺ぐらいに積もり、とても寒かった。しかし、石炭を採ってこいと言われたから、主人が言う通りに石炭を採りに行った。木製のかごを持って石炭を入れて来ると、その雪で手足が冷えて感覚がなくなり、手足がついているのかも分からないほどだった。どれくらい寒かったのか？ この石炭を採りに、一度だけでなく何度も行って来た。その寒さでどれほど苦労したのか？ その辛さは、言葉では言い切れないよ。

東北地方

青森県
岩手県
宮城県
秋田県
山形県
福島県



東北地方は日本の本州東北部にある青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県の 6 県をいう。土の質が痩せていて農産物も少ないところであり、昔から日本で最も貧しい地域だった。ここは農作業に朝鮮人軍人たち（農耕勤務隊）[1] が勤務した地域の中の一つである。〔農耕勤務隊の動員は東北では未確認、関東では茨城・栃木方面に動員。〕

秋田県の代表的な作業場として花岡鉱業所があり、ここは 1945 年 5 月 29 日発生した七ツ館坑水没事故で、朝鮮人 11 人と日本人 11 人が埋没した事件が最近明らかになったところでもある。鉱山を運営した株式会社藤田組は現在、DOWA ホールディングスに引き継がれている。

日本製鉄は 1880 年岩手県に釜石製鉄所をつくった。釜石の他にも福岡、大阪、北海道の室蘭、朝鮮半島の清津〔咸鏡北道〕にも製鉄所を置いた。朝鮮人労働者たちは 1940 年より日本製鉄に動員された。日本製鉄は社名を新日本製鉄に変えて現在に至る〔2019 年より日本製鉄に戻す〕。

青森県では、下北半島の大間鉄道工事、三沢飛行場の格納庫と弾薬地下貯蔵庫、樺山飛行場の滑走路工事などをはじめ、大湊港での荷役作業、防空壕、港湾建設と修理作業などの難工事に朝鮮人労務者が動員されたが、帰還途中、謎の爆発事故（浮島丸爆沈事件）で命を失った者もいる。

この他に日本三大炭田の中の一つである〔福島県から茨城県にある〕常磐炭田も 1939 年以後、約 2 万人を超える朝鮮人が炭鉱労務者として動員されたところである。

◉ 出典

1. 鄭惠瓊、『朝鮮の青年よ 皇国臣民となれ』（韓国語）、西海文集、2010 年。
2. 金ホギョン、権ギソク、ウ・ソンギュ、『日帝強制動員 その知られざる歴史』（韓国語）、トルベケ、2010 年。
3. 鄭惠瓊「戦時体制期 常磐炭田関連名簿資料を通して見た朝鮮人労務者の死亡実態」、『韓国民族運動史研究』、（韓国語）韓国民族運動史学会、2009 年。

1 〔農耕勤務隊については以下を参考。塚崎昌之、「朝鮮人徴兵制度の実態－武器を与えられなかった『兵士』たち」、『在日朝鮮人史研究』34、2004、53-77 頁。金廣烈、「1945 年上半期の日本陸軍農耕勤務隊と被動員韓人－長野県配置部隊を中心に－」（韓国語）、『韓日民族問題学会』、2010、89-122 頁。雨宮剛、『もう一つの強制連行 謎の農耕勤務隊 －足元からの検証－』、文芸社、2016。〕

秋田県



花岡鉱業所労務者の団体写真　1943.6.6

秋田県にある花岡鉱業所に動員された李鍾吉（イ・ジョンギル）と忠清南道唐津郡の出身者たちの団体写真である。「産業戦士 秋田県北秋田郡花岡鉱業所 忠清南道唐津部隊」と記載されている。（李フンウの寄贈）

身分証明書　間組夏瀬出張所 1945.8.10

黄敬俊（ファン・ギョンジュン）が秋田県夏瀬〔発電工事〕にある間組所属労務者として動員されていた1945年8月10日に受け取った身分証明書と用途未詳の定期券である。身分証には「當所労務員タルコトヲ証明ス」と創氏名（檜山敬俊）が自署されている。また間組株式会社夏瀬出張所長の職印が押されている。用途未詳の定期券には「高級定期券入No4」と記載されている。（黄敬俊の寄贈）





関東地方

茨城県
栃木県
群馬県
埼玉県
千葉県
東京都
神奈川県



関東地方は日本の本州東部に位置している。茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県がある。

東京では多数の朝鮮人が軍需工場、海運港湾施設、飛行場建設と地下施設物建設の工事場に動員され、特に陸軍が管轄していた軍の工事場が大変多かった。軍の工事場は地下軍事施設や特攻基地、陣地構築など関連施設物を建設するものが大部分であって、燃料倉庫や経理学校などを建設する工事場もあった。東京は軍需物資をつくる工場が多いため連合軍の爆撃を受けることも多かった。1945 年 3 月 10 日に起きた東京大空襲では全部で 10 万人ほどが死亡したが、この中には 1 万人の朝鮮人が含まれているとみられる。

千葉県は関東大地震の際、朝鮮人虐殺があった所で、軍事基地と施設が大変多い。神奈川県には横浜港があり、港湾運輸関連作業場と軍関連工事場などが多く、横須賀には海軍基地がある。代表的な作業場には日本鋼管株式会社があり、神奈川の作業場に 8,000 人近くの朝鮮人労務者を動員した。日本鋼管株式会社での作業は、特に過酷で危険なため、労務者が怪我をする比率が高く、公傷率はおおよそ 17.4% にのぼった。埼玉県には航空機と関連した部隊や地下工場が多かった。群馬県では中島飛行機株式会社が飛行機を生産していた。戦争末期には埼玉県、群馬県、茨城県に軍用食料生産のため、朝鮮人労務者を動員した。

◉ 出典

1. 鄭惠瓊、『朝鮮の青年よ 皇国臣民となれ』（韓国語）、西海文集、2010 年。
2. 対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会（調査 2 課 -2281 号）、「日本地域作業場現況」〔「作業場の実態」『委員会活動結果報告書』（韓国語）、2016 年、136 － 166 頁。 https://dl.nanet.go.kr/search/searchInnerDetail.do?controlNo=MONO1201625424〕

茨城県



産業戦士協和褒賞記念団体写真　1941.6.1

写真の下段には「半島労務員第四次産業戦士協和褒賞紀念撮影　皇紀二千六百一年六月一日」と記載されている。金秀奉（キム・スボン）は茨城県にある日本鉱業株式会社日立鉱山に労務者として動員された。（金ドクジンの寄贈）



感謝状　1944.7.20.

茨城県那珂郡静村の村長が、朝鮮農業報国青年隊員の朴均紘（パク・キュニョン）に、1944年6月1日より1944年6月30日まで農家に配属され、農繁期の難局を克服して食糧増産に寄与したことで感謝状を授与すると記載されている。〔静村は現・那珂市及び常陸大宮市〕（朴均紘の寄贈）







家族に送った手紙

金秀奉が、茨城県にある日本鉱業株式会社日立鉱山の労務者として動員中に家族に送った手紙である。「茨城県日立市日本鉱業株式会社日立鉱山事務所」の便箋の使用から、金秀奉の動員先を正確に確認できる。金秀奉は日立鉱山で労務者として働く中で、死亡した。（金ドクジンの寄贈）

栃木県



鉱業所（不詳、葛生町）の労務者団体写真

李西教（イ・ソギョ）が栃木県安蘇郡葛生町〔現・佐野市〕にある未詳の鉱業所で 1 ヶ月間教育を受けた後、同僚たちと一緒に撮影した団体写真である。胸に「応徴士」の徽章がある。〔葛生の石灰山鉱山と推定、胸章は徽章と訳出〕（李西教の寄贈）



軍隊手帳　1945

軍隊手帳から尹曦鉉（ユン・ヒヒョン）の創氏名、生年月日、本籍、履歴などが確認できる。特に履歴欄には、尹曦鉉が 1945 年 6 月 12 日に大邱師管区通信中隊を経て、6 月 16 日戦車第 1 師団司令部に転属、6 月 20 日釜山港を出発し〔山口県の〕仙崎港へ行った後、6 月 23 日栃木市に到着して経理部に配属された事項が記載されている。（尹ソンハンの寄贈）

千葉県



第 3 区隊卒業団体写真　1945.3

金法圭（キム・ポッキュ）の第 2 次幹部候補生隊第 3 区隊卒業団体写真である。裏面には「二十年三月卒業記念於第三区隊○戦友」と記載されている。金法圭は中列左側から二番目にいる。金法圭は千葉県にある高射第 1 師団独立高射砲第 3 大隊（〔晴〕第 1953 部隊）所属の軍人として動員された後、帰還した。〔高射第 1 師団独立高射砲第 3 大隊は市川市国府台に配置〕（金ヘスクの寄贈）



入隊当時に撮影した団体写真　1944.10.7

金法圭が軍人として動員され、東部第 1953 部隊の国分第 1 中隊に第 2 次乙種幹部候補生として入隊する当時、撮影した団体写真である。写真の裏面には「東部第一九五三部隊（○○○）国分第一中隊 昭和十九年○第二次乙種幹部候補生　昭和十九年十月七日入隊紀念写真」と記載されている。金法圭は前から二列目の右側から三番目にいる。（金ヘスクの寄贈）

東京都



東京製鉄株式会社労務者団体写真　1945.1.19

写真の裏面には「製鋼○昭和貳拾年一月十九日造○訓練所一同」と同僚たちの名前が記載されている。厳仁煥（オム・インファン）は最前列右側から三番目にいる。（厳仁煥の寄贈）

東京製鉄株式会社労務者団体写真　1944.2

厳仁煥は前列左側にいて、写真の裏面には「昭和拾九年二月中○○」と記載されている。（厳仁煥の寄贈）

芝浦海軍軍属団体写真

東京都芝浦に軍務員として動員されていた尹寿元（ユン・スウォン）と同僚たちの団体写真である。写真の下段には「芝浦海軍軍属江原団 85」と記載されている。尹寿元は最後列右側から二番目にいる。〔江原道から海軍芝浦施設部への動員〕（尹寿元の寄贈）



芝浦海軍軍属団体写真

尹寿元は前列の一番左にいる。〔ママ、前の写真で特定した尹寿元は、後列の真ん中にいる。〕（尹寿元の寄贈）





合同葬儀祭壇記念写真　1945

趙聖仁（チョ・ソンイン）は高射砲第 111 連隊に動員されたが、1945 年 4 月 14 日に東京都で死亡した。この写真は他の死亡者たちと合同葬儀を行った祭壇の全景写真である。（趙ゼヒの寄贈）



応徴士徽章　1944.12.1

朴濬和（パク・ジュンファ）が使用した「応徴士」徽章である。朴濬和は 1943 年 10 月頃より東京都の石川島造船所と長崎県の長崎鉱業所〔ママ〕に応徴士として動員された。（朴ソンヨンの寄贈）

応徴士とは「徴用に応じた人」という意味であり、国民徴用令によって動員された労務者を指す。労働力確保の目的で準備され、厚生省は 1943 年 7 月の徴用令改正により、8 月「応徴士服務規律」を公布、労務統制を強化した。



乙種会員手帳　1944.12.1

東京労務報国会青梅支部で李満承（イ・マンスン）に発給した乙種会員手帳である。李満承は合資会社梅田組に土工として動員された後、北海道の住友鉱業株式会社鴻之舞鉱業所、秋田県の花岡鉱業所などにも動員された。（李満承の寄贈）





身分証　1945.3.3

東京都にある石川島造船所に動員されていた厳正燮（オム・ジョンソプ）が、一時帰還のため交付された身分証である。第 4237 号身分証には本籍、現住所、勤務先などが記載されており、1945 年 3 月 3 日株式会社東京石川島造船所社長の職印が押されている。（厳正燮の寄贈）

身分証裏面：注意

1. 記載事項に変更があったときは直ぐ訂正を受けること
2. 退職其の他不要になったときは必ず返納すること
3. 本証を他人に貸し又は勝手に書き直しせぬこと
4. 本証はなるべくパス入に納め大切に取り扱うこと

神奈川県



神社の前での団体写真　日本鋼管

李相春（イ・サンチュン）が神奈川県の日本鋼管株式会社川崎工場への配置前に、神社の前で撮影した団体写真である。（李相春の寄贈）

強制動員労務者（場所不詳）

李相春の口述によれば、強制動員された労務者たちを点検し、組編成のために集めて撮影した写真だという。（李相春の寄贈）





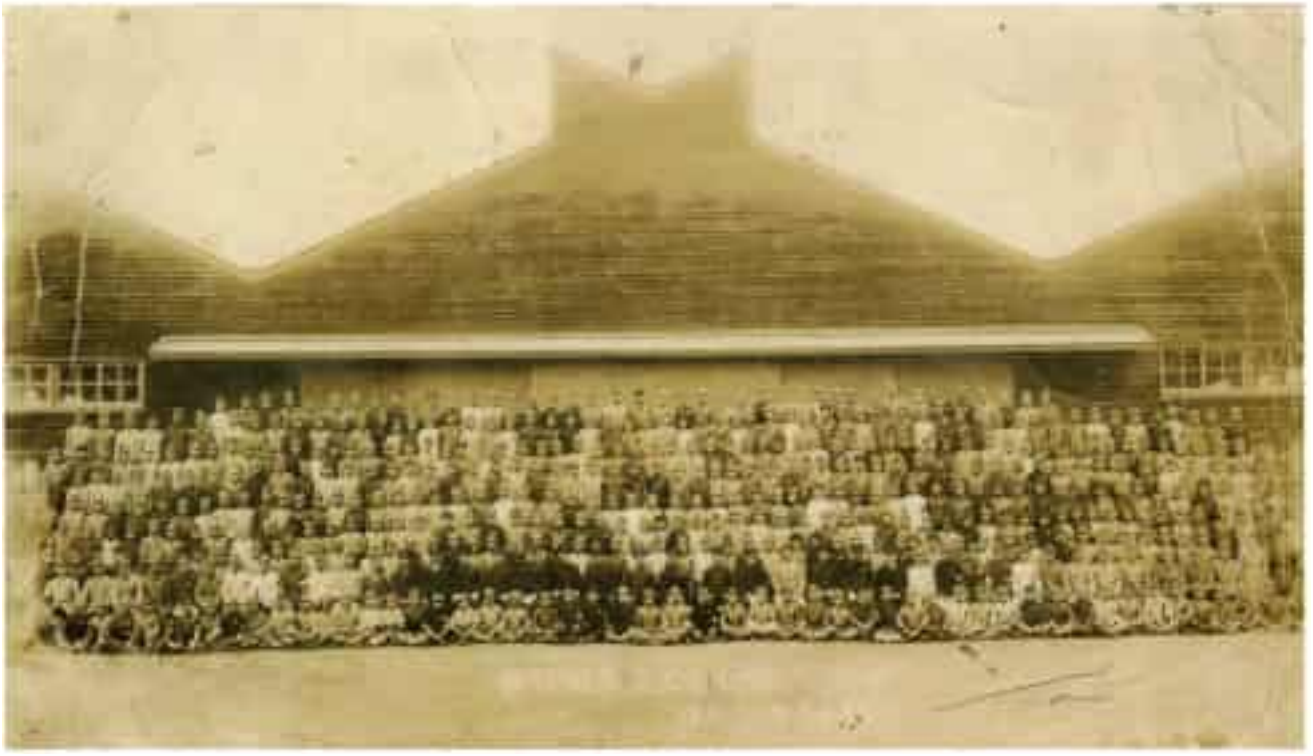
海軍志願兵団体写真　横須賀

神奈川県にある横須賀海軍病院などに動員されていた李泰植（イ・テシク）と同僚たちが、未詳の場所で撮影した団体記念写真である。（李シネの寄贈）



横須賀海軍病院所属軍人の個人写真

神奈川県にある横須賀海軍病院に動員された李泰植の軍服姿の個人写真である。（李シネの寄贈）





身分証明書（鎮海）と（第 51 海軍航空廠）記念団体写真　海軍航空廠

第 51 海軍航空廠長の職印が押された林炳模（イム・ビョンモ）の身分証である。1943 年 8 月 10 日に鎮海で訓練を終えて、神奈川県横須賀に移動するとき受け取った身分証だという。身分証には林炳模の名前と生年月日が記載されていて、「空技廠 19.6 検査」印が押されている。写真は鎮海で撮影した「第四回年少工員記念」団体写真である。写真裏面に「鎮海局気付第五十一海軍航空廠工員寄宿舎内一ノ四　林炳模」と記載されている。〔鎮海は当時、慶尚南道昌原郡鎮海邑、現、昌原市鎮海区。〕（林炳模の寄贈）

〔愛知県に動員された 玄昌旻（ヒョン・チャンミン）が寄贈した、鎮海海軍航空廠の団体写真（p61）と同じようである。〕



日本鋼管鶴見製鉄所労務者団体写真

神奈川県にある日本鋼管株式会社鶴見製鉄所に動員された、朴來紘（パク・ネヒョン）と同僚たちの団体写真である。（朴來紘の寄贈）



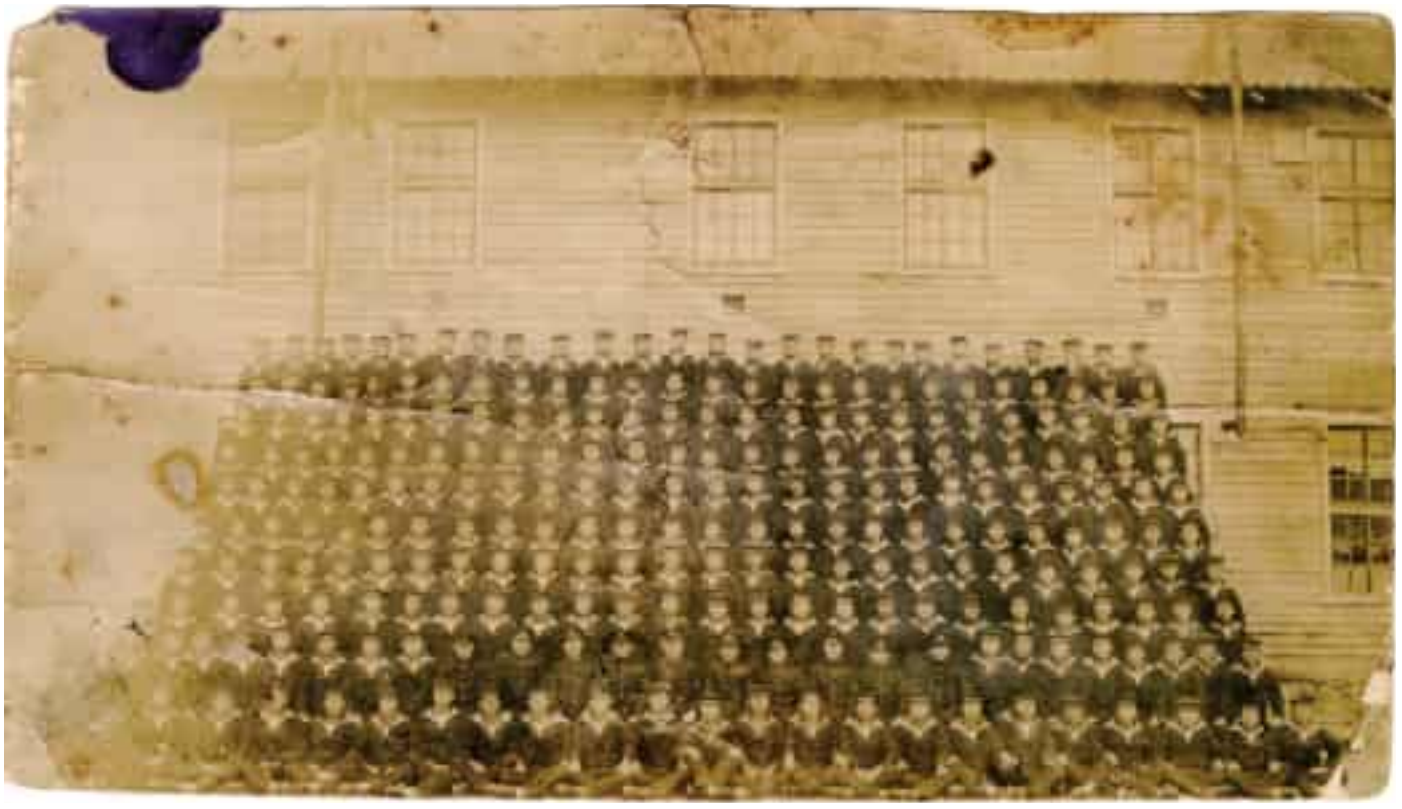
日本鋼管鶴見製鉄所労務者、神社の前での団体写真

神奈川県にある日本鋼管株式会社鶴見製鉄所に動員された朴來紘と同僚たちが、未詳の神社の前で撮影した団体写真である。（朴來紘の寄贈）



横須賀〔海軍〕施設部所属軍属見学記念写真

横須賀〔海軍〕施設部所属の軍務員に動員された李三寧（イ・サムニョン）と同僚たちが、横須賀港見学記念として撮影した団体写真である。背景となる船は日露戦争当時のもので見学のため展示していたという。李三寧は後列右側から二番目にいる。（李三寧の寄贈）



慶尚南道鎮海、朝鮮総督府海軍兵志願者訓練所　訓練兵団体写真

李東奭（イ・ドンソク）は神奈川県にある横須賀海軍警備隊に動員された。（李ドンホの寄贈）



労務者の個人写真



判子と判子ケース



お守り



認識票



日本の銭

横須賀線工事労務者個人写真

徐丙寛（ソ・ビョングァン）が神奈川県横須賀市にある写真館で誕生日記念として、作業服を着て撮影した写真である。同僚と一緒に撮影したが、同僚が死亡して切り取ったという。徐丙寛は間組所属の労務者として横須賀線延長工事に動員された。（徐丙寛の寄贈）

判子と判子ケース

徐丙寛（間組・横須賀線延長工事に動員）が使用した判子である。この判子は出勤、給与時に使用した。水晶の判子を会社が安く作ってくれるというので作ったと口述した。（徐丙寛の寄贈）

日本の銭

徐丙寛（間組・横須賀線延長工事に動員）が、所持していた日本の銭である。徐丙寛は当時戦争の状況によって銭の材質が異なっていたと口述した。（徐丙寛の寄贈）

認識票

徐丙寛（間組・横須賀線延長工事に動員）が所持していた認識票である。認識票は身分証と同じ用途であり、「京畿道安城郡安城邑道基里　達原丙寛」と記載されていた。徐丙寛は「死んだら認識票を見て家族を捜すと会社が言っていた」と口述した。〔安城郡は現・安城市〕（徐丙寛の寄贈）

お守り

日本のお守りの札は、身につけていれば危険が去っていくと信じられている。徐丙寛（間組・横須賀線延長工事に動員）が、当時もらったものである。（徐丙寛の寄贈）

農耕勤務隊

農耕勤務隊は 1945 年 1 月に日本政府の閣議決定により、2 月頃に組織された日本陸軍の食糧増産部隊である。初めは日本人で組織したが、5 月頃に朝鮮人に交代した。14 ～ 20 歳の朝鮮人 1 万～ 2 万人を平壌などの地で訓練させた後、日本の愛知、〔茨城、栃木〕、長野、静岡県などに連行して開拓させた。彼らは農耕勤務隊という名目で農作業のみならず、燃料採取、荒蕪地開墾、飛行場及び道路建設などの作業に投入された。農耕勤務隊は第 1 から第 5 まで五つの部隊が編成されていた。



第 1 農耕勤務隊動員者団体写真・静岡

李在云（イ・ジェウン）が軍人として動員され、静岡県にある第 1 農耕勤務隊へ立つ前、一緒に動員された同僚たちと撮影した写真である。李在云は後列左側から二番目にいて、前列の同僚たちは襷（たすき）を掛けて、奉公袋と日章旗を持っていることが確認できる。（李ジェフンの寄贈）



農耕勤務隊知人名簿・茨城

茨城県に軍人として動員された趙培英（チョ・ベヨン）が、一緒に同行した同僚たちの名簿を作成したものである。小さな手帳形態の資料で分量は 12 枚である。表紙には「知人名単」と記載されていて、以後、1 枚に 2 人ずつ全部で 22 人の名前が住所、創氏名とともに記載されている。名簿に記載された朝鮮人は全羅北道出身が 9 人、全羅南道が 4 人、慶尚南道が 8 人の全部で 22 人である。名簿にさらに多くの「知人」を記載するつもりだったのか、30 枚余が残されている。（趙培英の寄贈）



第 4 農耕勤務隊動員者家族写真・愛知

朴彦夏（パク・オナ）が動員された日、汽車の駅まで見送りに来た妻と一緒に撮影した写真である。朴彦夏は、愛知県にある第 4 農耕勤務隊所属の軍人として動員された後、帰還した。（朴彦夏の寄贈）



第 3 農耕勤務隊動員者個人写真・栃木

栃木県にある第 3 農耕勤務隊に動員された李雄馥（イ・ウンボク）の個人写真である。李雄馥は大阪府にある寿重工業株式会社に鋳物工として動員された後、農耕勤務隊に再び動員された。（李雄馥の寄贈）



第 2 農耕勤務隊動員者団体写真・茨城 1945.6.29

茨城県にある第 2 農耕勤務隊に動員された趙培英が、同僚たちと撮影した団体写真である。裏面には「昭和二十年六月二十九日　茨城県那珂郡玉川村第一国民学校庭付　農耕勤務隊記念写真　培英」が記載されている。〔玉川村は現・常陸大宮市〕（趙培英の寄贈）

中部地方

新潟県
富山県
石川県
福井県
山梨県
長野県
岐阜県
静岡県
愛知県



日本の本州の中央に位置し、東は東北地方と関東地方、西は関西地方、南は太平洋に接している。静岡県掛川市原野谷に航空機部品をつくるための地下工場が建設された。このため 1945 年 2 月頃より朝鮮人労働者約 2,000 ～ 3,000 人が動員された。静岡県清水市〔現･静岡市清水区〕には港湾や軍需工場､軍事基地などの施設を造成するため、朝鮮人が動員され、港湾には中国人も動員された。愛知県は陸海軍共通の要衝地だったため、名古屋陸軍造兵廠と豊川海軍工廠をはじめ多くの軍関係施設と飛行場、航空機関連工場があった。海軍工廠は海軍用の重火器弾薬工場であり、日本全国から学生や勤労挺身隊員が動員されたが、多い時は 5 万 6,000 人に達した。岐阜県は丸山ダム工事場と神岡鉱山などに多くの朝鮮人労務者が動員された。長野県には日本軍の大本営が建設され、象山地下壕工事のため 7,000 人ほどが動員された。富山県の不二越富山工場は朝鮮人少女（女子勤労挺身隊）が最も多く引っ張られた所である。

◉ 出典

1. 鄭惠瓊、『朝鮮の青年よ 皇国臣民となれ』（韓国語）、西海文集、2010 年。
2. 金ホギョン、権ギソク、ウ・ソンギュ、『日帝強制動員 その知られざる歴史』（韓国語）、トルベケ、2010 年。
3. 対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会（調査 2 課 -2281 号）、「日本地域作業場現況」〔「作業場の実態」『委員会活動結果報告書』（韓国語）、2016 年、136 － 166 頁。 https://dl.nanet.go.kr/search/searchInnerDetail.do?controlNo=MONO1201625424〕

新潟県



特設陸上勤務隊 119 中隊団体写真　1945.3.10

河憲培（ハ・ホンベ）が、新潟県にある特設陸上勤務隊 119 中隊所属の軍人として動員された時、同僚たちと撮影した団体写真である。写真の裏面には「昭和 20 年 3 月 10 日 22 歳　於新潟」と記載されている。河憲培は最後列の右側にいる。（河憲培の寄贈）



特設陸上勤務隊軍人名簿　1945.9.11

本名簿は 3 分隊所属全羅南道出身朝鮮人たちが、解放を迎え帰国前に作成した住所録である。名簿の表紙には「昭和二十年九月十一日　日本新潟で韓国人河憲培」と記載されている。6 枚両面にページごとに 13 ～ 15 人ずつ 140 人が記載されている。「旧帝国陸軍編制便覧」から特設陸上勤務隊 119 中隊が第 3654 部隊として新潟県に駐屯した事実を確認できる。（河憲培の寄贈）

長野県


表彰状
西原一夫
一金壹封
右者一年間勤績克勤
勞精神ノ助長實踐スル處
多大ニシテ其篤行他ノ模範
トスルニ足ル
依テ頭書ノ通リ贈與シ茲ニ
之ヲ表彰ス
昭和十九年三月八日
昭和電工株式會社塩尻工場
工場長 池内英郎

表彰状　1944.3.8

長野県の昭和電工株式会社塩尻工場に動員された韓免熙（ハン・ミョンヒ）に、1年勤続したことに対して授与した表彰状である。当時強制動員された労務者の士気増進のため、いろいろな形態の感謝状と賞状を授与してなだめようとしたとみられる。（韓免熙の寄贈）


感謝状
西原一夫
右者昭和電工株式會社塩尻
工場入社以來三箇年間忍苦
鍛練克職城奉公挺身
其本分完ニシテ寔勤勞
精神旺盛ニシテ殺模範ニ足
仍茲感謝意表ス
昭和十九年六月一日
長野縣協和會塩尻支會長
警部 伊藤重雄

感謝状　1944.6.1

韓免熙（昭和電工塩尻工場に動員）に長野県協和会塩尻支会から、3年間自身の本分を尽くして模範となったことに対して授与したという内容の感謝状である。（韓免熙の寄贈）


賞状
二員西原一夫
一金壹封
右者訓練工ニシテ入社ニ恒精健
勤勞精神徹精勤三箇年
及克應徴士本分致
其成績優良ニシテ殺模範
仍頭書通特別賞與金
五拾圓贈與茲之表彰
昭和十九年六月一日
昭和電工株式會社塩尻工場長
池内英郎

賞状　1944.6.1

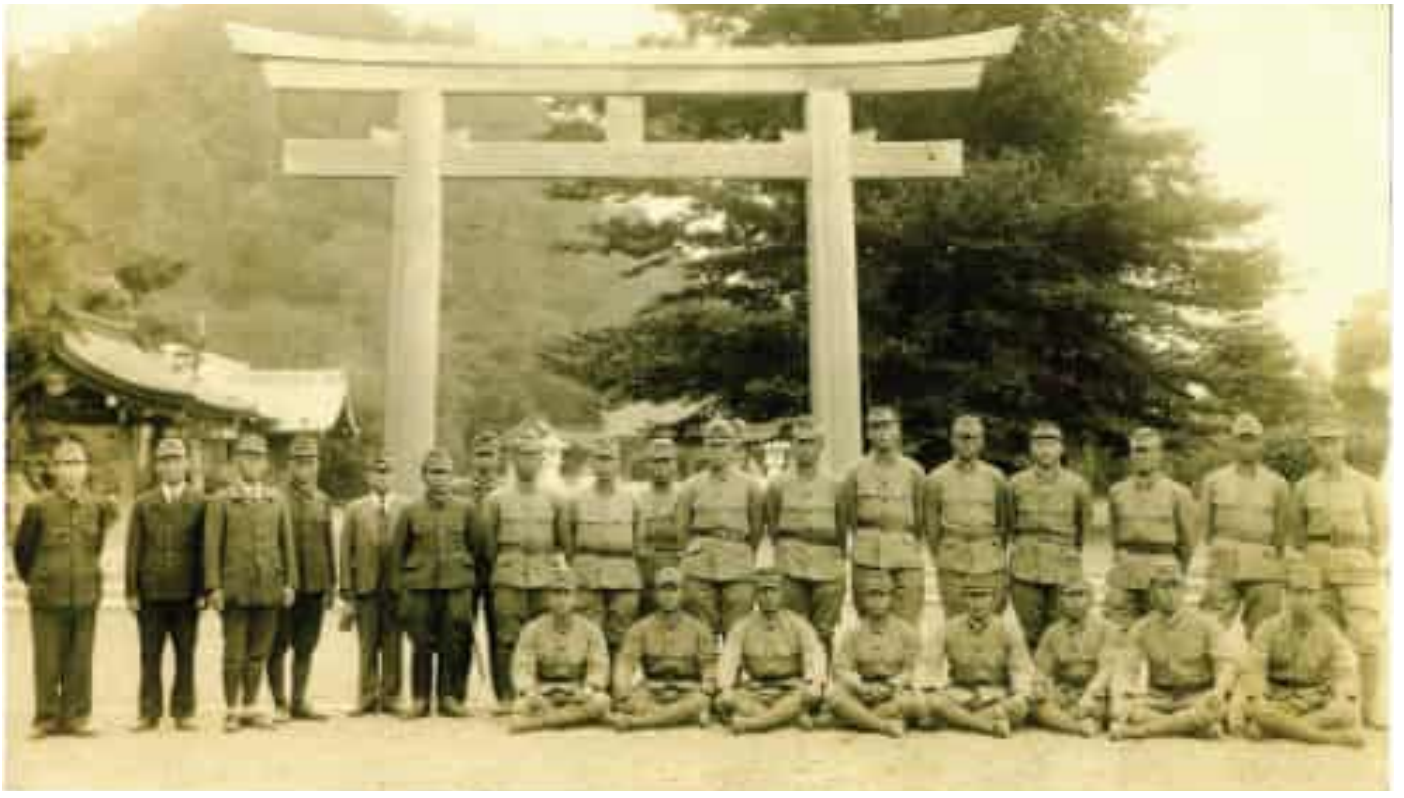
韓免熙（昭和電工塩尻工場に動員）に、3年間応徴士としての本分を尽くしたとし、特別賞与金を支給するという内容の賞状である。（韓免熙の寄贈）

岐阜県





岐阜県中部第 4 部隊に動員された軍人たち（金グァンスクの寄贈）



岐阜県中部第 4 部隊動員同僚団体写真（金グァンスクの寄贈）



国民労務手帳　1942.3.9

李判奎（イ・パンギュ）は岐阜県にある三井鉱山株式会社神岡鉱業所に動員されて、高山国民職業指導所長より国民労務手帳を交付され、1944 年 3 月 31 日まで使用した。手帳は氏名及び本籍移動欄、兵役関係移動欄、学歴などの事項移動欄、居住地住所移動欄、就業場住所欄、職業名及び技能程度欄、給料及び賃金欄、労働者年金保険関係事項欄、その他事項欄、補充欄など全部で 10 個の項目に区分されている。（李ヨングの寄贈）



身分証明書　NO.17965　1944.8.20

郭相紘（クァク・サンヒョン）が岐阜県にある川崎航空機工業株式会社岐阜工場に動員された時、受け取った身分証明書である。岐阜工場労務課長難波繁二が発給した証明書で、発給番号は 17965、郭相紘の現住所、創氏名、生年月日、発給日が記載されている。（郭相紘の寄贈）



割増金通知書　1944.12.21

郭相紘が 90 銭の割り増しを受けたという通知書である。通知書には郭相紘の職名、職員番号（18477）、創氏名（吉村新三郎）が記載されている。（郭相紘の寄贈）



厚生年金保険被保険者証

岐阜県から郭相紘に発給した厚生年金保険被保険者証である。被保険者台帳欄を見ると、保険番号は岐 152273 で、1944 年 6 月 15 日被保険者資格を得たものとされている。被保険者証下段に鉛筆で郭相紘の職場内職員番号である 18477 が記載されている。（郭相紘の寄贈）

静岡県



大嶽鉱業所労務者団体写真

金東寿（キム・ドンス）が静岡県にある中外鉱業株式会社大嶽鉱業所に労務者として動員された時、事務所前で撮った団体写真である。写真の背景から中外鉱業株式会社と大嶽鉱山などが確認できる。（金ボファンの寄贈）

帰還者の持ち物（食器、農耕勤務隊）

これは李根錫（イ・グンソク）が帰還当時、動員先から持ち帰ったもので、食事をするとき使用した容器である。容器の内側に日本陸軍のマークが確認できる。李根錫は静岡県にある第 1 農耕勤務隊所属の軍人として動員され、帰還した。（李ダルフンの寄贈）

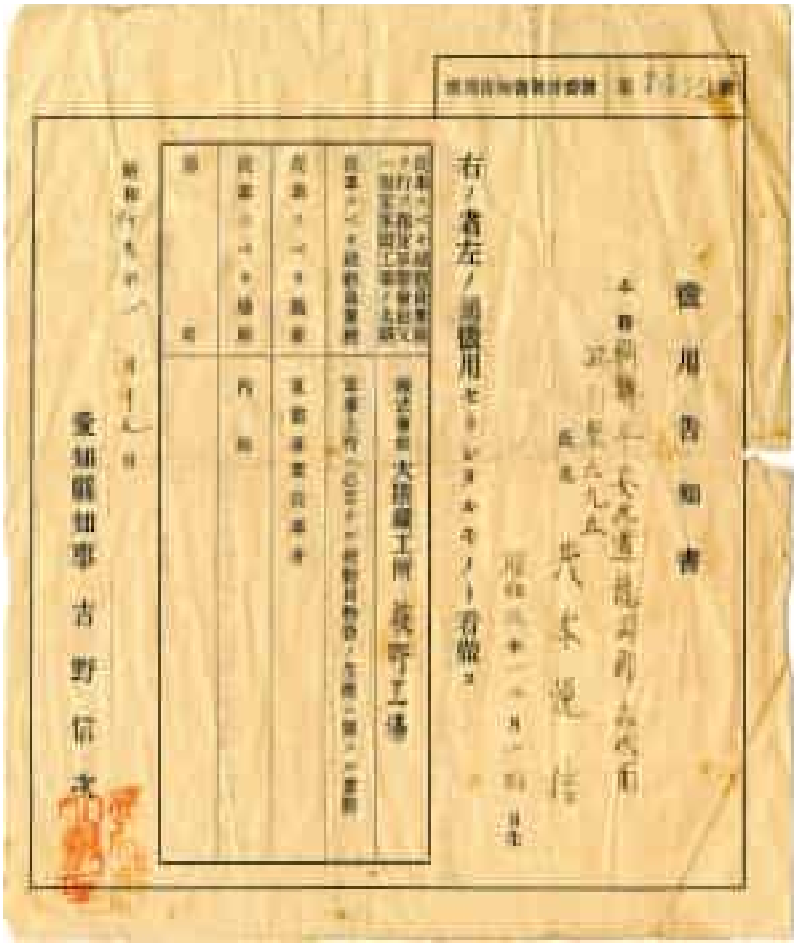


愛知県



三菱名古屋航空機製作所労務者団体写真

愛知県にある三菱重工業名古屋航空機製作所に動員された玄昌旻（ヒョン・チャンミン）と同僚たちが、名古屋の神社前で撮影した団体写真である。（玄昌旻の寄贈）



徴用告知書

右ノ者左ノ通徴用セラレタルモノト看做ス

大隈鉄工所 萩野工場

愛知縣知事 吉野信次

徴用告知書　1944.1.17　大隈鉄工所

愛知県知事吉野信次が李学賢（イ・ハッキョン、茂本悦信）を株式会社大隈鉄工所萩野工場に軍需事業従事者として徴用すると記載されている。（李学賢の寄贈）

鎮海海軍航空廠団体写真 1943.5.5

玄昌旻（ヒョン・チャンミン）は、愛知県にある三菱重工業名古屋航空機製作所に動員される前に、鎮海海軍航空廠で訓練を受けた。写真の下段に「第四回年少工員記念　昭和十八年五月五日」と記載されている。（玄昌旻の寄贈）
〔神奈川県横須賀に動員された林炳模（イム・ビョンモ）が寄贈した、鎮海で撮影した「第四回年少工員記念」団体写真（p48）と同じようである。〕

瀬戸勤労報国隊三菱美唄礦業所　誠心寮隣保班精勤競争優勝記念写真　1944.1.17

愛知県瀬戸市から北海道にある三菱鉱業（株）美唄礦業所に動員された朝鮮人たちの団体写真である。写真の中の人物たちは「地下足袋」と脚絆を着けていて、キャップランプ（帽子に付ける電球）が付けられる白いプラスティックのついた帽子をかぶっている。（金鍾培（キム・ジョンベ）の寄贈）



戦時体制期における女性労働力の動員と朝鮮女子勤労挺身隊

日帝は労働力不足が甚だしくなると、男性の労働力を主要軍需産業に集中配置し、補充が必要となった職種に女性の労働力を動員し始めた。食糧確保のため農村女性の動員を強化し、「勤労奉仕」や「勤労報国隊」の形で各種の土木工事場に動員することもあった。1944 年になると「航空機増産」のためより多くの労働力が必要になり、女性たちを軍需工場に本格的に動員した。「女子勤労挺身隊」（または「女子挺身隊」）はこうした労働力動員の要求からできたものである。これは女性労働力動員の諸形態のひとつにすぎず、女性動員のすべてを示すものではない。すでに施行されていた女子勤労挺身隊制度に法的根拠と強制力を付与するため、1944 年 8 月 23 日女子挺身勤労令が公布、実施された。対象は 12 歳以上 40 歳未満の未婚女性に制限したが、対象範囲に入らなくとも「志願」として可能になると規定されていた。「朝鮮女子勤労挺身隊」は 1944 年 4 月頃より日本地域の軍需工場に動員された。朝鮮総督府のいわゆる「斡旋指導」により 2 年期限で航空機製作工場、紡績工場、機械製作工場などに配置された。現在明らかになった動員先は、不二越富山工場、三菱名古屋航空機製作所、東京麻糸沼津工場である。朝鮮女子勤労挺身隊は 14 ～ 16 歳の幼年労働者だったが、軍隊式労働規律のなかでの長時間労働に苦しめられた。そのため、大小の負傷が絶えなかった。そのうえ米軍の空襲が激しくなる中で恐怖感と空腹までも加わった。帰国してからは、日本での挺身隊の経験を疑う家父長制的な視線を受け続け、沈黙と隠蔽をしなければならなかった。

◉ 出典

日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会、『朝鮮女子勤労挺身隊、その経験と記憶』（韓国語）、2008 年



勤労挺身隊労務者団体写真

金喜庚（キム・ヒギョン）が富山県にある不二越株式会社に動員されていく前に、徳寿国民学校〔京城徳寿公立普通学校〕で父母、先生たちと撮影した団体写真である。金喜庚は最前列の右側から四番目にいる。（金喜庚の寄贈）



不二越株式会社寮団体写真

金喜庚が富山県にある不二越株式会社の寮で同僚たちと撮影した団体写真である。金喜庚は最前列の右端にいる。（金喜庚の寄贈）

不二越株式会社労務者団体写真

裵順礼（ペ・スルレ）が富山県にある不二越株式会社富山工場に動員された時、撮った団体写真である。（裵順礼の寄贈）





名古屋航空機製作所労務者団体写真

愛知県にある三菱重工業名古屋航空機製作所に動員された朴順徳（パク・スンドク）と同僚たちが、愛知県庁の前で撮影した団体写真である。朴順徳は大田（テジョン）普門学院を卒業して、三邦（サムバン）社という工場に勤めていた際、大田職業紹介所に呼び出され、三菱重工業名古屋飛行機製作所に動員された。〔当時、大田は忠清南道大田府。〕（朴順徳の寄贈）



不二越株式会社労務者団体写真

呉景愛（オ・ギョンエ）が富山県にある不二越株式会社富山工場に動員された時、撮った団体写真である。（呉景愛の寄贈）



名古屋航空機製作所寮の前での団体写真

愛知県にある三菱重工業名古屋航空機製作所に動員された朴海玉（パク・ヘオク）は、飛行機の部品図面をアルミニウム板に引く仕事をした。（朴海玉の寄贈）



名古屋航空機製作所労務者団体写真

愛知県にある三菱重工業名古屋航空機製作所に動員された朴海玉と同僚たちの団体写真である。（朴海玉の寄贈）



名古屋航空機製作所労務者個人写真

李順男（イ・スンナム）は愛知県にある三菱重工業名古屋航空機製作所に動員された。（李順男の寄贈）



名古屋航空機製作所寮の前での団体写真

同僚たちと一緒に撮影した李順男の団体写真である。（李順男の寄贈）



不二越株式会社　労務者身分証

身分証には所属、入社日、本籍地、生年月日などと、教育勅語、詔書、不二越の社歌、十訓などが書かれている。この身分証に記載された内容によって裵順礼が 1945 年 3 月 1 日に入社したことがわかる。（裵順礼の寄贈）

関西地方

三重県
滋賀県
京都府
大阪府
兵庫県
奈良県
和歌山県



関西地方は中国地方と中部地方の間にある。代表的な観光地の京都府、大阪府の 2 府と三重県、滋賀県、兵庫県、奈良県、和歌山県の 5 県からなっている。

京都と奈良は飛鳥より平安京に至るまで王都であり、明治維新の東京遷都まで名実ともに日本の中心であった。日本は関西でも軍需工場を稼働させ、地下施設をつくった。また港が隣接し、軍需物資を迅速に積み出すことができた。こうした理由から関西地域は造船所と軍需工場が多かった。当時の代表的な企業としては松下電器産業（株）（現在、パナソニック）、日立造船（株）、日本製鉄（株）、〔住友金属工業（株）、〕などが大阪府にあった。また、兵庫県西宮市甲陽園（甲山の麓）の地下工場工事には朝鮮人 600 人が動員され、軍務員として動員された第 200 設営隊員もいた。三重県では石原産業が紀州鉱山という銅鉱山を経営し、朝鮮人 1,000 人余を動員した。

◉ 出典

1. 鄭惠瓊、『朝鮮の青年よ 皇国臣民となれ』（韓国語）、西海文集、2010 年。
2. 対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会（調査 2 課 -2281 号）、「日本地域作業場現況」〔「作業場の実態」『委員会活動結果報告書』（韓国語）、2016 年、136 ― 166 頁。 https://dl.nanet.go.kr/search/searchInnerDetail.do?controlNo=MONO1201625424〕

三重県

朝鮮農業報国青年隊写真帳

張賢相（チャン・ヒョンサン）が、三重県にある朝鮮農業報国青年隊に動員された時の資料を集めて作った写真帳で、21 枚で構成されている。当時の写真、文書、動員先の地図、日本人農家の目録などが収録され、動員先での生活を伺うことができる。（張ビョンフンの寄贈）

朝鮮農業報国青年隊は総督府の農村統制政策により、農村青年層に対する労働力収奪政策の一環として編成された。朝鮮人青年を農繁期に、日本の農家へ労働力を提供するために派遣する制度で、朝鮮総督府の直接指揮のもと 1940 年頃から 1944 年まで毎年 2 回ずつ 実施された。郡で選抜する形式でなされ、派遣対象は強制動員の対象から除外される代わりに、3 ～ 6 ヶ月間、無償で労働力を提供した。





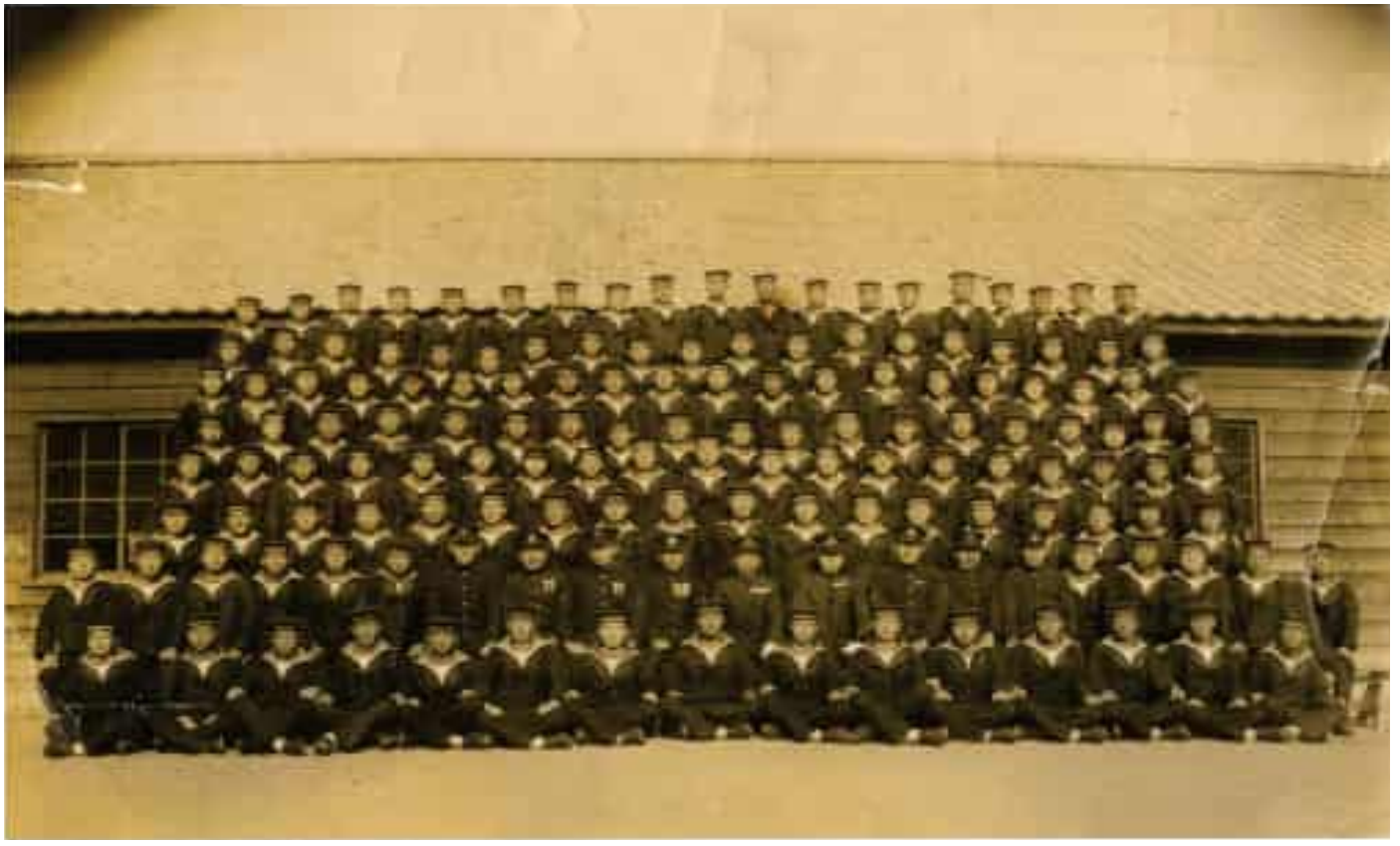




物品要請証明書　東海護謨工業会社

半島応徴工員の宋斗煥（ソン・ドゥファン）に物品（品名：衣類）が必要であることを証明する内容である。宋斗煥の創氏名と工員番号（57514）、作業場住所（三重県四日市市末広町　東海護謨工業会社）などが確認できる。当時、宋斗煥は年齢徴用とされ（1922 年生を対象）、三菱重工業名古屋航空機製作所に配置されたが、空襲で三重県にある東海護謨工業会社に配置転換されたものと推定される。（宋斗煥の寄贈）〔「東海護謨工業」は「東海ゴム工業」を経て、現在は「住友理工」〕

滋賀県



鎮海海兵団教育修了記念団体写真　1944.8.1

金紀浩（キム・ギホ）が慶尚南道昌原郡鎮海邑にある鎮海海兵団に入団し、6 ヶ月間の教育を修了した後、撮影した団体写真である。写真の裏面には「1944.8.1 鎮海海軍海兵団入団 6 ヶ月教育修了後（1945 年）」と記載されている。（金紀浩の寄贈）



大津海軍航空隊　個人写真　1945

金紀浩が滋賀県にある大津海軍航空隊に配置され、運転兵として服務する時に撮影した個人写真である（1945 年）。写真の左側と右側には海軍の階級章とバッジが確認でき、写真の裏面には「日本滋賀県大津海軍航空隊車庫に配置され、運転兵として勤務していた時 =1945 年」と記載されている。（金紀浩の寄贈）



滋賀県・場所不詳・部隊団体写真

鄭東柱（チョン・ドンジュ）が滋賀県にある未詳の部隊で撮影した団体写真である。鄭東柱は七列目〔最後列〕の左側から四番目にいる。（鄭東柱の寄贈）



滋賀県・場所不詳・部隊団体写真・第 9 中隊第 35 区隊

鄭東柱が滋賀県にある未詳の部隊の第 9 中隊第 35 区隊の隊員たちと、一緒に撮影した団体写真である。写真の下段には「第九中隊第三十五区隊」と記載されている。（鄭東柱の寄贈）



軍人に動員された時に撮影した団体写真　中島隊千賀班　1945.5.20

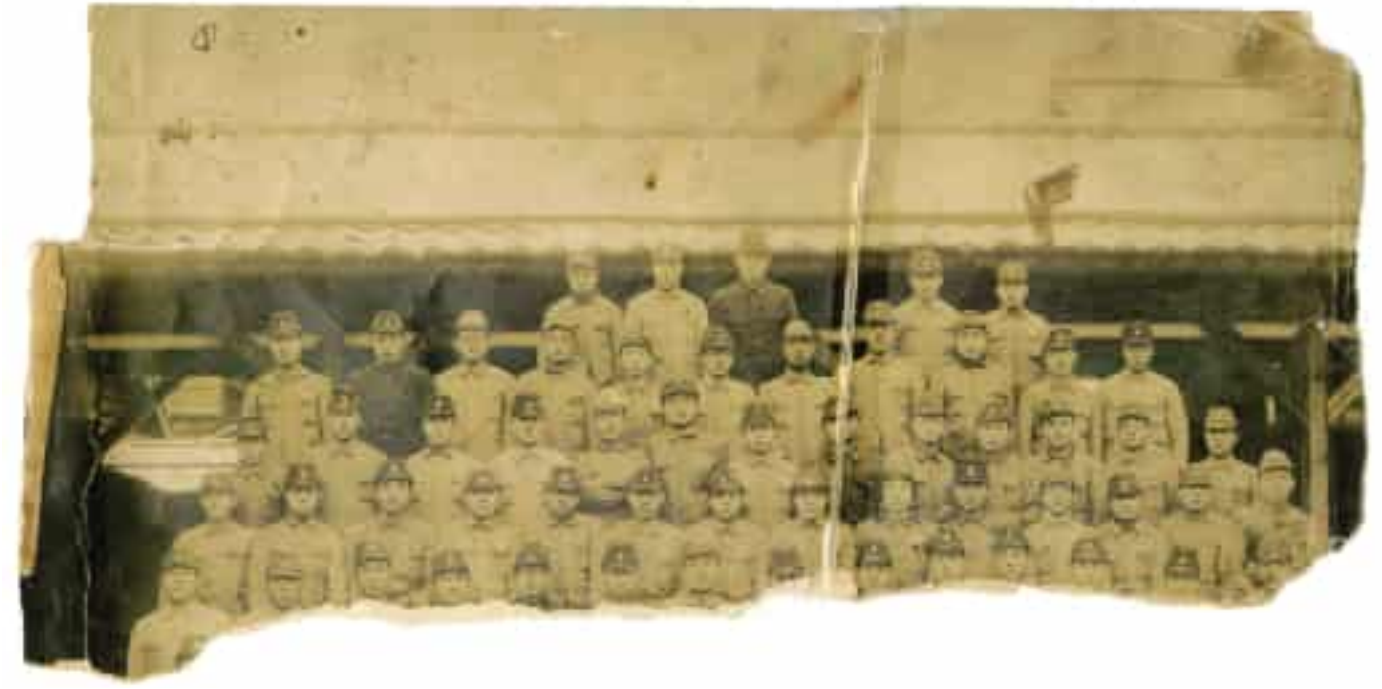
許珪（ホ・ギュ）が軍人として動員されていた当時に撮った団体写真で、写真の裏面には「1945.5.20. 中島隊千賀班一同紀念写真」と記載されている。許珪は二列目の一番右側にいる。（許珪の寄贈）

4199 部隊　田中小隊の団体写真

許珪が滋賀県にある 4199 部隊所属の軍人として動員されていた当時に撮った団体写真で、下段には「4199 部隊田中小隊」と記載されている。許珪は最後列の右側から六番目にいる。（許珪の寄贈）



京都府



舞鶴〔海軍〕施設部軍属団体写真

河興淑（ハ・フンスク）が京都府にある舞鶴〔海軍〕施設部土工員として動員されていた当時、撮影した団体写真である。河興淑は上から二列目の一番左側にいる。（河ソクボンの寄贈）



舞鶴〔海軍〕施設部軍属団体写真　1943

河興淑が舞鶴〔海軍〕施設部に土工員として動員されていた当時、同僚と撮った写真で、裏面には撮影された年度（1943 年）と、一緒に撮った同僚たちの名前が記載されている。河興淑は右側から二番目にいる。（河ソクボンの寄贈）

大阪府





住友金属工業労務者の団体及び個人写真

崔鎬元（チェ・ホウォン）が、大阪府にある住友金属工業伸銅所朝鮮人宿舎前で撮った団体写真である。崔鎬元は前から三列目の左側から四番目にいる。（崔インテクの寄贈）



大阪府極東精密工作所団体写真　1945.3.28

金正允（キム・ジョンユン）が、大阪府にある極東精密工作所軍需品工場の事務室前で、社長をはじめとした幹部たちと一緒に撮った写真である。写真の裏面には「大阪市極東精密工作所事務室前　昭和二十年三月二十八日」と記載されている。金正允は最後列の左側から三番目にいる。（金正允の寄贈）



壽重工業株式会社労務者団体写真

李雄馥（イ・ウンボク）が大阪府泉大津市にある壽重工業株式会社に動員された時と推定される団体写真である。この後、李雄馥は栃木県にある第３農耕勤務隊に再び動員された。（李雄馥の寄贈）



奈良市産業戦士訓練所入所者団体写真　1943.3.5

孫海鎮（ソン・ヘジン）が、大阪府にある大同製鋼株式会社に動員された時、作業訓練と精神教育などを受けるため入所した、奈良市産業戦士訓練所で撮影した団体写真である。写真の下段に「日本国奈良市産業戦士訓練所入所記念 .1943.3.5.（昭和 18 年）」と記載されている。（孫海鎮の寄贈）



応徴士団体写真　1945

玄宇哲（ヒョン・ウチョル）が大阪府にある未詳の造船所に労務者として動員された時、同僚たちと一緒に撮影した写真で、胸に「応徴士」の徽章が確認できる。玄宇哲は後列左端にいる。（玄スビョンの寄贈）



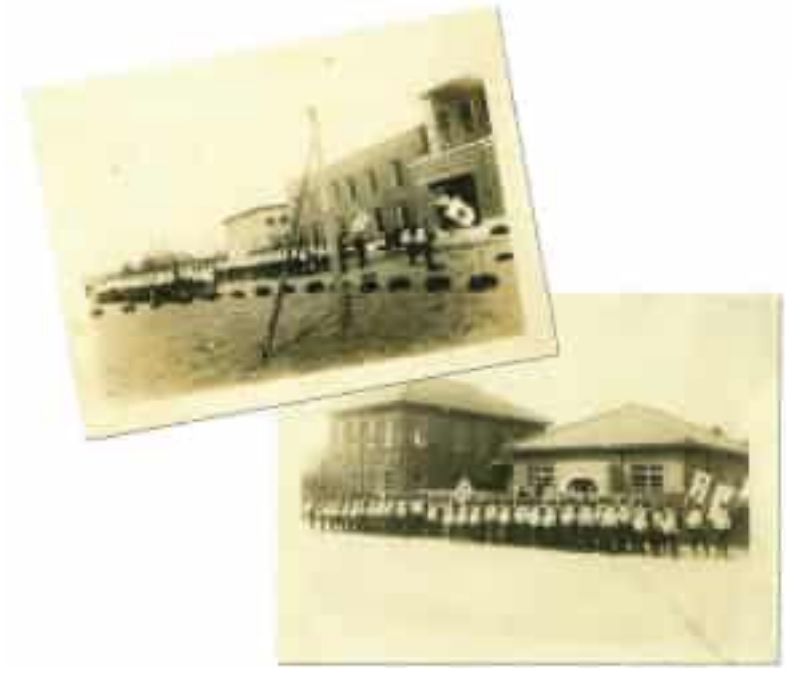
大阪海兵団団体写真　1945

呉炳璇（オ・ビョンソン）が大阪海兵団で撮影した団体写真で、裏面には「教班長以下戦友一同　第二十七分隊七教班　和歌○○○○○○海兵団」と記載されている。（呉炳璇の寄贈）



動員前の身体検査・思想調査
日本製鉄大阪工場　1943

呉炳璇が大阪府にある日本製鉄株式会社大阪工場に動員される前に、〔忠清北道〕清州医療院と清州警察署で身体検査及び思想調査を受けている様子である。（呉炳璇の寄贈）



忠北道庁と清州警察署に集められた
朝鮮人労務者 1943

呉炳璇が日本製鉄株式会社大阪工場に出発する前に、忠清北道道庁と清州警察署前で挨拶する様子の団体写真である。（呉炳璇の寄贈）



清州神社参拝後の行進　1943.4

呉炳璇が日本製鉄株式会社大阪工場に出発する前に、清州神社に参拝後、行進する様子の団体写真である。（呉炳璇の寄贈）

清州駅に集結した朝鮮人労務者、日本製鉄　1943

日本製鉄株式会社大阪工場に徴用された労務者たちが出発する前に、清州駅に集結した様子である。（呉炳璇の寄贈）





清州無心川広場での強制訓練　1945

呉炳璇が清州無心川広場で強制訓練を受ける様子である。呉炳璇は日本製鉄株式会社大阪工場労務者として動員されたが、大阪海兵団所属の軍人として再び動員された。（呉炳璇の寄贈）

壽勤労隊第 2 期生　団体写真　1945

朴柱栄（パク・ジュヨン）が、大阪府泉大津市にある壽重工業株式会社で撮影した団体写真である。写真の下段に「壽勤労隊第二期生一周年記念」と記載されていて、写真の建物には「壽重工業株式会社大津工場」という表札が確認できる。この後、朴柱栄は鎮海警備部所属の軍人として再び動員された後、帰還した。（朴柱栄の寄贈）





藤永田造船所動員　全北隊団体写真

曺秉哲（チョ・ビョンチョル）が大阪府にある藤永田造船所に動員された時、全羅北道錦山郡〔現在は忠清南道〕、淳昌郡の人たちと一緒に撮った団体写真である。写真内の右側の立て札に「全北隊記念錦山、淳昌」と、左側の立て札に「異郷の我らは増産に特攻」と記載されている。70 人余りの中、曺秉哲は前列左側から三番目にいる。（曺秉哲の寄贈）



日本製鉄大阪製鉄所第 3 期生団体写真

金熙俊（キム・ヒジュン）が、大阪府にある日本製鉄株式会社大阪製鉄所第 3 期生一同 50 人余りと、一緒に撮影した労務服装の団体写真である。写真の下段には「日本製鉄株式会社大阪製鉄所第 3 期生合同」と記載されている。（金熙俊の寄贈）

兵庫県



生野鉱業所労務者団体写真　1943

河憲中（ハ・ホンジュン）が兵庫県にある三菱鉱業株式会社生野鉱業所に動員された時、撮った団体写真である。（河テヨンの寄贈）



生野鉱業所労務者個人写真

河憲中が労務者の服装にマスクを着用した個人写真で、右胸に「河本」が確認できる。写真の右側下段には「T.USUI IKUNO」と書かれており、三菱鉱業株式会社生野鉱業所で労役に服した際、撮影したものと推定される。（河テヨンの寄贈）



山岡内燃機青年学校労務者団体写真

許在英（ホ・ジェヨン）が兵庫県にある山岡内燃機株式会社に労務者として動員された時、同僚たちと一緒に撮影した写真で、「山岡内燃機青年学校」という建物名が確認できる。（許在英の寄贈）



健康保険被保険者証　中山製鋼所尼崎工場　1942.9.21

1942年9月21日、李承丙（イ・スンビョン）に発給した健康保険被保険者証で、李承丙が兵庫県にある中山製鋼所尼崎工場に動員された事と被保険者資格取得日（1942.8.18.）が確認できる。（李シンジクの寄贈）



旭硝子株式会社労務者団体写真　1944.2.17

金大卿（キム・デギョン）が兵庫県尼崎市にある旭硝子株式会社に労務者として動員された時、撮影した団体写真である。（金大卿の寄贈）



漆谷郡守の激励に対する応徴士代表答辞
1944.10.17　川崎造船所

1944 年 10 月 17 日、朴京鎬（パク・ギョンホ）が兵庫県にある川崎造船所に動員された応徴士たちを代表して、〔慶尚北道〕漆谷郡守の激励に応じた答辞である。（朴京鎬の寄贈）



中山製鋼所尼崎工場出勤票　1942.9

兵庫県にある中山製鋼所尼崎工場で発給した出勤票（24 枚）である。1942 年 9 月より 11 月まで 3 枚、1943 年 1 月より 12 月まで 13 枚（3 月が 2 枚）、1944 年 1 月より 8 月まで 8 枚の全部で 24 枚からなっている。表面には作業場の入・退所時間と一日の作業量が記載され、裏面にはこれをもとに作成した俸給の明細が記載されている。（李シンジクの寄贈）



中山製鋼所尼崎工場　衣料切符

日本の商工省で発給した衣料切符で、交付責任者は尼崎市長となっている。発給された李承丙の創氏名と住所地「尼崎市中山製鋼第２寄宿舎」が記載されている。（李シンジクの寄贈）





入隊前の記念写真　西宮市

左側の写真は李殷植（イ・ウンシク）が、兵庫県西宮市の昭和電極株式会社鳴尾工場に軍務員として動員中、宿舎前で撮影した団体写真である。李殷植は前列左側から四番目にいる。右側の写真は鳴尾工場から軍人として再び動員されるにあたり、入営する前に撮影したものである。（李殷植の寄贈）

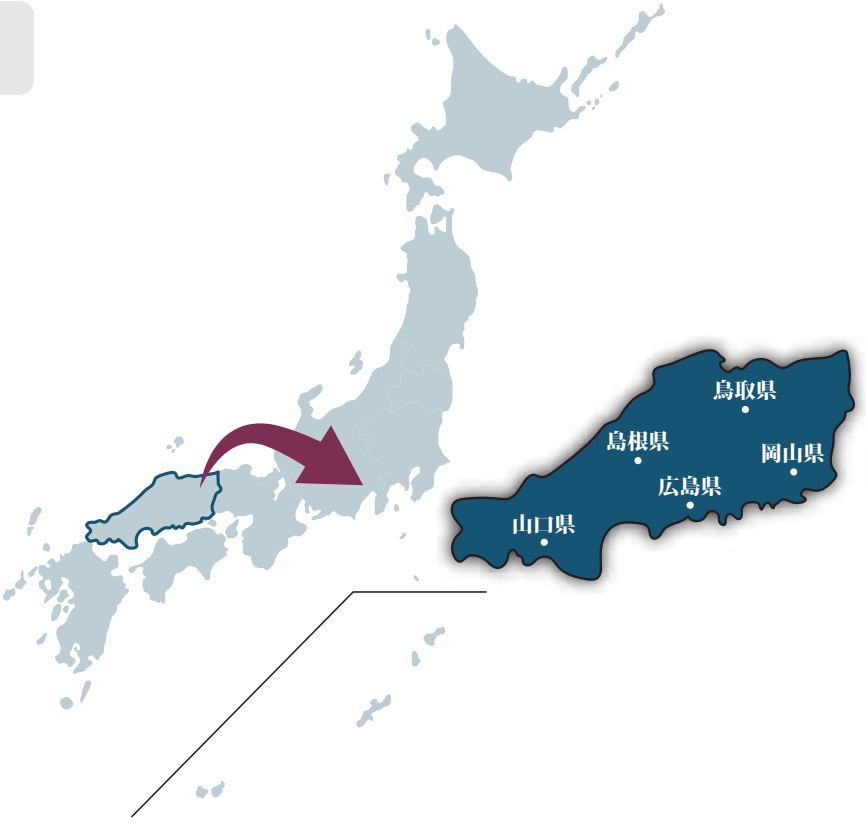


身分証　川崎重工業艦船工場　1944.11.1

趙元熙（チョ・ウォンヒ）が、兵庫県にある川崎重工業株式会社艦船工場から受け取った身分証である。身分証には趙元熙の所属が、「造船部　取付 22161」と記載されている。また、趙元熙の生年月日と身分証発給日、有効期間が明示されている。（趙ギテクの寄贈）

中国地方

鳥取県
島根県
岡山県
広島県
山口県



中国地方は鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県の 5 県をいう。本州の西部にあり、瀬戸内海を挟んで四国地方と向き合っている。

山口県は、韓国には下関という港でよく知られている地域で、釜山と〔全羅南道〕麗水とを行き来する連絡船が 1905 年から 1945 年 6 月ごろまで運航された。山口県にある長生炭鉱は海底炭鉱であり、朝鮮人労働者が多く、「朝鮮炭鉱」とも呼ばれた。1939 年から主に慶尚道地域から朝鮮人を動員し、1942 年までに朝鮮人 1,258 人が強制動員された。1942 年 2 月 3 日の崩壊事故で朝鮮人 130 人ほどが水没して命を失った。現在は空気を入れる「ピーヤ」（排気排水筒）だけが残っている。

広島県は明治以後、軍事基地がおかれ、軍需物資を生産、輸送する作業場が多かった。広島県にある港湾都市の呉は代表的な海軍基地であり、〔海軍工廠などの〕関連作業場が 150 ヶ所もあった。特に広島市は第 2 次世界大戦末期、世界で最初に原子爆弾が投下され数多くの犠牲者が発生したところで、朝鮮人 10 万人中の 4 万人が犠牲となったとみられる。

東洋工業は自動車会社マツダの前身である。1920 年東洋コルク工業として始まり、1927 年東洋工業に改称した。終戦後、1951 年より四輪車業界に進出して 1984 年マツダに社名を変えた。戦時中は銃器製作会社として多数の朝鮮人を強制労働に駆り立てた。

◉ 出典

1. 鄭惠瓊、『朝鮮の青年よ 皇国臣民となれ』（韓国語）、西海文集、2010 年。
2. 金ホギョン、権ギソク、ウ・ソンギュ、『日帝強制動員 その知られざる歴史』（韓国語）、トルベケ、2010 年。
3. 対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会（調査 2 課 -2281 号）、「日本地域作業場現況」〔「作業場の実態」『委員会活動結果報告書』（韓国語）、2016 年、136 － 166 頁。https://dl.nanet.go.kr/search/searchInnerDetail.do?controlNo=MONO1201625424〕

鳥取県



新兵訓練修了写真 1945.5.27

李殷植が大阪海兵団田辺分団 22 部隊 5 教班で、1945 年 5 月 27 日新兵訓練修了後、撮影した団体写真である。李殷植は前から二列目の左側から三番目にいる。写真の裏面には「第 2028 隊 5 教班総員 24 名新兵卒業記念 5 月 27 日（以下省略）」と記載されている。李殷植は鳥取県の山陰航空隊に軍人として動員されて服務したが、解放後、帰還した。（李殷植の寄贈）



カンテラ　岩美鉱山

金渭洙（キム・ウィス）が鳥取県にある岩美鉱山に動員された時、使用していたカンテラである。（金ヨンへの寄贈）

カンテラ（candela、（オランダ語）kandelaar）は、炭鉱・鉱山の坑内で灯を照らすための用具。

岡山県



玉野造船所　労務者写真

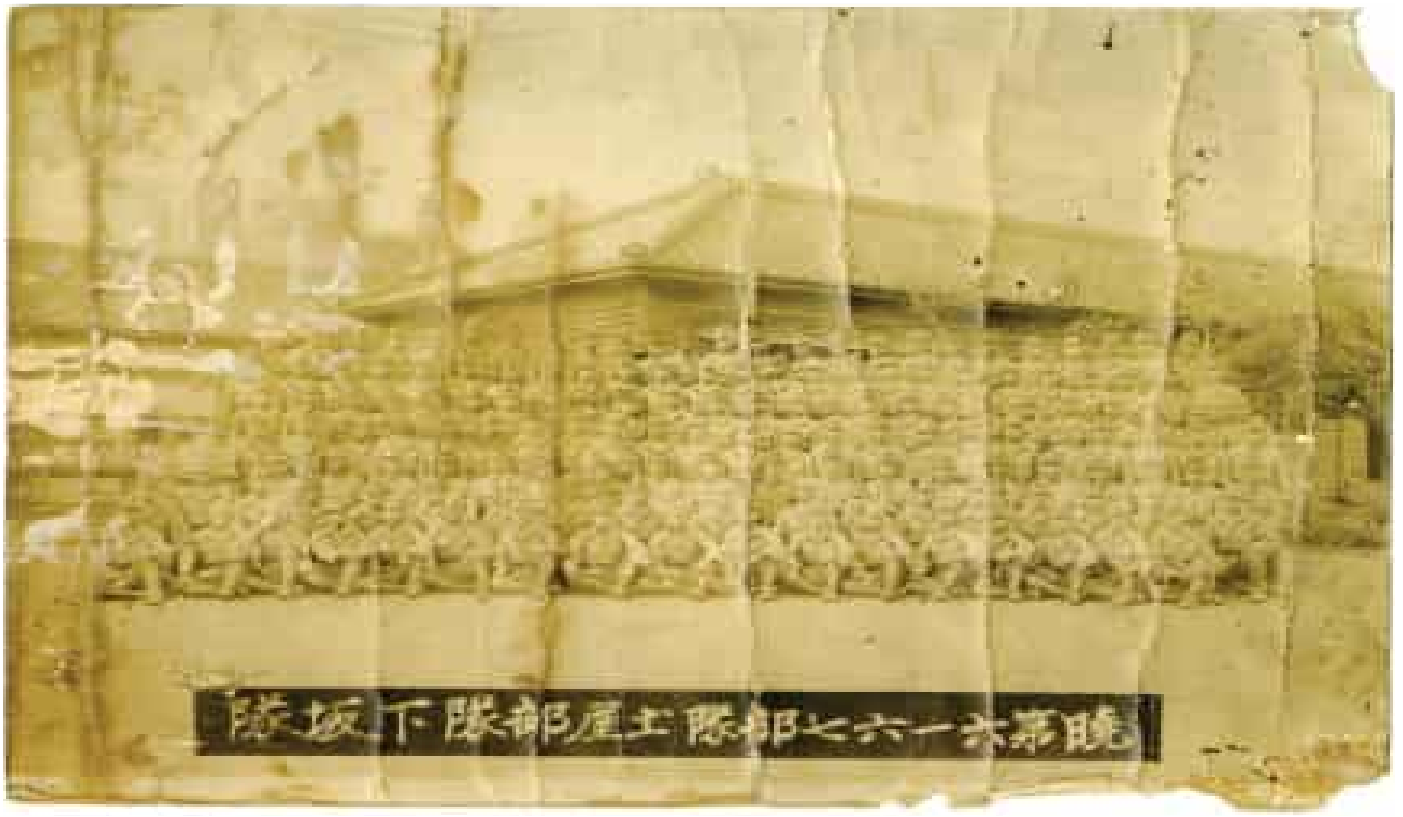
趙昌烈（チョ・チャンニョル）が岡山県にある三井造船玉野造船所に動員された時、同僚と一緒に撮った写真である。趙昌烈は写真の中央にいる。（金ジニョルの寄贈）



労務者団体写真　玉野造船所

趙昌烈が同僚たちと一緒に撮影した写真で、写真の中の腕章から「協和隊小隊長」「中隊長」が確認できる。趙昌烈は後列右側から二番目にいる。（趙昌烈の寄贈）

広島県



暁第 6167 部隊土屋部隊下坂隊　団体写真　1944.11.10

姜忠烈（カン・チュンニョル）が軍人として動員された時、撮影した団体写真で、写真の下段には「暁第六一六七部隊土屋部隊下坂隊」と記載され、裏面には「昭和 19 年 11 月 10 日午後 3 時、大正 12 年 12 月 12 日出生　中川忠烈、暁第六一六七部隊土屋部隊下坂隊、朝鮮忠清北道忠州郡厳政面牧渓洞 250 番地　忠根様」と記載されている。〔暁第 6167 部隊は教育船舶兵団司令部〕（姜グァンナムの寄贈）



第 3 軍務予備訓練所　団体写真

姜忠烈が京畿道始興郡にある朝鮮総督府第 3 軍務予備訓練所第 5 中隊 18 区隊に配置された時、撮った団体写真である。姜忠烈は五列目の左側 3 ～ 4 番目にいて、写真の裏面には「第 3 軍務予備訓練所　中川忠烈」と記載されている。姜忠烈は広島県にある暁 19783 部隊所属の軍人として動員された後、帰還した。〔暁第 19783 部隊は特設水上勤務第 133 中隊〕（姜グァンナムの寄贈）



京城部隊 102 次応徴士一同団体写真　三菱広島造船所　1944.10.14

柳章錫（リュ・ジャンソク）が動員当時、「応徴士」一同と広島護国神社前で撮影した団体写真である。写真の裏面には「柳村　京城部隊一七〇余名一〇二次応徴士一同 19.10.14 於広島護国神社」と記載され、1945.11.15. 検閲の判子が押されている。柳章錫は広島県にある三菱重工業広島造船所に労務者として動員された後、帰還した。（柳章錫の寄贈）



俸給支払証票　1945

姜忠烈が広島県にある暁 6167 部隊で教育を受けた後、暁 19783 部隊に配置され服務する中で、受け取っていた俸給が記載されている。（姜グァンナムの寄贈）



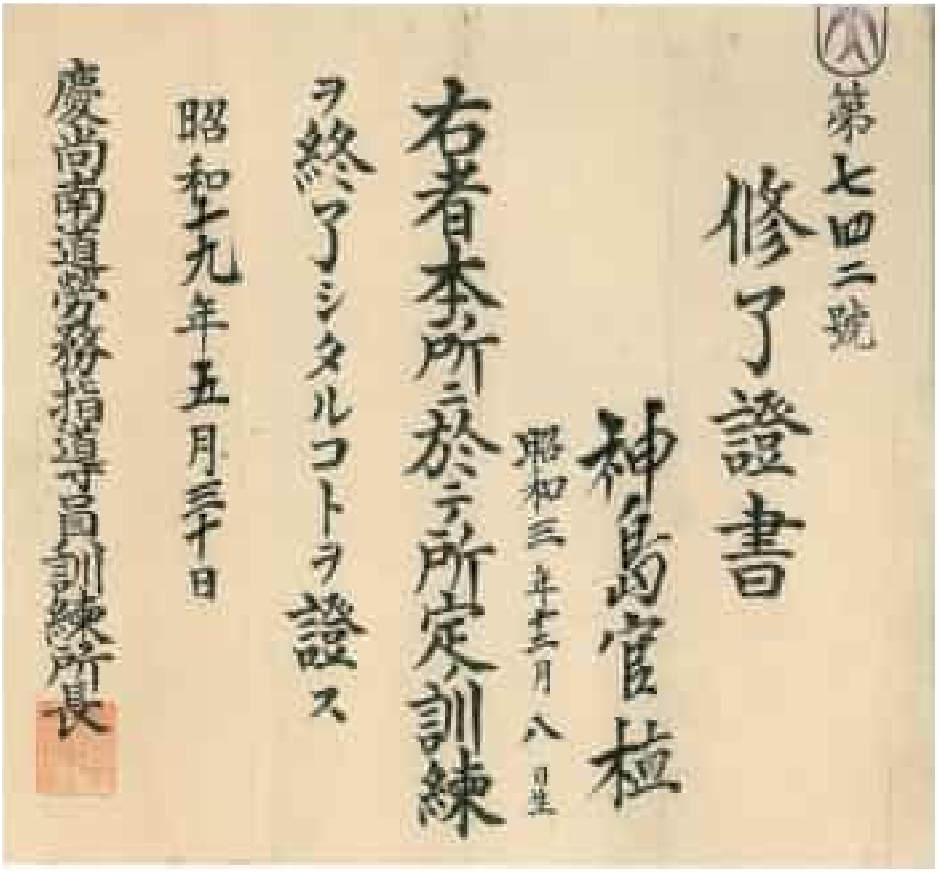
火葬認許証　1945.8.31

1945 年 8 月 31 日、広島県甲奴郡領家村〔現・庄原市〕で発給した金永晩（キム・ヨンマン）の火葬認許証である。金永晩が 1945 年 8 月 31 日午前 6 時に死亡して、村長が火葬を認許するという内容が記載されている。（チョ・ヒョナムの寄贈）



呉〔海軍〕施設部軍属一行の神社参拝

姜洪福（カン・ホンボク）が広島県にある呉〔海軍〕施設部所属の海軍工員として動員された時、未詳の神社に参拝する様子を撮った写真である。（姜ソクボンの寄贈）



慶尚南道労務指導員訓練所修了証書　1944.5.30

金官植（キム・グァンシク）が1944年5月30日、慶尚南道労務指導員訓練所で、労務訓練を終えて受け取った修了証書である。金官植は広島県にある未詳の工場に労務者として動員された後、帰還した。（金ジョンドの寄贈）

山口県



応徴士証明願　1945.8.22
東洋高圧工業彦島工業所

山口県にある東洋高圧工業株式会社彦島工業所に、応徴士として動員された朝鮮人労務者の中山一男の他 69 人が、敗戦直後、当局の指示により帰還することになったことを証明する文書である。証明願は彦島工業所に動員されていた朱学順（チュ・ハクスン）が提出したもので、1945 年 8 月 22 日下関警察署長の捺印が確認できる。（朱学順の寄贈）



朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所入所者歓送写真　1942.12.16

金鍾根（キム・ジョングン）が朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所に入所する前、撮影した歓送記念写真である。金鍾根は平壌にある志願者訓練所で訓練を終え、山口県にある未詳の部隊所属の軍人として動員された後、帰還した。（金鍾根の寄贈）



労働者年金保険被保険者台帳記号番号通知票　1942.5.1

1942 年 5 月 1 日に保険院で発給した労働者年金保険被保険者台帳記号番号通知票で、裵達文（ペ・タルムン）の創氏名と発行人、資格取得日（1942.2.1）などが確認できる。裵達文は山口県小野田にある未詳の炭鉱に労務者として動員された後、帰還した。（裵ジョンギルの寄贈）



山口県の補充隊所属軍人団体写真

宋在甲（ソン・ジェカプ）が山口県にある歩兵第 42 連隊補充隊所属の軍人として動員され、同僚たちと一緒に撮った写真である。（宋在甲の寄贈）



作業場配置前の労務者団体写真　下関　1943

崔東善（チェ・ドンソン）の口述によれば、この写真は 1943 年頃に山口県にある下関港近くの小学校で、各地から来た朝鮮人（45 人）を作業場に送る前に撮影したものだという。崔東善は前から四列目の左から六番目の真ん中にいる。崔東善は山口県下関にある未詳の豆油〔大豆を絞った油〕工場に、労務者として動員された後、帰還した。（崔東善の寄贈）



朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所入所式

金鍾根が朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所に入所した当時の様子である。（金鍾根の寄贈）



朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所入所式　訓示

金鍾根が朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所の入所式で訓示を聞く様子である。（金鍾根の寄贈）



朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所入所式　平壌神社

金鍾根が朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所の入所式を終えて、平壌神社に参拝する様子である。（金鍾根の寄贈）

広島・長崎における朝鮮人原爆被害

人類最初の原子爆弾が広島市で実戦に使用された。1945 年 8 月 6 日朝 8 時 15 分、軍需工場と建物疎開の作業現場に急ぐ広島市民の頭上で、TNT 火薬約 1.5 万トンに相当する原子爆弾「リトルボーイ」（Little Boy）が炸裂した。それより 3 日後の 1945 年 8 月 9 日、二番目の原子爆弾「ファットマン」（Fat Man）が長崎市松山町 171 番地の約 500m 上空で炸裂した。 2 発の原子爆弾によって広島市と長崎市は無残に破壊された。 広島市 42 万人、長崎市 27 万人、合計 70 余万人に達する人が被爆したと伝えられ、この内の約 23 万余人が 1945 年を越せずに死亡した。朝鮮人は広島市 5 万人、長崎市 2 万人、合わせて 7 万人が被爆し、その内 4 万人が死亡し、生存した 3 万人中 2 万 3 千人余りが帰還したとされている。朝鮮人被爆者は全体の被爆者の約 10 分の 1 に該当する。ここで注目する点は朝鮮人被爆者中の死亡率が 57.1% で、全体の〔死亡率〕33.7% に比べ相当に高いことである。

広島市と長崎市の両地域は、日本のその他の地域と同様に戦時期朝鮮人労務動員によって、朝鮮人人口が急激に増加した地域である。朝鮮人労務者の被爆の様相は二つの地域で相異なっていた。広島市の場合は「建物疎開」作業のため朝鮮人労務者の内、多くの人員が市内中心街に投入されていた。それにより彼らが強制動員された主要作業場が爆心地より遠く離れた位置にあったにもかかわらず、直接被爆による被害が多かった。一方、長崎市の場合は主要作業場が比較的爆心地と至近距離にあったことにより、直接被爆による被害が大きかったと予想されるが、峡谷と山に囲まれた長崎市の地形的特色によって予想より被害を減らすことができたと見られる。代わりに原爆投下以後、破壊された市内の復旧作業と救護活動に投入されることで、残留放射能に汚染される「入市」被爆の被害が多かったと判断される。このように二つの地域は相異なる被爆被害の様相を示していて、広島市の死亡率（60%）が長崎市（50%）より高く表れる理由でもある。

◉ 出典

対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会、「広島・長崎　朝鮮人原爆被害に対する真相調査」〔『委員会活動結果報告書　附録Ⅱ－2』（韓国語）、2016 年、6 － 75 頁。https://dl.nanet.go.kr/search/searchInnerDetail.do?controlNo=MONO1201625424〕





応徴士徽章着用個人写真
三菱工作機械広島製作所

写真の中の腕章から、三菱工作機械広島製作所を意味する「廣機」[2]という表示と会社のロゴマークが確認できる。写真の左側下段に「広島」「中島」という写真館のマークが確認できる。朴商鎬（パク・サンホ）は広島市にある三菱工作機械広島製作所に労務者として動員され、原爆によって死亡したのかは確認できないが、行方不明となり、解放後、帰還できなかった。（朴ミンジャの寄贈）



三菱広島機械製作所　同僚

金敏経（キム・ミンギョン）の同僚である金興植（キム・フンシク、左側）、李範成（イ・ボムソン、右側）の写真で、写真の裏面には「広島紀念友人又、同友　金海興植と李範成」と記載されている。（金敏経の寄贈）



三菱広島機械製作所労務者団体写真

金敏経は広島市にある三菱重工業広島機械製作所に労務者として動員された後、原爆による被害を受け、被爆者健康手帳を日本政府より発給された。金敏経は左側から三番目にいて、左より順に李ヨンホン、金ジョンヨル、金敏経、韓ミョンウ、金ボギョンである。（金敏経の寄贈）

2　〔監修者注〕河井章子（かわい あきこ、韓国の原爆被害者を救援する市民の会）によるその後の調査では、この写真の腕章の「廣機」とは三菱工作機械広島製作所（三菱重工業に合併し、1945 年 6 月に三菱重工業第二十製作所となる）を指す（『広船の歩み二十年史』、1964）。1945 年 8 月 6 日の原爆の日、「廣機」の職域義勇隊 236 名は市内の土橋・小網町方面の家屋疎開に動員され、53 名が即死、183 名が負傷したという（『広島原爆戦災誌』第 3 巻、1971 年）。



三菱工作機械広島製作所動員者家族写真

写真から三菱工作機械広島製作所の会社のロゴマークと「応徴士」の徽章が確認できる。朴景洙（パク・ギョンス）は左側から二番目におり、左から順に、崔チュンジャ（義姉）、母方の従兄弟、朴景ファ（兄）である。朴景洙は広島県にある三菱工作機械広島製作所に労務者として動員された後、行方不明となり、帰還できなかった。（朴ミニョンの寄贈）



三菱工作機械広島製作所労務者団体写真

前列左側から三番目にいる朴景洙と９人の同僚たちが確認できる。写真の裏面には「昭和十九年十一月十四日広島憲兵分隊」の検閲印が押されている。（朴ミニョンの寄贈）

玉藻組所属動員者個人写真

朴洪圭（パク・ホンギュ）が広島市にある玉藻組トンネル工事場に動員され、撮影した写真である。写真から玉藻組の作業服、腕章、バッジなどが確認でき、裏面には「18歳 1944.8.20 日本　1945.10.15 帰家」と記載されている。朴洪圭は玉藻組所属として福岡県、熊本県でもトンネル工事を行い、動員中、原爆による被害を受けた。（朴洪圭の寄贈）





広島県発給罹災証明書　1945.9.10

1945年9月10日に広島県が発給した罹災証明書である。広島製砥所に動員された金圭太（キム・ギュテ）が1945年8月6日の戦時災害によって、罹災者となったことを証明する内容である。（チョ・ヒョナムの寄贈）

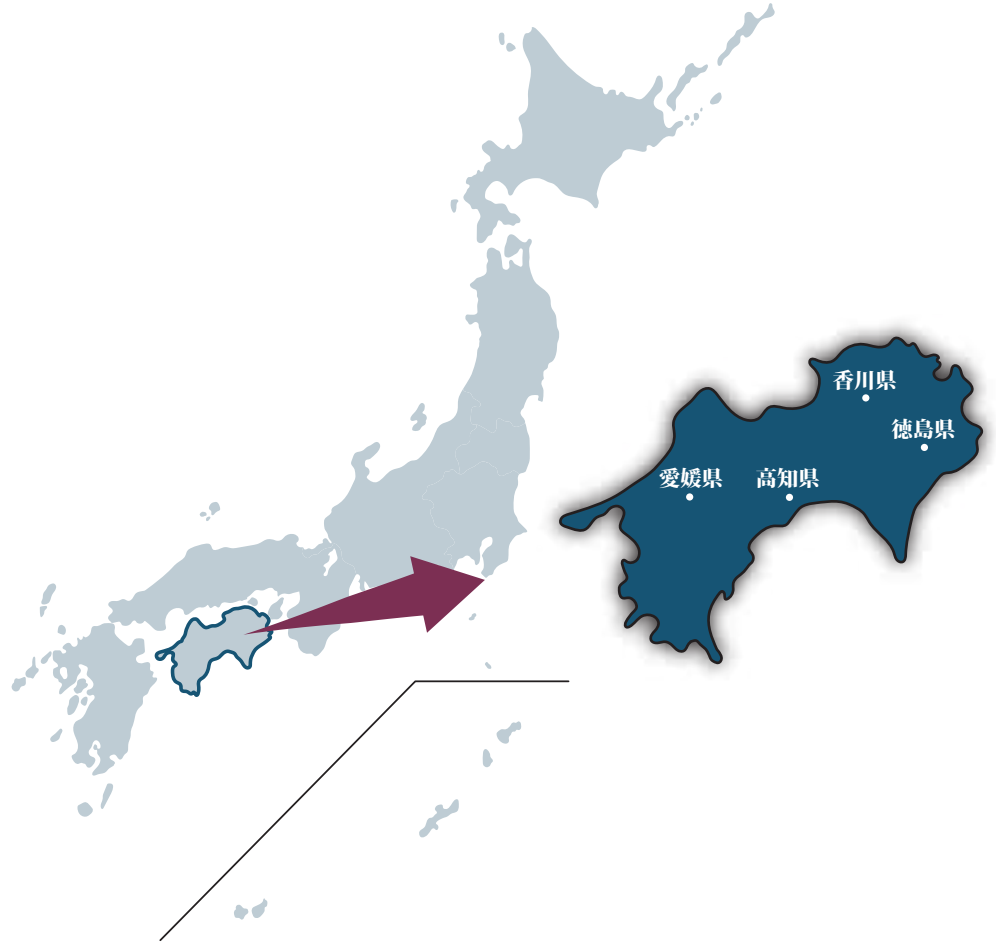


広島製砥所発給罹災証明書　1945.9.10

1945年9月10日に広島製砥所が発給した罹災証明書である。金圭太が義勇隊として出動したが、1945年8月6日の空襲によって負傷したことを証明すると記載されている。〔製砥所は砥石を製造する会社〕（チョ・ヒョナムの寄贈）

四国地方

徳島県
香川県
愛媛県
高知県



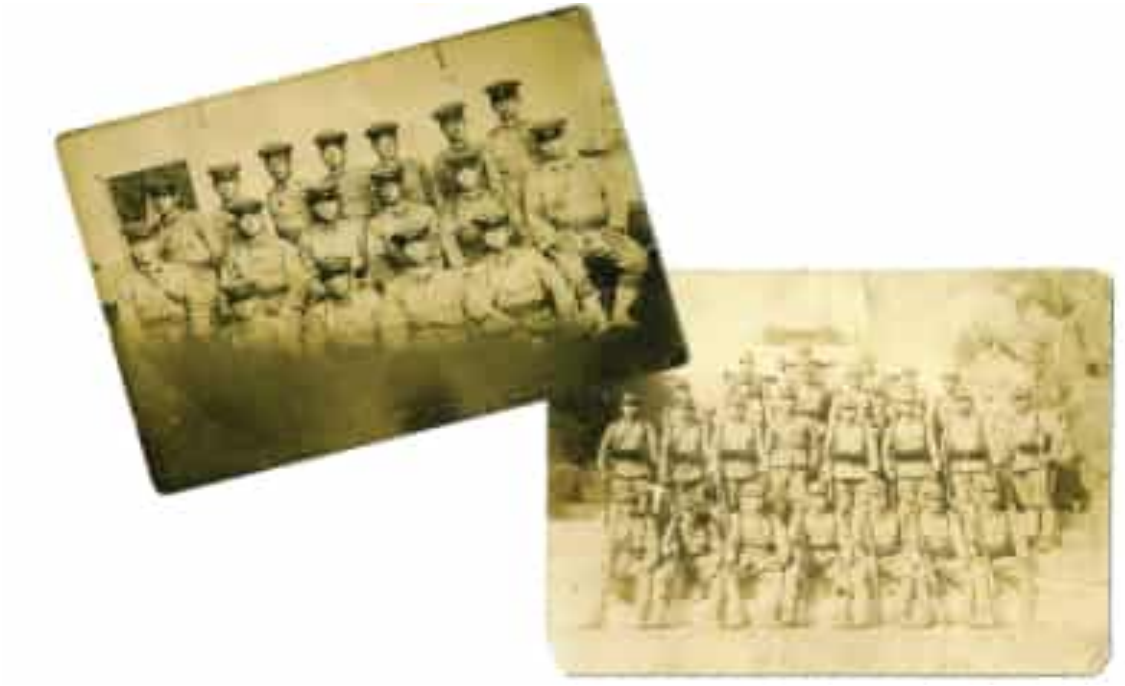
四国は瀬戸内海を間に挟んで関西、山陽、九州の三つの陸地に囲まれていて、日本本土の四大島の中で最も面積が狭い。4 つの国（奈良時代から明治時代初期までの地理区分）という意味から「四国」と呼ばれた。今日では徳島県、香川県、愛媛県、高知県の 4 県で構成されている。

愛媛県はアジア太平洋戦争時期、22 ヶ所の軍需工場と鉱山、工事場に朝鮮人が動員されていた地域である。朝鮮人は主に銅鉱山で働いたが、代表的な作業場が住友鉱業（株）別子鉱山である。別子は銅鉱山として 1939 年より 1941 年までの 2 年間で 700 人の朝鮮人が動員された。この他にも昭和鉱業（株）、日本鉱業（株）などの鉱山、倉敷絹織（株）〔戦時に倉敷航空化工（株）、現・クラレ〕などの工場が、朝鮮人が強制動員された現場である。

◉ 出典

1. 鄭惠瓊、『朝鮮の青年よ 皇国臣民となれ』（韓国語）、西海文集、2010 年。
2. 対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会（調査 2 課 -2281 号）、「日本地域作業場現況」〔「作業場の実態」『委員会活動結果報告書』（韓国語）、2016 年、136 ― 166 頁。 https://dl.nanet.go.kr/search/searchInnerDetail.do?controlNo=MONO1201625424〕

高知県



84 連隊第 2 大隊所属軍人団体写真　1945.3.20

金在連（キム・ジェヨン）が高知県にある 84 連隊第 2 大隊所属の軍人として動員された時、撮った団体写真である。（金在連の寄贈）

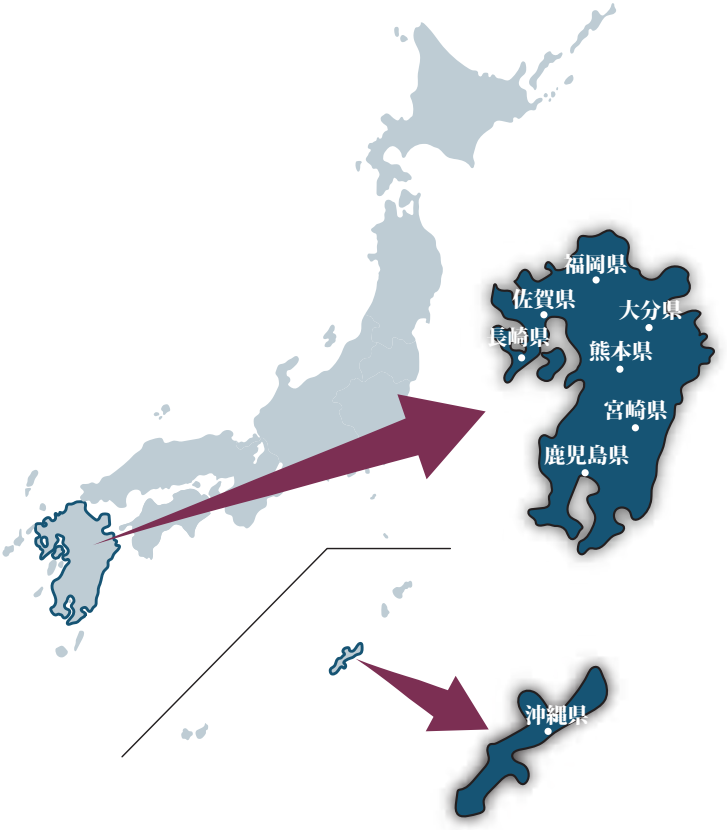


一時帰鮮証明書　1943.11.4　渡川改修工事

1943 年 11 月 4 日、高知県にある中村警察署で発給した一時帰鮮証明書で、全乙禄（チョン・ウルロク）が母親の看病のため一時帰鮮することを証明する内容の文書である。全乙禄は高知県にある渡川改修工事場に労務者として動員された後、帰還した。（全ヘパルの寄贈）

九州・沖縄地方

福岡県
佐賀県
長崎県
熊本県
大分県
宮崎県
鹿児島県
沖縄県



九州は日本列島を構成する 4 つの大きな島の中で一番南の方にある島である。九州本島と壱岐島、対馬島、五島列島、天草諸島、薩南諸島など 1,400 余りの島から構成され、福岡県、佐賀県、長崎県、大分県、熊本県、宮崎県、鹿児島県の 7 県を含む。その南に沖縄県がある。

九州地域は日本全体の石炭生産の 50% 以上を占める重要な地域であった。こうした重要性のため戦線の拡大により不足した労働力を充当し、継続的な石炭生産を維持するため、数多くの朝鮮人労務者が九州地域の炭鉱に動員された。これにより同時代人たちの記憶の中では「九州炭鉱」は、「北海道炭鉱」及び「南洋群島」とともに、強制動員を象徴する単語として知られている。代表的な炭鉱としては福岡県にある〔三井鉱山三池炭鉱、三菱鉱業〕上山田炭鉱と嘉穂炭鉱、佐賀県にある明治鉱業株式会社立山炭鉱〔、長崎県の三菱鉱業高島炭鉱〕などが知られている。その他にも福岡県にある日本製鉄株式会社八幡製鉄所と大分県にある日本鉱業株式会社佐賀関製錬所などに多数の朝鮮人が動員された。

◉ 出典

1. 日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会、『ポンポン船に乗って帰る途中、海の幽霊になるところだったよ』（韓国語）、2006 年。〔日本語（2019 年）https://www.fomo.or.kr/kor/article/ATCLfce52d0eb/699?mno=&pageIndex=4&searchCondition=&searchKeyword=〕
2. 対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会、『戦時期、麻生鉱業（株）による強制動員被害の真相調査』（韓国語）、2011 年。〔日本語（2024 年）https://www.fomo.or.kr/kor/article/ATCLfce52d0eb/1171?mno=&pageIndex=1&searchCondition=&searchKeyword〕

福岡県



大辻炭鉱労務者団体写真　1943.6.20 江原道江陵郡報国隊

金瀧卿（キム・ロンギョン）の写真には「江原道江陵郡報国隊員　渡航一周年記念撮影　昭和十八年六月二十日（於貝島大辻炭鉱）」と記載されている。金瀧卿は福岡県にある貝島炭鉱株式会社大辻炭鉱の労務者として動員された後、帰還した。（金瀧卿の寄贈）



三菱鯰田炭鉱労務者記念写真

福岡県にある三菱飯塚鉱業所鯰田炭鉱に動員された李僖雨（イ・ヒウ）と同僚の鉱夫服装の記念写真である。帽子に取り付けた電灯、腰につるした電池、労務者たちの作業靴である「地下足袋」を着用している。（李チュンサンの寄贈）

地下足袋とは労務者がはいた労働靴の一種。ゴム底で足の親指の部分と残りの指の部分が二股に分かれ足首が長い長靴の形式。



三菱飯塚鉱業所鯰田炭鉱労務者団体写真

福岡県にある三菱飯塚鉱業所鯰田炭鉱に動員された金鍾郁（キム・ジョンウク）の写真で、左の胸の上に「応徴士」の徽章を着けた幼い少年の姿も確認できる。（金鍾郁の寄贈）



日産山田炭鉱労務者団体写真　1943.10.9

福岡県にある日産化学工業株式会社山田炭鉱に動員された張悳煥（チャン・ドクァン）の写真である。写真には「馬麗州〔驪州〕郡勤労報国隊　日産山田砿訓練所 18.10.9 入所記念」と記載されている。〔驪州郡は現・京畿道驪州市〕（張悳煥の寄贈）



福岡県炭鉱（場所不詳）労務者団体写真（朴サングの寄贈）



大之浦炭鉱労務者写真

福岡県にある貝島炭鉱株式会社大之浦炭鉱に動員された李貴栄（イ・グィヨン）と、7 寸〔父の六親等の親族〕の李慶相（イ・ギョンサン）が一緒に撮影した写真である。（李ヨンギュの寄贈）



表彰状　三菱飯塚鉱業所鯰田炭鉱労務者へ（福岡県協和会飯塚支会）1945.5.27

福岡県にある三菱飯塚鉱業所鯰田炭鉱の李僖雨に、福岡県協和会飯塚支会が授与した表彰状である。1943 年 4 月 26 日に労務者として動員され、石炭増産の 2 年契約を満了し、1 年延長したことを称讃する内容が記載されている。（李チュンサンの寄贈）



三井染料大牟田工場労務者団体写真

金翰中（キム・ハンジュン）と同僚たちの団体写真である。（金翰中の寄贈）



貝島大之浦炭鉱労務者団体写真　協和会

福岡県にある貝島炭鉱株式会社大之浦炭鉱に動員された李貴栄と同僚たちの団体写真である。（李ヨンギュの寄贈）



福岡県〔大之浦炭鉱〕労務者団体写真

李貴栄は福岡県にある貝島炭鉱株式会社大之浦炭鉱に動員された後、帰還した。（李ヨンギュの寄贈）



三菱若松造船所勤労出動隊記念写真

金杭魯（キム・ハンノ）が福岡県にある三菱重工業若松造船所に到着して、撮影した団体写真。写真には「九州若松造船所勤労出動隊記念」と記載されている。（金杭魯の寄贈）



三井三池炭鉱三川坑労務者団体写真

洪承厚（ホン・スンフ）が〔京畿道の〕水原から一緒に動員された同僚たちと、福岡県にある三井三池炭鉱正門で撮影した団体写真である。炭鉱作業の時に使っていたキャップ帽子と労務作業靴である地下足袋を着用している。洪承厚は写真裏面に「九州福岡県大牟田市西港町一丁目二十五番地　三井三池鉱業株式会社三〇坑　出勤隊寄宿舎第一清明寮水原隊　徳河承厚」と記載していた。洪承厚は後ろから二列目の左側から五番目にいる。（洪承厚の寄贈）



採炭夫勤務証印簿　明治豊国炭鉱 1942.6

金好起（キム・ホギ）は福岡県にある明治鉱業株式会社豊国炭鉱に動員された。採炭夫勤務証印簿は 1942 年 6 月分として勤務日、賞与金、賃金が記録されている。勤務証印簿は出勤時に提出し退勤時に受け取り、汚さないようにし、紛失時は金 5 銭を出して再発給を受けるよう記載されている。（金ナムヒョンの寄贈）



三井田川炭鉱労務者団体写真　1944.12.12

金亨培（キム・ヒョンベ）は写真の裏面に「昭和拾九年十二月十二日　康津部隊　福岡県田川市伊田町　三井鉱業所」と記載していた〔全羅南道康津郡〕。 金亨培は前から二列目の左側から九番目にいる。（金ジョンイルの寄贈）



宝珠山炭鉱労務者葬式写真　1942.7.26

李鼎武（イ・ジョンム）は福岡県にある宝珠山鉱業株式会社宝珠山炭鉱に動員され、1942 年 7 月 25 日に死亡した。写真には「宝珠山炭鉱　故国本鼎武氏　坑葬式場　昭和十七年七月二十六日執行」と記載されている。（李スユンの寄贈）



脚絆〔きゃはん、ゲートル〕

李貢龍（イ・ゴンヨン）が訓練所で軍服、木綿手袋、ふたまた手袋などと一緒に受け取った脚絆である。李貢龍は脚絆が自分のものであることを表示するため、「岩本」（創氏）を縫い付けたという。李貢龍は第 16 方面軍歩兵第 40 連隊所属の軍人として動員された。「旧帝国陸軍編成便覧」から、歩兵第 40 連隊の最終位置を福岡県と確認できる。（李貢龍の寄贈）

脚絆：歩くときに足首部分を身軽にするため、足首から膝下まで巻いて使った帯。



勤務証印簿　明治豊国炭鉱　1945.5

田応礼（チョン・ウンネ）は福岡県にある明治鉱業株式会社豊国炭鉱に動員された。勤務証印簿は 1945 年 5 月分であり、当時の勤務日が記載されている。（田応礼の寄贈）



徴用解除証明書　三菱飯塚鉱業所 1945.10.18

張師益（チャン・サイク）が 1945 年 10 月 18 日付け徴用解除により本籍地に帰鮮させることを、福岡県の三菱鉱業株式会社飯塚鉱業所が証明した文書である。（ハン・ヨンスクの寄贈）



協和会会員章　福岡県協和会　1944.3.4

1944 年 3 月 4 日に福岡県協和会が李鍾佑（イ・ジョンウ）に発給した協和会の手帳である。大日本産業報国会バッジを着用して撮影した李鍾佑の個人写真があり、生年月日、出生地、本籍、現住所地などが記載されている。（ソン・テブンの寄贈）



国民労務手帳　1943.2.3

福岡県にある大牟田国民職業指導所が李鍾鎬（イ・ジョンホ）に発給した国民労務手帳である。「三井」の会社ロゴマークが記された腕章を着けて撮影した李鍾鎬の個人写真と、李鍾鎬の出生、本籍、居住地、就業などの記録がある。李鍾鎬は 1943 年 3 月 4 日まで福岡県の三井鉱山株式会社三池炭鉱に動員され、〔その後〕1943 年 3 月 20 日、北海道の轟鉱山で死亡した。（李ウォングンの寄贈）

佐賀県



川南造船所第 5 番船舶製造の様子



川南造船所第 6 番船舶製造の様子

佐賀県にある川南造船所第 6 番船舶製造の様子である。朴吉鍾(パク・ギルジョン)は熊本県の飛行場工事場、福岡県の三菱鉱業株式会社、佐賀県の川南造船所の労務者として動員された。(朴ハグォンの寄贈)

長崎県



協和会会員章、三菱高島炭鉱　1940.4.1

長崎県協和会梅香崎支会が、三菱鉱業株式会社高島鉱業所に動員された徐達文（ソ・ダルムン）に発給した会員章である。徐達文の個人写真、生年月日、本籍地、就業関連事項などが記載されている。（徐チョルホの寄贈）



長崎鉱業（株）伊王島鉱業所　労務者団体写真　1943

趙容泰（チョ・ヨンテ）が伊王島鉱業所の同僚たちと一緒に撮影した写真である。写真の下段に「伊王島鉱業所槐山部隊協和会団旗入魂式記念」と記載されている〔忠清北道槐山郡〕。右側の個人写真は労務作業で写真撮影に参加できなかった同僚の写真である。（趙容泰の寄贈）



名張鉱山転出記念撮影　川南工業香焼島造船所から

三重県にある名張鉱山に転出していく途中、東京の皇居二重橋前で撮影した団体写真である。千鍾旻（チョン・ジョンミン）は長崎県香焼島造船所に動員された後、三重県にある名張鉱山に転出した。写真で千鍾旻は後列左側から二番目にいる。（朴ボクドクの寄贈）



公務旅行証明書
長崎からイルミナイト鉱山（名張鉱山）1945.5.18

金城光浩の他９人がイルミナイト採鉱派遣工員として、1945年５月19日より1945年７月18日まで長崎から名張へ公務上旅行することを証明する文書である。〔イルミナイトは鉄とチタンの酸化物からなる鉱物でチタンの原料として重要〕（朴ボクドクの寄贈）



川南工業香焼島造船所労務者団体写真　1944.10.13

写真の裏面に「長崎要塞司令部検閲済、19.10.13」の判子が押されている。千鍾旻は後列左端にいる。（朴ボクドクの寄贈）



名張鉱山派遣工員出勤簿　1945.5

三重県にある名張鉱山に派遣された千原鍾旻他９人（長崎県）の出勤簿（1945 年 5 月分）である。工員たちが派遣地に移動していた 5 月 20 日、〔福岡県〕小郡駅で権本泰宣と金思穆（キム・サモク）が逃亡した記録がある。（朴ボクドクの寄贈）



イルミナイト鉱山行き　工員名簿　1945

イルミナイト採鉱のため名張鉱山に派遣された 10 人の職種、職番、姓名、年齢、本籍地が記載されている。（朴ボクドクの寄贈）



出張命令書（長崎から名張鉱山へ） 1945.5

権本泰宣と金思穆の出張命令書で、5月19日より7月18日まで三重県にある名張鉱山イルミナイト採鉱派遣工員として出張を承認すると記載されている。（朴ボクドクの寄贈）



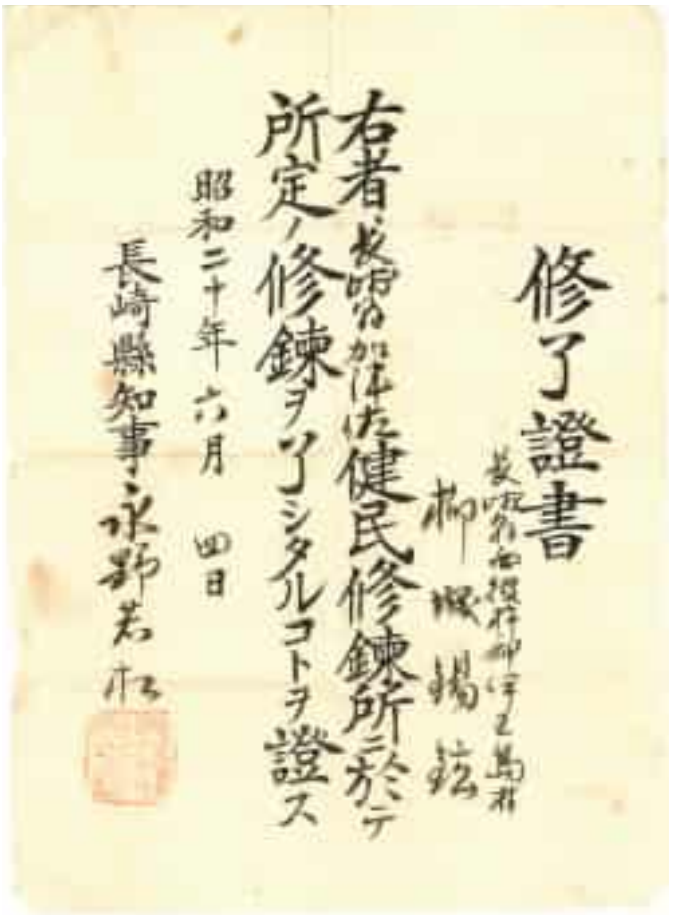
転出証明書（名張から長崎へ） 1945.7.18

福山長春の他9人を三重県名賀郡美濃波多村〔現・名張市〕から長崎県に転出することを証明する文書である。（朴ボクドクの寄贈）



勤倹預金通帳　三菱高島炭鉱 1938.4.9

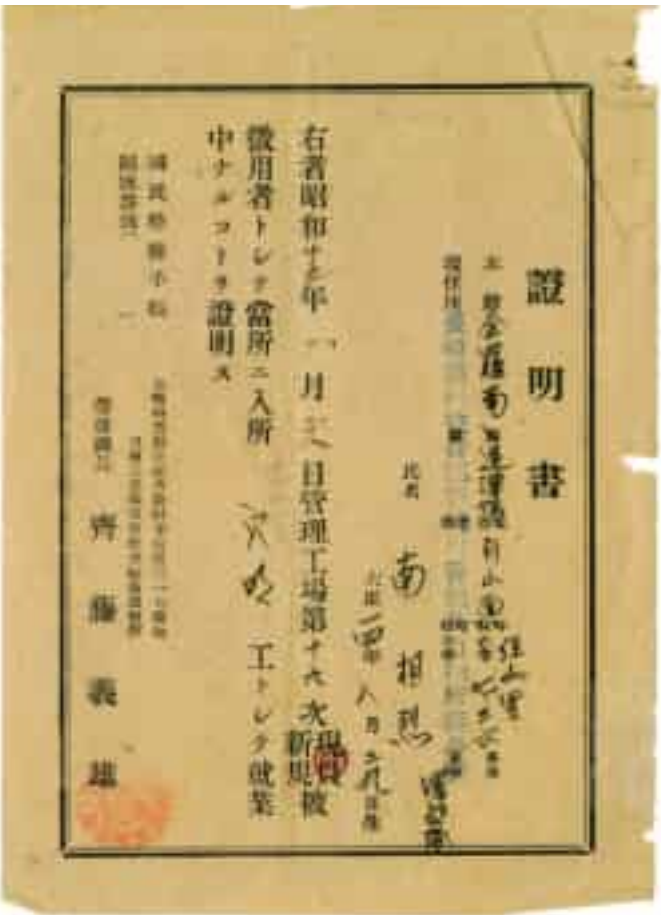
長崎県にある三菱鉱業株式会社高島鉱業所に動員された徐達文に発給された通帳である。1938年4月9日から1943年1月12日まで預金した記録がある。（徐チョルホの寄贈）



修了証書　長崎県加津佐健民修錬所　1945.6.4

柳錫鉉（ユ・ソキョン）が長崎県知事に授与された修了証書である。この修了証書には「長崎県加津佐健民修錬所で所定の修練を修了したことを証明」すると記載されている。〔加津佐町は、現・南島原市〕（柳錫鉉の寄贈）

健民修錬所は 1943 年国民体力法に基づき、徴兵前の青少年のための機関として設置された。入所期間は 1944 年には 20 日程度であって、体力検査後に入所者の決定がなされ、市町村から関連文書が健民修錬所に送られた。



証明書　川南工業香焼島造船所　1944.2.28

南相烈（ナム・サンニョル）が長崎県西彼杵郡にある川南工業株式会社香焼島造船所に、第 16 次新規被徴用者の身分で入所したことを証明する文書である。（南相烈の寄贈）

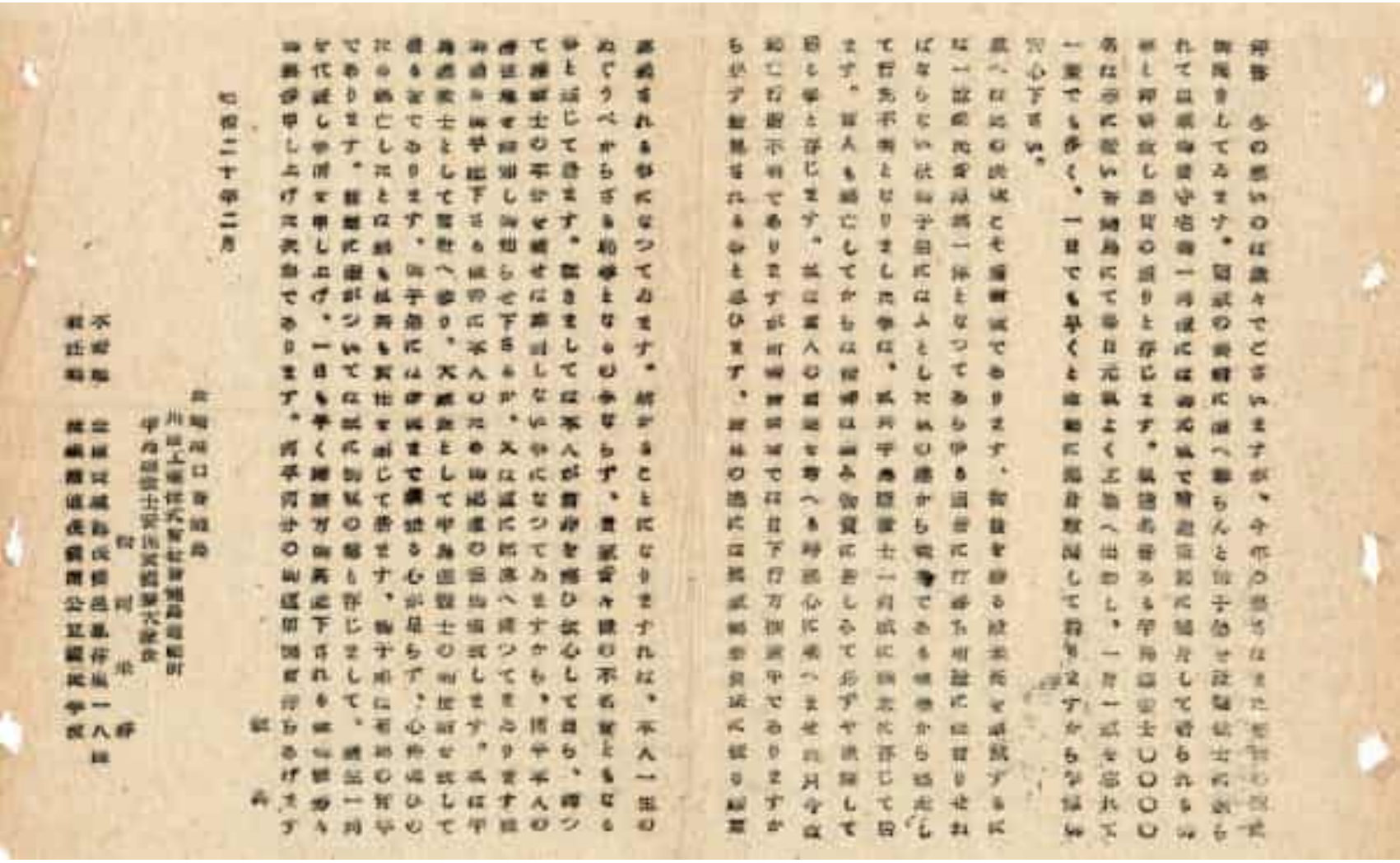


佐世保〔海軍〕施設部半島工員団体写真

写真の下段に「下和田舎監送別記念撮影　半島工員一同」と記されている。李時雨（イ・シウ）は佐世保〔海軍〕施設部 102 部隊に動員され、写真の裏面に「佐世保市八幡神社参拝写真」と書いた。（李サンホの寄贈）

手紙　半島応徴士安保愛国寮大隊長　1945.2.

川南工業株式会社香焼島造船所の半島応徴士安保愛国寮大隊長松岡果詳が労務者を代表して発送した手紙である。（朴ボクドクの寄贈）



熊本県



熊本電熱工業所記念写真帖

熊本県にある熊本電熱工業所に動員されていた程八男（チョン・パルナム）が、熊本電熱工業所より受け取った記念写真帖である。写真帖には寄宿舎、訓練の様子、作業の様子などがある。（程八男の寄贈）



熊本県協和会団体写真

熊本県協和会の団体写真であり、「勤労報国隊」の旗を持っている。尹基淳（ユン・ギスン）は最前列の左側から四番目にいる。尹基淳は熊本県にある未詳の炭鉱で労務者として動員され、後に帰還した。（尹ヨンチョルの寄贈）



熊本県協和会団体写真

尹基淳は前から二列目の左側から四番目にいる。（尹ヨンチョルの寄贈）

大分県



大分県旭鉱山から三重県紀州鉱山へ　配置転換部隊記念撮影　1943.4.24

大分県にある旭鉱山に動員され、1943 年 4 月 16 日、三重県の紀州鉱山に配置転換された宋福興（ソン・ボクフン）と同僚たちの団体写真である。宋福興は後列最右端にいる。（宋ソンホンの寄贈）



協和会会員章　1941.1.30

大分県協和会より 1941 年 1 月 30 日、宋福興に発給した協和会手帳である。宋福興の個人写真があり、生年月日、出生地、本籍、現住所などが記載されている。宋福興が 1940 年 12 月 21 日、大分県の旭鉱山に動員され、1943 年 4 月 16 日、三重県の紀州鉱山に配置転換されたことを確認できる。（宋ソンホンの寄贈）

鹿児島県



佐世保海軍建築部川棚部隊団体写真（鹿屋）

佐世保海軍建築部から鹿児島県鹿屋に工員として動員された任桂宗（イム・ゲジョン）の団体写真である。任桂宗は最前列の左側から二番目にいる。（任ホンスンの寄贈）〔海軍建築部は 1943 年に海軍施設部に改称〕



佐世保海軍建築部川棚部隊団体写真（鹿屋）

写真の下段に「佐世保海軍建築部川棚部隊豊山分隊記念」と記載されている。任桂宗は前列中央で腕組みをしている。（任ホンスンの寄贈）



鹿児島県（作業場不詳）団体写真 1942

帽子着用者は労務者たちであり、未着用者は飯場主である。着用している帽子の白い部分はプラスティック材質で、ここに鉱山の坑道を明るくするランプを差した。文春基（ムン・チュンギ）は最前列左側から三番目にいる。（文春基の寄贈）

飯場とは鉱山、土木建築工事などの現場近くに設置された労務者たちの宿舎である。



鹿児島県海軍飛行場軍属団体写真

写真の背景から「第三中隊」という所属が確認でき、軍務員（軍属）たちが守るべき事項が記載されている。金容宇（キム・ヨンウ）は前列左側から二番目にいる。（金容宇の寄贈）



鹿児島県海軍飛行場軍属団体写真（第 3 中隊）

鹿児島県にある海軍飛行場第 3 中隊の軍務員として動員された金容宇と同僚たちの団体写真である。金容宇は前から二列目の右側から五番目にいる。（金容宇の寄贈）

軍人履歴票　鎮海から鹿屋の第 203 航空隊へ　1944 ～ 45

洪正峯（ホン・ジョンボン）は海軍二等整備兵として鎮海海兵団に入団、それ以後の履歴事項が記載されている。洪正峯は鹿児島県〔の第 2 出水航空隊に動員され、厚木から〕鹿屋市笠之原に展開していた第 203 海軍航空隊に転勤した。（洪正峯の寄贈）



沖縄県





領収証　1944.7.12

崔永奇の徴発に関する宿泊費、トラック運賃、汽車運賃、弁当代、5円75銭の領収証である。(崔ジュンファの寄贈)

傭人徴発旅費支払に関する件 1944.8.8

〔慶尚北道〕盈徳郡守が高山斗仁に送ったものである。崔永奇（チェ・ヨンギ）を徴発するのに使用した旅費（5円75銭）を徴発委員長に請求、受領し、別紙の受領書（右側に掲載）を捺印の後に送り返し、領収書の左側分を保管せよという内容である。内容から見てこの文書の他に別の文書が一緒になっていたとみられる。崔永奇は軍務員として強制動員され、沖縄でアメリカ軍の捕虜となった。ハワイの捕虜収容所に収容された後、帰還した。(崔ジュンファの寄贈)



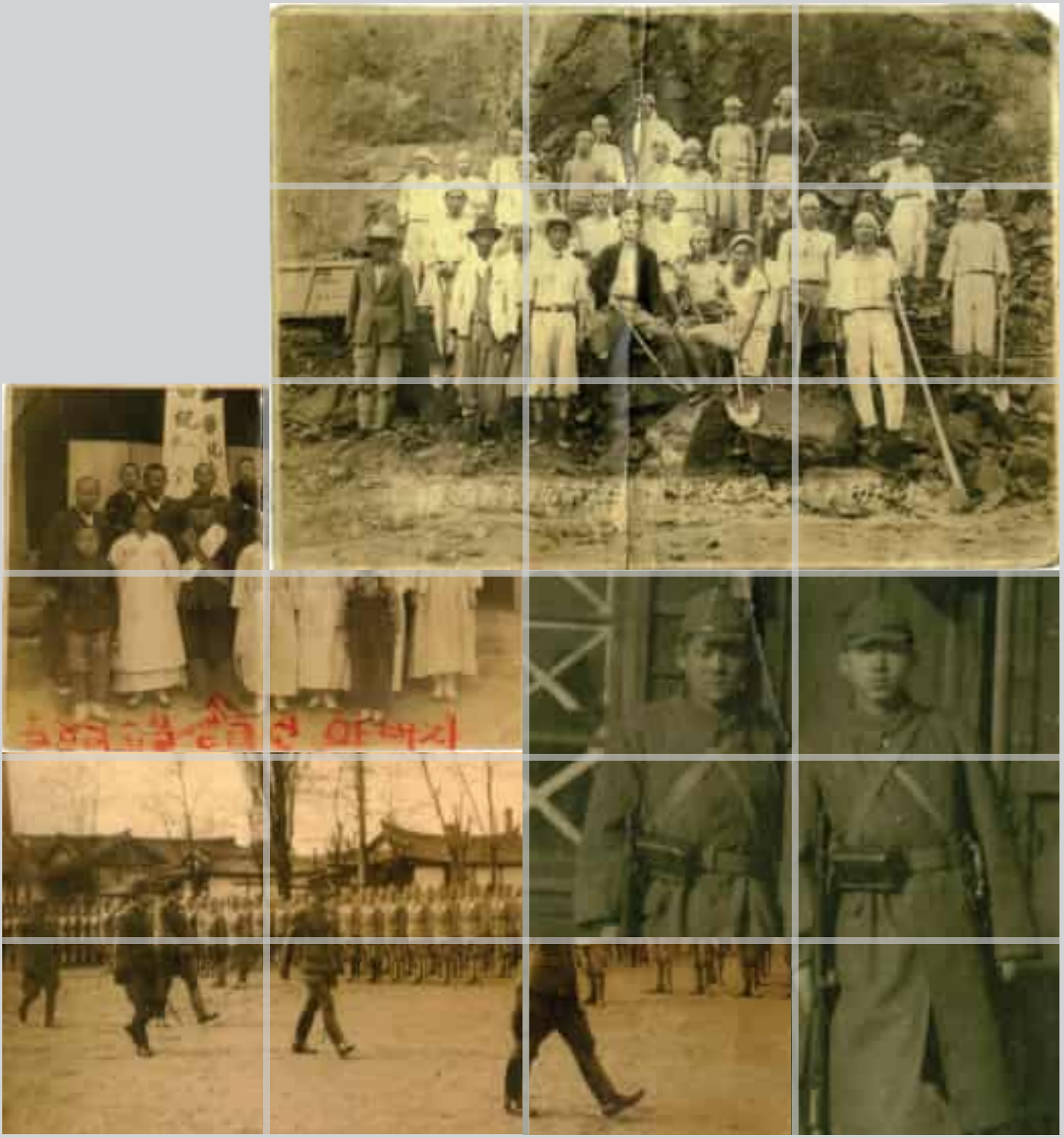
自由韓人報　第7号　1945.12.25

終戦後ハワイの捕虜収容所に収容された朝鮮人たちが製作、配布した雑誌（終刊号）である。軍務員として動員された崔永奇は沖縄でアメリカ軍の捕虜となり、ハワイの捕虜収容所に収容された後、帰還した。(崔ジュンファの寄贈)



捕虜バッジ〔原文は捕虜ピン〕

劉秉孝（ユ・ビョンヒョ）は沖縄特設水上勤務104中隊に動員され、捕虜となり、ハワイの捕虜収容所に収容された後、帰還した。(劉ジュニョルの寄贈)



朝鮮
地域

朝鮮では勤労報国隊や官斡旋、徴用などの形態で動員され、雲峰・江界水力発電所〔当時は平安北道、現在は慈江道〕、羅津―清津間鉄道工事場〔咸鏡北道〕などの土木工事場と〔咸鏡北道の〕阿吾地、龍北洞の炭鉱、日本製鉄〔清津製鉄所〕、〔咸鏡南道の〕興南窒素肥料などの工場に動員された。また光州、清津などの飛行場、済州島と南海岸などの陣地洞窟構築作業にも動員された。このように朝鮮半島に動員された労働力はのべ人員 500 万人以上と推算され、朝鮮半島内に動員された後、さらに半島外に動員される場合も多かった。

In Korea, people were mobilized in types of the labor patriotic service, the government agent and the draft. They were dispatched to the places of Unbong-Kangye hydroelectric power generation, Najin-Chungin railroad work, Aoji coal mine, Youngbokdong coal mine, Japan iron making company, Heungnam nitrogenous fertilizer company, airfields in Gwangju and Chungjin and the underground position construction in Jeju-do and the southern coast of Korea. The number of the people were over 5 millions, and some of them were moved to other countries.

朝鮮地域



アジア太平洋戦争期間中、朝鮮半島の民衆は物資供出と労働力動員の二重苦に耐えなければならなかった。委員会が確認した朝鮮半島の作業場はおおよそ 8,137 ヶ所（労務動員 7,304 ヶ所、軍人配置地域と軍務員作業場 833 ヶ所）に達する。すなわち、朝鮮半島全域が強制動員作業場であった。また、ソウル・龍山と鎮海、済州をはじめとした全国主要都市の部隊にも朝鮮の青年たちが配置されていた。

朝鮮半島の民衆は戦争期間中に食糧は無論、軍需物資に必須の特殊鉱物と化学製品、木材、医薬品などを供出しなければならなかった。鴨緑江と赴戦江など難所の地に水力発電所をつくり電力を生産すること、道路と港湾、飛行場などインフラ建設にも朝鮮人が割り当てられた。朝鮮人を強制労役に追い立て利益を得た企業には、現在、世界的な企業と呼ばれる三井と三菱、新日本製鉄〔日本製鉄〕などがある。

1947 年、日本政府（大蔵省）が公式に認定した朝鮮国内での強制動員被害者〔『日本人の海外活動に関する歴史的調査』〕は、労務者（国民徴用と官斡旋）726,221 人、軍務員 15,112 人、勤労報国隊など 5,782,581 人、軍人など計 700 万人余り（重複人員）に達する。しかし、1965 年日韓請求権協定を締結する当時、韓国政府は〔朝鮮内の動員については〕協議対象から除外し、2007 年制定された支援法案でも除外した。〔朝鮮内動員の〕労苦は無視された。

朝鮮半島



康川面勤労報国団第 4 回出動隊　1938.11.19　三山里工事

写真の下段に「康川面勤労報国団第四回出動隊一同　昭和十三年十一月十九日　三山里工事場にて」と記載されている。康川面勤労報国団に動員されていた厳龍仁（オム・ヨンイン）は、1941 年頃軍人として再び動員された。〔康川面は京畿道驪州郡、三山里は京畿道楊平郡楊東面にある。〕（厳ボクヒョンの寄贈）



陵西青年勤労報国団中央線工事地出動記念団体写真　1938.6.24

写真の下段に「陵西青年勤労報国団中央線工事地出動記念　昭和十三 . 六 . 二十四」と記載されている。梁在熙（ヤン・ジェヒ）は前列左側で黄色上衣を着用している。〔陵西面は驪州郡、現・驪州市世宗大王面〕（崔ブレの寄贈）



京畿道第 9 青訓別科合同訓練所団体写真　1944.8.30（金テジョンの寄贈）



入営者団体写真　1945.2.22

金在卿（キム・ジェギョン）は、朝鮮半島にある未詳の部隊に軍人として動員された。金在卿は前から二列目の左側から三番目にいる。（金テジョンの寄贈）



入営歓送家族写真

「立派だけど、おかわいそうなお父さん」〔写真の手書き文字〕は金在卿の末娘が子供の頃、父の話を聞いて書きとめたものである。（金テジョンの寄贈）



徴用令書　1944.4.5　関東機械製作所京城工場

総動員物資の生産に関する業務のため、李洪九（イ・ホング）を 1944 年 4 月 8 日より 2 年間、関東機械製作所株式会社京城工場に徴用する旨が記載されている。（ジョン・ジンヨンの寄贈）



軍鳩通信綠

金奇男（キム・ギナム）が南鮮第 17 方面軍京城師管区の砲工通信補充隊に動員された際、通信部隊の教育内容を手記したものである。（金奇男の寄贈）



徴兵検査記念写真　1944

徴兵検査を終えた後に、木浦神社の前で撮影した記念写真である。写真の下段に「昭和 19 年度徴兵検査記念撮影」と書かれている。金基祥（キム・ギサン）は済州島の牛島の第 12760 部隊に動員された。（金基祥の寄贈）



第一補充兵証書　1944.9.25 光州陸軍兵事部長

金基祥を陸軍第一補充兵役に編入すると光州陸軍兵事部が発した証書である。（金基祥の寄贈）



旗

金基祥の応召祝賀式に使用されたものである。金基祥は済州島の牛島の第 12760 部隊に動員された。（金基祥の寄贈）

日本窒素興南工場　第 1 種養成所第 1 期生訓練修了記念団体写真

咸鏡南道興南府の日本窒素株式会社人造航空燃料会社に動員された労務者たちの訓練修了後、寄宿舎を背景にして撮影した団体写真である。私企業が主導して、工場で養成工を訓練させたことを示す資料である。（尹ソンジュンの寄贈）





脚絆

脚絆は軍服または作業服を着る時、膝下に巻いて着用した布をいう。金基祥が済州島の牛島の第 12760 部隊所属の軍人として動員されていた当時に使用していたものである。（金基祥の寄贈）



襟章

金基祥（済州島牛島の第 12760 部隊に動員）が軍服の襟に付けていたもので「金田基祥　第二小隊二分隊」と記載されている。（金基祥の寄贈）



御守袋

金基祥（済州島牛島の第 12760 部隊に動員）がお札を入れて持ち歩いていた袋である。（金基祥の寄贈）



日本窒素興南工場　動員労務者団体写真

咸鏡南道興南府の日本窒素株式会社人造航空燃料会社に動員された、尹柱邦（ユン・ジュバン）と同僚たちの団体写真である。（尹ソンジュンの寄贈）



日本窒素興南工場　動員労務者個人写真

尹柱邦は咸鏡南道興南府の日本窒素株式会社人造航空燃料会社に動員された。（尹ソンジュンの寄贈）



第 160 師団司令部服務当時撮影写真

全学株（チョン・ハクジュ）は朝鮮南鮮第 17 方面軍第 160 師団（護鮮 22902 部隊）司令部所属の軍人として動員され、後に帰還した。（全ジュンホンの寄贈）



朝鮮総督府陸軍志願者訓練所の旗（金ヨンボクの寄贈）



1941 年 1 期生京畿道出身者記念写真

写真の上段に「昭和十六年度第一期生京畿道出身者記念撮影」と記載されている。厳龍仁（オム・ヨンイン）は 1938 年頃、京畿道楊平郡楊東面三山里にある作業場の労務者として動員された後、1941 年頃咸鏡北道会寧郡にある未詳の部隊所属の軍人として動員された。厳龍仁は後列の左側から五番目にいる。（厳ボクヒョンの寄贈）



大邱第 24 部隊訓練終了後記念写真　表 1944.5.16、裏 1944.5.6

大邱第 24 部隊に動員された金容福（キム・ヨンボク）が、3 ヶ月間の教育訓練終了後の記念に撮影した団体写真である。写真の下段に「19.5.16　大邱神社前三里行軍」、裏面に「昭和拾九年五月六日　三里行軍　大邱神社記念祭」と記載されている。金容福は前から二列目の右側から七番目にいる。〔大邱第 24 部隊は歩兵第 80 連隊〕（金ヨンボクの寄贈）



朝鮮有煙炭株式会社動員労務者団体写真 1944.4.25

写真に「労務斡旋　朝鮮咸鏡北道慶源郡龍德面龍北洞古乾原　朝鮮有煙炭株式会社　昭和十九年四月二十五日職員一同」という自筆の記録がある。黄雲城（ファン・ウンソン）は最前列の左端にいる。（黄ムホンの寄贈）



日章旗

徐丙基（ソ・ビョンギ）が鎮海海兵団に動員される前、友人と知人たちが書いてくれたものである。「特攻殉国」などと書かれている。（徐丙基の寄贈）



軍用水筒

李在煥（イ・ジェファン）が、咸興にある第 17 方面軍第 79 師団司令部、騎兵第 72 連隊所属の軍人として動員された時に使用した水筒である。（李在煥の寄贈）


現役兵證書

釜山陸軍兵事部長

右現役兵ニ徴集シ左ノ期日入團ヲ命ス

釜山陸軍兵事部長

現役兵証書　1944.12.27
釜山陸軍兵事部長

釜山陸軍兵事部が金璋甲（キム・ジャンガプ）に、1945 年 2 月 1 日午前 8 時までに鎮海海兵団に入団することを命じる証書である。金璋甲は釜山航空隊などに動員された。（金璋甲の寄贈）



千人針

徐丙基が軍人として動員される当時、無事帰還を願う母が村の女性たちより一針一針縫ってもらってつくったものである。（徐丙基の寄贈）

千人針とは「出征軍人」の武運を祈るため、千人の女性が一枚の布に赤い糸で一針ずつ結び目を縫ったものである。（日本語辞典より）


祝入團

大村彦太郎君

鎮海海兵団入営歓送式で使われた旗

徐丙基は、大阪府にある造船所に労務者として動員された。しかし、その後再び、鎮海海兵団所属の軍人として動員された。（徐丙基の寄贈）



作戦要務令便覧　1938.9.29

安承勲（アン・スンフン）が朝鮮軍管区平壌師団歩兵第 77 連隊補充隊に動員され、受け取った冊子である。作戦要務令の綱領、総則があり、戦闘序列、軍隊区分、指揮、連絡、情報、警戒、行軍などの内容が載せられている。（安承勲の寄贈）



入営者記念写真

安承勲が朝鮮軍管区平壌師団歩兵第 77 連隊補充隊に動員される前、友人たちと一緒に撮影した写真である。（安承勲の寄贈）



勤労報国隊光陽第 1 班　中央鉄道工事労務者団体記念 1940.10.10

写真の下段に「2600.10.10 勤労報国隊 光陽第 1 班　中央鉄道作業記念」と書かれている。宋貴万（ソン・グィマン）は中央線鉄道工事場に労務者として動員された後、帰還した。〔全羅南道光陽郡、現・光陽市〕（宋ボンホンの寄贈）

1. 中央線は清涼里 - 楊平 - 原州 - 堤川 - 栄州 - 安東 - 大邱 - 慶州に至る鉄道路線として、1939 年に一部が開通し、1942 年に全区間が開通した。日帝は中央線鉄道工事のため全国各地から勤労報国隊の形態で労働力を強制動員した。（朝鮮土木建築協会「土木建築協会報」参照）
2. 皇紀 2600 年：日本では当時、太平洋戦争が始まる前年の昭和 15（1940）年を皇紀二千六百年（または紀元二千六百年）と呼んだ。皇紀とは、日本神話で神武天皇が即位したとされる、（西暦）紀元前 660 年を元年とする年の数え方である。



第 5 回勤労報国団出動隊記念写真　1939.3.21

李会徳（イ・フェドク）が京畿道始興郡秀巖〔岩〕面勤労報国団として動員された時、撮影した団体写真である。（李スウンの寄贈）〔始興郡秀巖面、現・始興市〕



朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所　訓練兵の神社参拝後の行列（柳孟魯の寄贈）



朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所　入所式（柳孟魯の寄贈）



朝鮮 47 部隊野砲兵第 30 連隊補充隊　ガス兵団体写真

柳孟魯（ユ・メンノ）は最後列の右端にいる。（柳孟魯の寄贈）



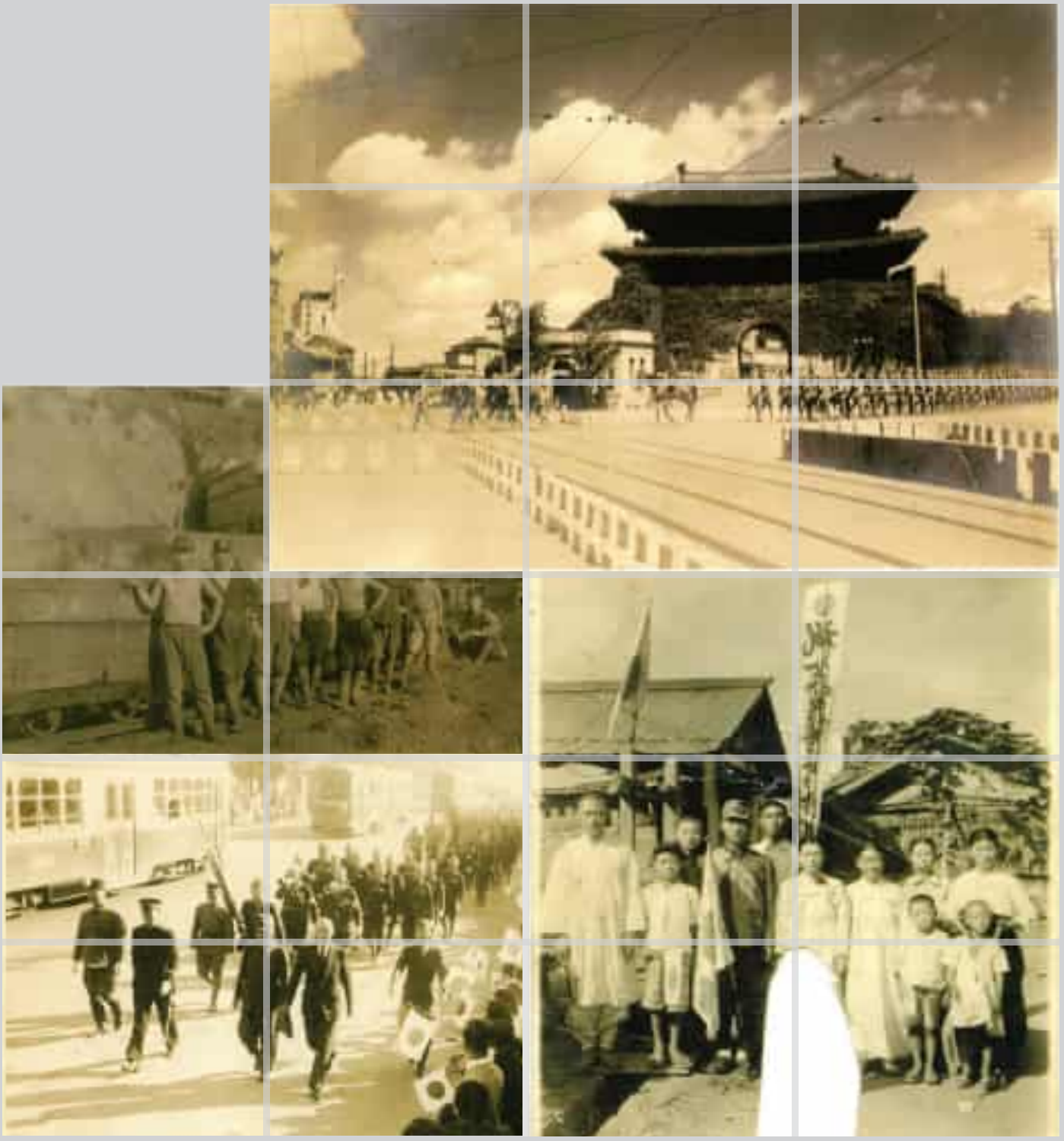
光陽産業戦士隊団体写真　1940.9.15

全羅南道光陽の朴奇俊（パク・ギジュン）と同僚たちは、平安北道定州地域の鉄道工事場に動員された。（朴ソンヨルの寄贈）



江華島華道面勤労報国隊員団体写真

江華島華道面勤労報国隊員として動員された朴忠遠（パク・チュンウォン）は、その後兵庫県にある三菱鉱業株式会社明延鉱山に動員された。朴忠遠は前から二列目の最右端にいる。（朴サンガプの寄贈）



その他地域

中国と満州地域〔中国の東北部〕には、旧ソ連と隣接する国境地域を中心に軍事要塞及び飛行場が建設された。日本は建設作業のため朝鮮人を動員する一方、1944 年志願兵制度を実施した。不足した兵力を補うため在満朝鮮人青年に対する徴兵制を実施して、その後、関東軍、日本国内方面軍、南方軍などに配置した。

サハリンは石炭と木材など不可欠な資源の宝庫であり、旧ソ連との国境地帯であるクリル列島〔千島〕は太平洋防御の戦略的拠点であった。戦争の激化により、軍需生産の現場である炭鉱、伐採場と軍事施設である飛行場建設、軍用道路及び鉄道建設の現場などに朝鮮人が動員された。朝鮮人は、酷寒の気候と不意の事故、空腹と民族差別などに耐えなければならなかった。さらに、1945 年 8 月 15 日、祖国は光復を迎えたが、サハリンが旧ソ連の領土に帰属したことにより、故郷へ帰還できなかったという苦難もあった。

南太平洋一帯〔日本が支配していた旧ドイツ領の島々〕は当時、南洋群島と呼ばれていて、1939 年より労務者及び農業移民募集の形式で朝鮮人が強制動員されたところである。各種土木工事場とサトウキビ農場に配置された労務者は、熱い太陽と風土病の危険の中でつらい労働に耐えなければならなかった。1941 年には朝鮮人を軍務員としても動員し、飛行場、防空壕など軍事施設建設などにも投入した。南洋群島は戦争最終盤の最大の激戦地であり、数多くの朝鮮人が死亡したところでもあった。アメリカ軍の捕虜となり解放の数年後に帰還した朝鮮人もいた。

In China and Manchuria areas, many fortresses and airfields were constructed centered the border with the Soviet Union. Japan mobilized Koreans for construction works, on the other hand, they implemented the volunteer system in 1944. Japan implemented the conscription against the young people living in Manchuria, and the mobilized young people were dispatched to Kwandong army, Bangmyun army（in Japan）and Nambang army.

Sakhalin is a rich repositary of timber and coal, and it was a border area of the Soviet Union, and the Kurils was a strategic position of the Pacific defense. As the war has intensified, Koreans were compulsory mobilized to the places of the lumber camps, coal mines, military roads, railway construction and airfield construction. They had to endure severe cold, hunger, accidents and racial discrimination. Moreover, they couldn't return home after the liberation 8.15 because Sakhalin has became vested in the Soviet Union again.

The South Pacific areas were called "Namyangundo" at that time, and Koreans had been mobilized since 1939 in types of overseas workers and agricultural settlers. Those who had been dispatched to the sugar cane farms and the places of public works, were exposed to topical endemic diseases, and they had to endure intense labor. In 1941, they were compulsory mobilized to the construction places of airfield, air-raid shelter and military facilities in type of civil worker in military. In the late of the war, 'Namyangundo' was the most ferocious battlefields of the war, so uncountable number of Koreans died in Namyangundo. Some Koreans became the prisoners of the war by USA, and some of them couldn't get free over a few years after the war ended.

中国



1935 年以後、日本の満州移民政策により中国〔東北部〕に行くことになった朝鮮人は 24 万人ほどになる。満鮮拓殖株式会社が 1941 年までに主管した開拓農民の移住者は 18 万 5,000 人であり、1941 年以後に行った人たちは 6 万人ほどになる。日中戦争の開戦で日本が本格的に侵略戦争を起こし、戦線が拡大されると、農業移民として中国に行った朝鮮人たちも戦争に動員された。

朝鮮半島に居住していた朝鮮人は 1924 年生まれが、在満朝鮮人はそれより若い 18 ～ 20 歳が徴兵対象となった。1944 年、徴兵によって配置された朝鮮青年の総数 4 万 5,000 人のうち、中国に派遣された朝鮮人は 2 万人を少し超える。学徒志願兵の中で 1,010 人が中国に配置され、陸軍志願兵の中でも一部が中国に配置された。全てを合わせれば 2 万 3,000 人ほどになり、軍務員は 4,500 人ほどと把握される。主要な中国戦線は満州全地域に及んでいて、南の海南島から中国の 16 の省に及ぶ。死亡者は東南アジアや太平洋地域よりは少ないと言われるが、日本の厚生省が発表した資料によれば、700 人以上が死亡したとされる。実際の死亡者数はそれ以上であると推定される。

海南島は、軍人が駐屯した場所であるが、朝鮮人が労働者として引っ張られ強制労働で虐げられた場所でもある。中国側の資料によれば、1943 年に 1,000 人の朝鮮人が海南島に到着したという。彼らは、京城や平壌などの刑務所 17 ヶ所に収監されていた囚人で、1943 年 5 月から動員された。海南島で死亡した朝鮮人は 1,000 人を超えるが、彼らの遺体はいまだに故国に戻れずにいる。

中国本土ではないが、朝鮮人が動員されて犠牲となった地域として台湾がある。台湾には第 10 方面軍など駐屯していた日本軍部隊に朝鮮人が配置され、約 4,000 人の朝鮮人軍人と軍務員、そして日本軍「慰安婦」がいたという。「被徴用死亡者連名簿」には朝鮮人 452 人が台湾で死亡したと記録されている。

◉ 出典

1. 鄭惠瓊、『朝鮮の青年よ 皇国臣民となれ』（韓国語）、西海文集、2010 年。

中国



朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所　入営歓送式の様子

李東久（イ・ドング）が軍人として動員され、朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所に入所する時、歓送式の様子である。李東久は訓練所修了以後、朝鮮北部の第 3 軍混成第 101 連隊、第 34 軍隷下〔第 59 師団〕独立歩兵第 42 大隊に所属し、中国の満州で服務し、帰還した。（李ソキの寄贈）



朝鮮総督府陸軍兵志願者の行軍の様子

朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所の訓練兵たちが街を行軍する様子である。（李ソキの寄贈）



鎮海海軍志願兵訓練所団体写真

鄭明出（チョン・ミョンチュル）が訓練所に在所当時、修了を記念して同僚たちと一緒に撮った写真である。鄭明出は横須賀第 4 特別陸戦隊に所属し、中国の海南島で服務の後、帰還した。（鄭明出の寄贈）



青年訓練所団体写真　1944

李英植（イ・ヨンシク）が軍人として動員された時撮影した写真であり、旗から見て青年特別錬成所の時の教練検定査閲の様子と推定される。李英植は関東軍第 1 方面軍の第 3 軍第 112 師団歩兵第 246 連隊に所属し、中国の満州で服務した後、帰還した。（李レヨルの寄贈）



陸軍戦時名簿　1944

崔栄根（チェ・ヨングン）の個人写真とともに、創氏名（山下一郎）、本籍、兵種、等級、履歴などが記載されている。名簿から、崔栄根が 1945 年 2 月 20 日に戦車兵として徴集され、京城連隊司令部に配置されたことを確認できる。崔栄根は関東軍第 3 方面軍に配属され、中国の満州で服務した。（崔栄根の寄贈）



罹患証明書　1945.11.1

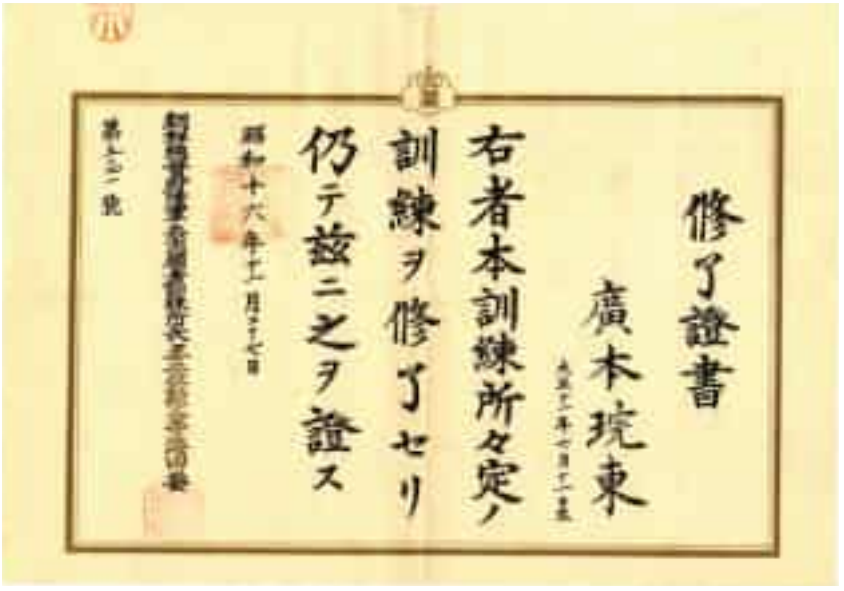
1945 年 11 月 1 日に支那派遣軍第 40 師団歩兵第 234 連隊が発給した証明書である。閔丙鎮（ミン・ビョンジン、平山定夫）がマラリアに罹患したことを証明する文書である。（閔丙鎮の寄贈）

個人手帳　1945.8.1

手帳は金鍾悳（キム・ジョンドク）が動員後の生活のなかで作成したもので、教育当時の周辺の風景スケッチ、教育内容、日記などが含まれている。金鍾悳は関東軍第 3 方面軍の独立混成第 79 連隊砲兵隊に配置され、中国の満州で服務した後、帰還した。（金鍾悳の寄贈）

乗船切符

金熙昇（キム・ヒスン）が帰還当時、中国で受け取った乗船切符である。乗船切符が付いている紙には乗船番号、所属部隊名などが記載されている。金熙昇は北支那方面軍直轄の野戦勤務隊に所属し、中国の河南省で服務した後、帰還した。（金熙昇の寄贈）


修了證書
廣本琓東
右者本訓練所々定ノ
訓練ヲ修了セリ
仍テ玆ニ之ヲ證ス

修了証書　陸軍兵志願者訓練所　1941.11.27

朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所で、1941 年 11 月 27 日、李琓東（イ・ワンドン）に発給した修了証書である。（李ビョンインの寄贈）



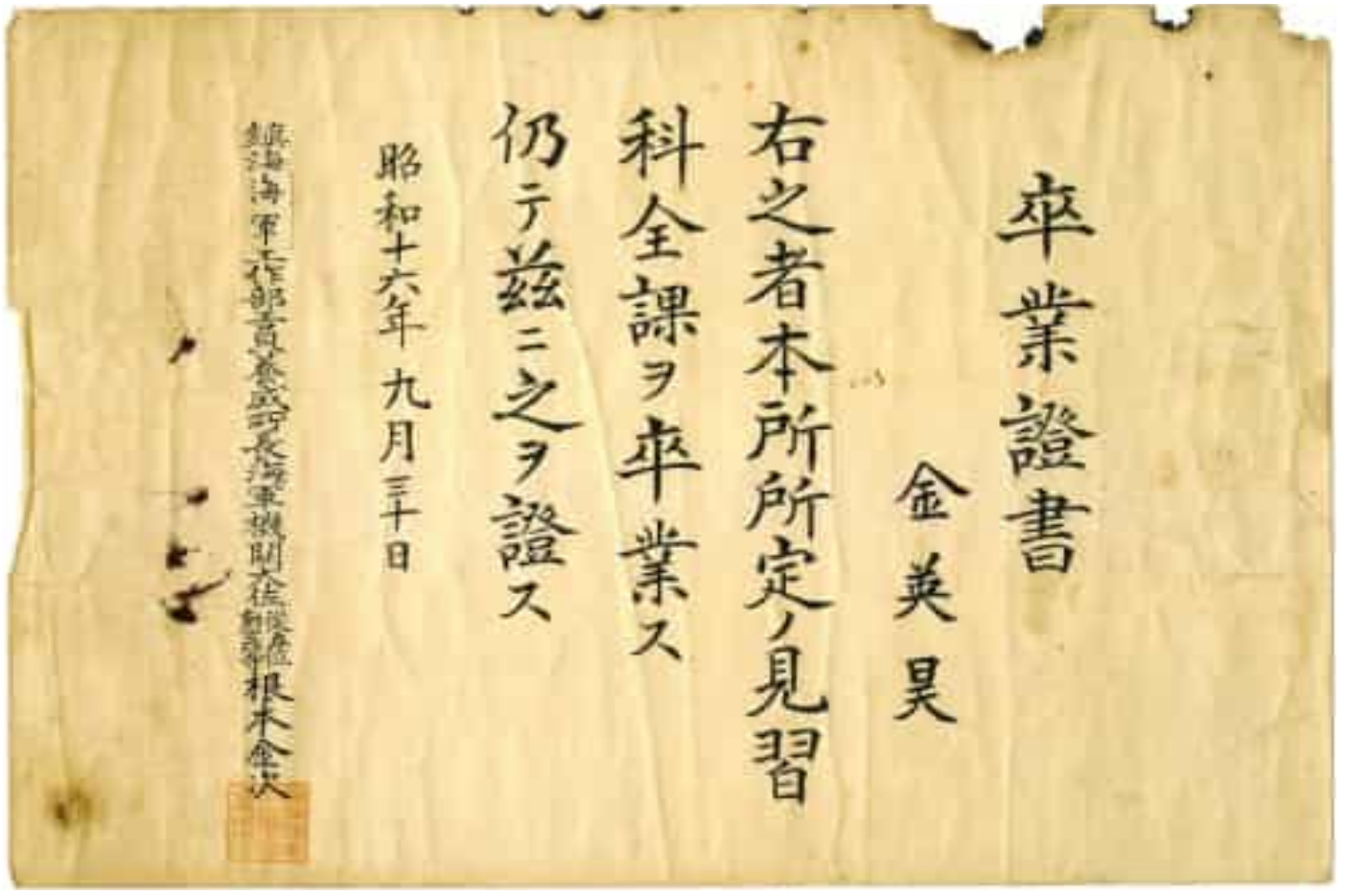
身分証明書　歩兵第 234 連隊 1945.10.10

1945 年 10 月 10 日、支那派遣軍の第 40 師団歩兵第 234 連隊で発給した証明書であり、関丙鎮の官等級、氏名、本籍地などが記載されている。（関丙鎮の寄贈）



軍隊手帳

記載された内容によれば、李琓東は朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所を修了後、1941 年 12 月 10 日、陸軍特別志願兵令第 1 条により、輜重兵として第 19 連隊補充隊第 1 中隊に入営、1945 年 8 月 29 日除隊した。（李ビョンインの寄贈）


卒業證書

金英昊

右之者本所所定ノ見習
科全課ヲ卒業ス
仍テ茲ニ之ヲ證ス

昭和十六年 九月三十日

鎮海海軍工作部員養成所長海軍技師 根本金次

卒業証書　鎮海海軍工作部工員養成所　1941.9.30

1941 年 9 月 30 日、鎮海海軍工作部工員養成所長名義で、金英昊（キム・ヨンホ）に発給された卒業証書である。（金英昊の寄贈）



ハガキ　1941 ～ 45

任炳教（イム・ビョンギョ）のハガキは 21 枚あり、三種類に分けられる。一つ目のハガキ群は任炳教が満蒙開拓青年義勇隊に動員された後、家族及び知人に送った 17 枚である。ハガキを発信地別に区分すると、下関が 1 枚、茨城県にある満蒙開拓青少年義勇軍訓練所が 3 枚、満州哈爾浜（ハルビン）市にある満州開拓青年義勇隊が 13 枚である。二つ目のハガキ群は任炳教が知人より受け取った 3 枚であり、三つ目のハガキは任炳教の本籍地に訓練所の中隊長が送った 1 枚であり、任炳教に対する配慮と家族からの協力を頼む内容である。任炳教は満州開拓青年義勇隊に動員された後、行方不明となった。（任ドギョの寄贈）



入営者歓送記念家族写真　1944.9.7

田文奎（チョン・ムンギュ）が入営する前に家族と一緒に撮った写真で、裏面には「1944.9.7」と記載されている。田文奎は支那派遣軍第 23 軍隷下の第 130 師団砲兵隊に軍人として動員された後、帰還した。（田文奎の寄贈）



入営者団体写真　1944

中国で誠〔通称号〕第 8 飛行師団第 158 独立整備隊に動員された李商雨（イ・サンウ）と同僚たちが、入営記念として尚州公立農蚕学校で撮影した団体写真である。左側の旗には李商雨の創氏名（国本剛孝）と同僚たちの創氏名が記載されている。李商雨は最前列の右側から四番目にいる。（李商雨の寄贈）



脚絆

中国の満州にある未詳の部隊所属の軍人として動員された後、行方不明となった裵貞根（ペ・ジョングン）が使用していたものである。脚絆にある文字「父の遺品、父さん裵貞根、娘　裵ナンオク」は娘の裵ナンオクが、幼い頃に書き記したものである。（裵ナンオクの寄贈）



襷（たすき）

「陸軍特別志願兵　沙月忠錫君」と書かれた姜忠錫（カン・チュンソク）の襷である。中国の北支方面軍第 43 軍隷下独立歩兵第 16 大隊に動員される際、面事務所が作った。（姜ジュングの寄贈）



ふんどしと手袋

姜忠錫が中国の北支方面軍第 43 軍隷下独立歩兵第 16 大隊に動員された時、使用したものである。寄贈者の口述によれば、ふんどしは海でサメ退治〔サメ除け〕のため着用したという。手袋は剣道の練習時に使用したもので、親指と人差し指だけはめることができるようになっていて、姜忠錫の創氏名「沙月」が記されている。（姜ジュングの寄贈）



軍服ボタンと銃口掃除用具

韓昌洙（ハン・チャンス）が龍山 22 部隊の軍人として動員された時に支給された軍服のボタンと、解放後、帰還する時に持ってきた銃口掃除用具である。韓昌洙は中国の支那派遣軍第 13 軍隷下の部隊に動員された後、帰還した。（韓昌洙の寄贈）



針箱と洗濯ブラシ

洗濯ブラシは韓昌洙が軍人として動員中に使用していたもので、裏面には本人の名前が記載されている。針箱に針は残っていない。（韓昌洙の寄贈）



軍用水筒

中国の満州の嗣平市〔ママ、四平市〕にある工兵部隊の軍人として動員された時、崔哲鎬（チェ・チョルホ）が使用した水筒である。（崔哲鎬の寄贈）



防寒用軍帽

中国の満州地域に軍人として動員された時、李琓東が使用したものである。内側に起毛がある。（李ビョンインの寄贈）



軍服と認識票

中国の河南省に軍人として動員された孫昌葉（ソン・チャンソプ）に支給された軍服と認識票である。（孫昌葉の寄贈）



防寒用下着

中国の満州地域に軍人として動員された時、李琓東が使用したものである。（李ビョンインの寄贈）



陸軍兵志願者による東大門前の行軍　1941

朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所の訓練兵による東大門前の行軍の様子である。李琓東は軍人として動員され、朝鮮北部、第 17 方面軍の羅南師管区（朝鮮第 212 部隊、輜重兵）に所属し、中国の満州で服務した後、帰還した。〔羅南は咸鏡北道〕（李ビョンインの寄贈）



死亡内報　1945.6.3

1945 年 6 月 3 日清州陸軍兵事部長が張済相（チャン・ジェサン）の戦死を知らせる死亡内報及び別紙である。別紙には張済相に関する正式な死亡公報があるまでは、張済相の死亡事実を家族だけに知らせ、葬式を行わないことと、戸籍訂正も死亡証明書の後にせよなどの注意事項が伝えられている。張済相は中国の支那派遣軍直轄部隊で服務中、中国の湖南省で死亡した。（張セジュンの寄贈）



採用証書　1944.4.10
佐世保鎮守府

1944 年 4 月 10 日、佐世保鎮守府が発行した採用証書である。金英昊（キム・ヨンホ、加島伸悦）を海軍予備補習生（工作科）に採用するという内容である。金英昊は台湾航空隊所属の工作兵として服務した後、帰還した。（金英昊の寄贈）



入営者歓送記念家族写真

権五淑（クォン・オスク）が動員される際に家族と一緒に撮った歓送写真である。写真の中央に権五淑が襷を掛けて日章旗を持っている。権五淑は支那派遣軍の第 6 方面軍第 20 軍隷下、工兵第 116 連隊に所属し、中国で服務した後、帰還した。写真の下段が破れているのは、朝鮮戦争の時に死んだ子息を見るのが辛くて、権五淑が自ら切り取ったためである。（権五淑の寄贈）



朝鮮軍人自営隊名札　1945

中国の海南島に横須賀第 4 特別陸戦隊所属の軍人として動員された鄭明出（チョン・ミョンチュル）の、朝鮮軍人自営隊の時の名札である。（鄭明出の寄贈）

朝鮮軍人自営隊は第 2 次世界大戦終戦後、朝鮮人たちが帰還する過程で結成した団体である。

シベリアに抑留された朝鮮人捕虜

1945 年 8 月 9 日、170 万に達するソ連極東軍は電撃的にソ満国境を越え進撃した。これは 1945 年 2 月に米英ソ連の首脳部が集まった「ヤルタ秘密会談」の決定によるものだった。ソ連軍による武装解除地域は中国東北地域（満州）、北緯 38 度以北の北朝鮮、サハリン及び千島列島などだった。朝鮮人が強制動員された地域のうち、シベリア抑留と関連したところもまた前記の地域である。ソ連軍の精鋭兵力は関東軍を武装解除させ、彼らを捕虜として捕え、シベリアとモンゴル一帯の収容所に抑留した。これはポツダム宣言の規定により本国に送還するという計画を全面的に否定するものであり、日本軍捕虜を利用して第 2 次世界大戦の被害を復旧しようとするソ連の独断的な判断の結果だった。

当時、関東軍には約 1 万 5 千人余りの朝鮮人が含まれていた。関東軍に所属していた朝鮮人は主に日本「帝国」による徴兵によって強制動員された人たちであり、武装解除と同時に祖国へ帰れるはずであった。ところが少なくない数の朝鮮人が日本人と区分されないまま抑留された。関東軍内で朝鮮人が区別されなかった理由は、日本軍指揮官が朝鮮人を区分せず、またソ連軍もそのことに無頓着だったためであった。

朝鮮人を含む日本軍のシベリア抑留問題は、国際社会の傍観と無責任も一役買っている。国際連合は抑留が始まってから 5 年もたった 1950 年 12 月、第 5 次国連総会で初めて論議を始めたが、要求事項も個人の基本情報〔人定事項〕の公開に限定した。のみならず日本軍に含まれ強制的に抑留され、等しく虐待されたという二重の被害を被っている朝鮮人に対して、その存在すら取り上げなかった。

◉ 出典

対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会、「シベリア抑留朝鮮人捕虜問題真相調査」、2010 年〔『委員会活動結果報告書　附録Ⅱ－ 1』（韓国語）、2016 年、6 － 44 頁。https://dl.nanet.go.kr/search/searchInnerDetail.do?controlNo=MONO1201625431〕



シベリア抑留朝鮮人捕虜のハガキ　1947.4.28

このハガキは、申鉉尚（シン・ヒョンサン）がシベリアで捕虜になった際、家に送ったものである。申鉉尚は中国の北支方面軍第 13 軍隷下部隊に所属する軍人として動員されたが、日本の降伏でソ連軍の捕虜となりシベリアなどの地で労役をした後、1948 年 12 月に帰還した。（申鉉尚の寄贈）

シベリア抑留朝鮮人捕虜のハガキ　1948.3.25

このハガキは、1948 年 3 月 25 日、金奉燮（キム・ボンソプ）がシベリアで捕虜になった際、全羅北道沃溝郡米面開寺里〔現、群山市〕の金孟燮（キム・メンソプ）に送ったもので、自身の近況と家族の安否を尋ねる内容が記載されている。金奉燮は中国の満州にある未詳の部隊所属の軍人として動員中、ソ連軍の捕虜となり収容された後、1948 年 12 月に帰還した。（金奉燮の寄贈）





КОМИТЕТ ПО ДЕЛАМ АРХИВОВ
при Правительстве Российской Федерации

ЦЕНТР ХРАНЕНИЯ ИСТОРИКО-ДОКУМЕНТАЛЬНЫХ КОЛЛЕКЦИЙ

労働証明書　1993

1993 年にロシア記録管理委員会の歴史記録収集保管所が朴定毅（パク・ジョングィ）に発行した労働証明書である。1945 年 8 月 16 日から 1948 年 12 月 20 日までクラスノヤルスク収容所に収容された内容と、未払い金 4,378 ルーブルが確認できる。朴定毅は関東軍第 4 軍第 119 師団歩兵第 253 連隊（宰 20462 部隊）所属の軍人として動員中、ソ連軍の捕虜となり収容された後、帰還した。（朴定毅の寄贈）



労働証明メダル　1993

1993 年にロシア記録管理委員会の歴史記録収集保管所が朴定毅に発行した労働証明メダルである。（朴定毅の寄贈）



労働証明メダル　1992.12.5

解放後、ソ連軍捕虜となりハバロフスク捕虜収容所でロシア建設の仕事などに従事して帰還した朝鮮人に、1992 年にロシア政府が授与した労働証明メダルである。封筒及び寄贈書、メダルがセットになっている。メダルを授与された権明奎（クォン・ミョンギュ）は中国の満州にある第 1 方面軍第 5 軍の第 126 師団歩兵第 279 連隊に所属する軍人として動員中、ソ連軍捕虜となり、ハバロフスク捕虜収容所に収容された後、帰還した。（権明奎の寄贈）

サハリン地域



「黒い川の入り口」と呼ばれた土地は、北部のサハリンと南部の樺太（南サハリン）に二分された。日本統治時期に南サハリンには 56 ヶ所の炭鉱があったことが確認される。朝鮮人動員が確認された 35 ヶ所の炭鉱の内、各郡別では、名好郡 8 ヶ所、恵須取郡 12 ヶ所、泊居郡 1 ヶ所、真岡郡 2 ヶ所、本斗郡 1 ヶ所、豊栄郡 3 ヶ所、大泊郡 1 ヶ所、敷香郡 2 ヶ所、元泊郡 3 ヶ所などの 33 ヶ所の炭鉱の位置を確認できている。

これらのうち、三菱は南樺太炭礦鉄道株式会社を設立して、内幌炭鉱、塔路炭鉱、北小沢炭鉱、白浦炭鉱など 4 ヶ所の炭鉱を運営した。三井は、内川炭鉱、川上炭鉱、西柵丹炭鉱などを経営した。王子製紙株式会社は樺太鉱業株式会社を通じて知取炭鉱、大栄炭鉱、大平炭鉱、白鳥沢炭鉱などを経営した。この他に日鉄鉱業株式会社の安別炭鉱、泊岸炭鉱、樺太人造石油株式会社の内淵炭鉱、鐘淵紡績株式会社の上塔路炭鉱[3]、そして豊畑炭鉱株式会社、樺太石炭鉱業株式会社などの炭鉱会社が確認される。

また、炭鉱開発のため、それに付随する諸種の施設工事や飛行場、軍事基地の構築にも多くの朝鮮人が動員された。ソ連の南サハリン占領後、連合国間の合意により日本国民は本国に送還されたが、朝鮮人は除外され、1990 年の韓ソの国交樹立まで韓国への合法的な帰国の道は閉ざされてしまった。

◉ 出典

対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会、「サハリン強制動員朝鮮人たちの実態及び帰還」、2011 年〔『委員会活動結果報告書　附録Ⅱ－ 2』（韓国語）、2016 年、76 － 153 頁。https://dl.nanet.go.kr/search/searchInnerDetail.do?controlNo=MONO1201625431〕

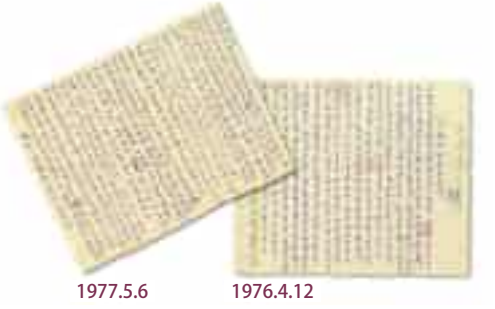
3　上塔路炭鉱の鉱業権は 1943 年に鐘淵實業株式会社にあった。1937 年に鐘淵紡績会社が樺太庁から石炭鉱区を買収し、樺太採炭鉱業株式会社を設立して事業に着手し、1941 年、鐘淵實業株式会社に名義が変更された。日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会『サハリン「二重徴用」被害真相調査』、2007 年、13-22 頁から再引用（原文、樺太鉱業会、『樺太炭礦案内』、1943 年、80 頁。）。鄭安基、「1930 年代鐘紡の多角化とグループ展開」『経済論叢別冊　調査と研究（京都大学）』第 16 号、1998 年 10 月、15-46 頁。

サハリン



衣料通帳

黄長淳（ファン・ジャンスン）が樺太鉱業株式会社白鳥沢炭鉱で衣服を支給される時、使用していた通帳である。（黄インクォンの寄贈）



1977.5.6　　1976.4.12

母親から息子に送られた手紙

サハリンのウグレゴルスク〔旧、恵須取〕にある樺太鉱業株式会社珍内（ちんない）炭鉱に動員された李興雨（イ・フンウ）の妻、金喆順（キム・チョルスン）が、日本の朴魯学（パク・ノハク）を経由して息子の李サンファに送った手紙である。（アン・クァンジャの寄贈）

金喆順が息子の李サンファへ送った手紙 1976.4.12

息子のサンファへ

この手紙は母からのものだよ。無情にも歳月は流れお前と別れてから、いつの間にか三十有余年が過ぎたんだね。この母はお前を故国に送り出した後、解放になって互いに両方の生死が分からなくて昼夜気になって苦しかったよ。けれど、昨年 1975 年の末に故国に手紙を送った後、昼夜手紙の返事を待っていると、折よく、1976 年 4 月 9 日に故国から手紙の返事が家に着いたのよ。この間、お前たち夫婦、また子どもたちも皆、健康であるのか知りたかったよ。この母は遠い海外のサハリンのホルムスクというところで、お前の妹サンエ、それに弟サンギュン、二番目のサンウォル、三番目のサンソルとともに、みな達者だから安心しておくれ。それに、今サハリンに住んでいる母はお前と別れた後、昼夜とても心配してきたけど、今回手紙の返事に同封したお前たち夫婦の写真を受け取った時、それはまるで生前に私たち母子が再会したかのようで、嬉しいことこの上なかったよ。くれぐれもお前の身体が健康であることを願うよ。それに一つ悲しいことは、お前の父親が 1976 年の新暦 2 月 1 日にこの世を去って故人になってしまったので知らせておくよ。言いたいことは山ほどあるけれど、今日はここまでで止めるよ。どうかこの後再会して、この間の三十有余年、積もりに積もった思いを解き放ってくれるその日を待っているよ。最後に、こちらの家族写真を同封するので受け取っておくれ。この後、お前の家族写真を一枚受け取りたいよ。

1976 年 4 月 12 日　サハリンのホルムスクにて　母



協和会会員章　1944.8.15

サハリンにある樺太協和会豊原支会で、大原組土工として動員された李斗燮（イ・ドゥソプ）に発給された協和会会員章である。（金チャンソンの寄贈）



協和会会員章　1942.6.3

サハリンにある白鳥沢鉱業所採炭部に動員された黄長淳に、樺太協和会が発給した会員章である。会員姓名、生年月日、出生地、本籍地、現住所、就業欄などがある。（黄インクォンの寄贈）



サハリン美田鉱業所へ動員された労務者たち

サハリンのノビコボ〔旧、弥満〕にある石原産業海運株式会社美田鉱業所に動員された金鍾学（キム・ジョンハク）が、同僚たちと撮影した写真である。写真には「美田鉱業所従業員　三十五名結誼兄弟一同」と記載されている。（金ハンギョンの寄贈）



遺骨保管関連手紙　1945.3.20

菅原組の千島列島（現、クリル列島）にある未詳の作業場に動員された権鎮起（クォン・ジンギ）が、1944 年 4 月 30 日に病死し、その遺骨を釧路市定光寺に安置したことを家族に知らせる手紙である。（権ジングクの寄贈）〔釧路市の菅原組は千島列島の軍工事で急成長。〕



石炭運搬装置の前の労務者たち

サハリンにある未詳の作業場に動員された姜烽（カン・ボン）が、同僚たちと一緒に石炭運搬装置を背景にして撮影した写真である。姜烽は 1943 年から労務者として動員された後、帰還した。（姜ソンギュの寄贈）



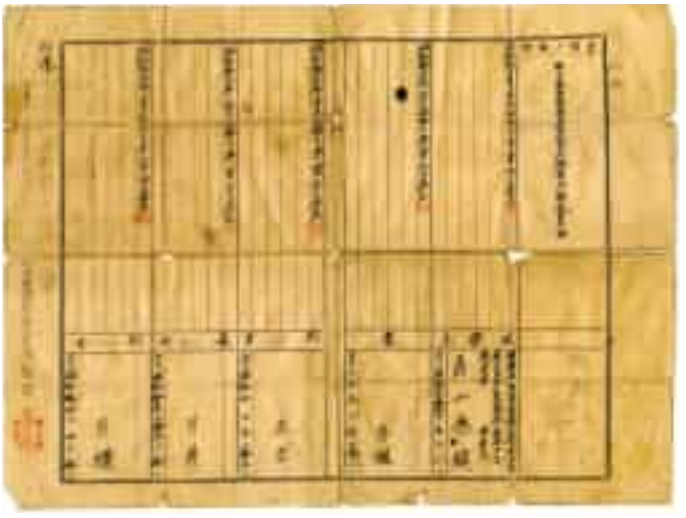
解放後、朝鮮学校の教師と学生

サハリンの落合町〔現ドーリンスク〕にある内淵炭鉱の火夫として動員されて、解放後帰還できなかった柳時郁（ユ・シウク）が朝鮮学校教師として活動した当時の写真である。（柳ジョンハの寄贈）



強制動員された労務者の子どもたちの学校

サハリンのレソゴルスク〔旧、名好〕にある豊畑炭鉱に動員された安チルボンの子どもが通った日本の学校である。この写真は父母が二重徴用によってサハリンを離れる際、朝鮮人生徒たちが集まり、撮影したものである。（安ミョンボクの寄贈）



寄留書類

サハリンのブイコフ〔旧、内淵〕にある樺太人造石油（株）内淵炭鉱採炭部に動員された、宋応鎮（ソン・ウンジン、嘉山応鎮）の家族の寄留事実が記録された樺太庁発給の書類である。（宋ウォルレの寄贈）



朴魯学の受信手紙

故朴魯学は樺太抑留帰還者同盟を結成し、30 年余の間、会長として活動した。手紙は朴魯学が 1966 ～ 1976 年の間に日本で受け取ったもので、当時サハリンに居住していた抑留同胞たちの生存時の記録である。全部で 1,350 通の手紙があり、「朴魯学受信手紙」とよばれる。（朴チャンギュの寄贈）

朴魯学



朴魯学は 1914 年忠清南道忠州で生まれた。1944 年サハリンの樺太人造石油会社西内淵炭鉱に強制動員された。解放になっても帰還できなかった朴魯学は日本人と結婚、その後 1956 年 10 月 19 日の「日ソ共同宣言」により韓国人たちにも日本人の家族として送還される道が開かれ、1958 年に日本に移住した。彼は「サハリンから帰れなかった韓国人たち」の郵便配達人となることにして、一緒に日本に渡ってきた李義八（イ・ヒパル）らと「樺太抑留帰還韓国人会」〔のち「樺太帰還在日韓国人会」〕を結成し、30 年余の間、サハリン抑留同胞たちの消息を韓国の家族たちに伝える仕事をした。朴魯学は 1988 年に日本で死亡した。



樺太抑留帰還希望者の名簿

黒い大陸から来た手紙

尹允徳（ユン・ユンドク）は 1920 年生まれで、1941 年息子の尹権浩（ユン・グォンホ）が 3 歳になった年に「黒い大陸」※ サハリン（樺太）に強制動員された。尹允徳はサハリンのウグレゴルスクにある大平炭鉱と、レソゴルスクにある豊畑及び西柵丹炭鉱などで労務者として生活した。解放後には帰還できるものと思っていたのだが、息子の尹権浩との再会は 3 歳の時以来とうとう果たすことができなかった。

ソ連は 1945 年 8 月 8 日、日本に宣戦布告を発した後、南サハリンに進撃した。ソ連軍は同月 23 日、豊原に進駐して宗谷海峡を封鎖した。海峡封鎖前に約 10 万人に及ぶ日本人は本国に帰還したが、残りの約 3 万人の朝鮮人は南サハリンに残された。尹允徳はその中の一人だった。

日本は 1946 年 12 月 19 日、東京で「ソ連地区引き揚げに関する米ソ協定」を締結し、1947 年春から 1948 年にかけて自国民に対する送還を始めて、その後、何度も送還がなされた。しかし、尹允徳のようなサハリンに抑留された韓国人は、1990 年の韓ソ国交樹立以後、やっと帰国の道が開かれるようになった。だが、尹允徳はついに韓国に帰還できずにサハリンで死亡した。

息子の尹権浩は 2007 年 6 月、委員会に父である尹允徳の写真と受け取った手紙を寄贈した。「（尹）権浩よ、すべてを許しておくれ」という手紙の語句には、息子が大きくなる姿を見守ってあげられなかった父の言いようのない気持と息子に対する愛情が余すところなく込められている。

◉ 出典

対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会、「サハリン強制動員朝鮮人たちの実態及び帰還」、2011 年〔『委員会活動結果報告書　附録Ⅱ－ 2』（韓国語）、2016 年、76 － 153 頁。https://dl.nanet.go.kr/search/searchInnerDetail.do?controlNo=MONO1201625431〕

※ 13 ～ 14 世紀に沿海州とサハリン地域に入ってきたモンゴル - タタール人は、アムール川に「サハリン - ウラ」という名称を付け、河口にあるこの地を「黒い川に入る岩」と呼んだ。（日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会、『黒い大陸に引っ張られた朝鮮人たち』、2006 年、307 頁）。



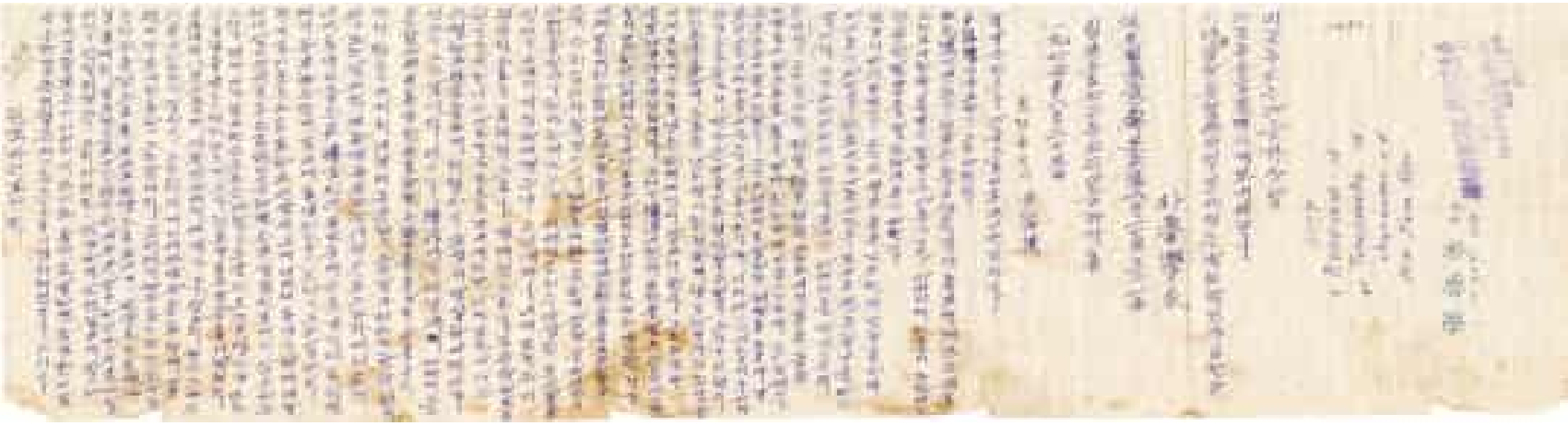


サハリン豊畑炭鉱
炭車の前の労務者

尹允徳がサハリンのレソゴルスクにある豊畑炭鉱で、同僚たちと炭車を背景にして撮影した写真である。尹允徳は最左端にいる。（尹権浩の寄贈）

サハリン豊畑炭鉱　炭車の前の労務者

尹允徳がサハリンのレソゴルスクにある豊畑炭鉱で、同僚たちと炭車を背景にして撮影した写真である。写真の裏面に「1943. 豊畑炭〇運炭業」と手書きで書かれている。尹允徳は左側から五番目にいる。（尹権浩の寄贈）



父親から息子に送られた手紙（尹権浩の寄贈）

尹允徳が息子の尹権浩へ送った手紙・全文　（1974.8.23）

権浩へ

歳月は流水の様に流れ、いつの間にか 33 年も経ってしまった。何よりも、罪はこの父にある。二番目を言うと、国境関係で書信が断絶されたことだ。ソ連政府の命令で、南朝鮮行きの郵便は警察が大部分を押収してしまうので、サハリンからは直接送れない。だから、まずソ連本土に送り、そこから送ってもらわなければならない。そんな事情があったことをわかってほしい。

7 月 15 日と 8 月 15 日の KBS 放送を聞いた。権浩、お前が薄情なこの父を、どんなに想っていてくれたか、その心境はよくわかった。権浩よ、すべてを許しておくれ。私は今、サハリンのウグレゴルスク、ボシュニャコヴォに住んでいるが、この住所に手紙を送っても、警察に押収されてしまう。だから、この住所に送ってはいけない。本土でお前の 3 番目の弟が大学に通っている。その子の名前で送ることにする。お前の弟の名前は尹権吉、公民証にはユン･ケンキチになっている。弟の大学はモスクワからさらに行ったヴォロネジにあって、そこで学んでいるから、もし私に手紙をくれるなら、その弟に出してくれれば、無事に届くだろう。

しかしながら、お前が３歳の時に私と離れ離れになって、どれだけ苦労したことだろう。天真爛漫なお前は何も知らずに育ったかもしれないが、お母さんは女手ひとつで、精神的にも肉体的にも、そして経済的にも、あらゆる面で苦労したに違いない。そして、この私をどれだけ恨んだことだろう。私は当然その罪のすべてに責任を負わなければならない。解放後に手紙を出して返事を受け取ってみると、お前の母さんは、「樺太の朝鮮人は皆死んだ」とのデマを信じて、やむなく再婚したとあった。私はお前の母さんが再婚してよかったと思ったよ。お母さんは今元気か？ それを教えてくれ。

ラジオで聞いたところでは、お前も結婚して、男の子が生まれたそうだな。私がどんなに喜んでいるか、言葉では言い表せない。この手紙が届いたら、お前の家族の写真を送ってくれないか。そして、お前の息子の名前を教えておくれ。私自身のことを言うと、解放後も祖国に帰れる可能性がなくて、やむを得ず再婚したんだ。今、5 人の子供がいる。 クォンイル、クォング、クォンギム、それから娘のボクスン、クムスンだ。私は今、無国籍の公民証を所持している。この父の写真を送るから、父に会ったと思ってほしい。権浩よ、お前の家族の写真も送ってくれたら、みんなに会えたような気がするだろう。伯父、仲父〔お父さんの二番目の兄〕、季父〔お父さんの末の弟〕にも、くれぐれもよろしく伝えておくれ。そして、お前に伝えておきたいことがあるんだが、私の名前は、以前は尹允徳だった。今は族譜（家系図）の世代順を示す漢字を入れて、尹滋徳となっている。書きたいことは山ほどあるが、今日はこのぐらいにしておくよ。

尹滋徳（ユン・ジャドク）

一九七四年八月二十三日

東南アジア・南太平洋



南洋群島とは、中部太平洋にある諸島を指すが、マーシャル、カロリン、マリアナ、ギルバート諸島がこれに属する。日本は中部太平洋地域を「南洋」、「南洋群島」、「南洋諸島」、「内南洋」などと呼び、日帝強占末期には東南アジア地域と共に「南方」ということもあった。第1次世界大戦に参戦した日本は、1914年10月12日、マーシャル諸島のジャルート（ヤルート）を占領し、チューク（トラック）に海軍司令部を置いてサイパン、パラオ、チューク、ポナペ（ポンペイ）、ジャルート、ヤップの六区域に分けて統治し、1922年4月に南洋庁を設立した。日中戦争以後、戦時にむけての港湾と飛行場など軍関連工事をすすめるなかで労働力が不足するや、朝鮮からの労働力を求めるようになった。斡旋労働者や農民として南洋群島に行った朝鮮人は、1941年に太平洋戦争が開始されると、大部分が軍務員または被徴用者として徴発された。彼らは飛行場や軍関係施設の工事場での労働や物資の荷役や食糧の調達を担当した。

1940年11月19日に公布された「海軍徴用工員規則」により、徴用工員を海軍軍属として動員できるようになり、朝鮮では1941年12月より1945年まで約15万人の若者たちが軍務員として動員された。この中で東南アジアに動員された軍務員は4万7,000人程度とみられる。東南アジアでは朝鮮人の捕虜監視員や軍務員が主に動員されたが、日本軍人として動員された朝鮮人もいた。1962年に日本の厚生省援護局が発表した統計によれば、フィリピンとインドネシア、ニューギニア、ミャンマーなどの地に動員された朝鮮人軍人は、全地域の中で8.2パーセントだった。当時動員されていた朝鮮人軍人軍属数を23万人とすれば、8.2パーセントは1万8,860人となる。〔1962年厚生省援護局統計の朝鮮人軍人軍属数は約24万人。〕

◉ 出典

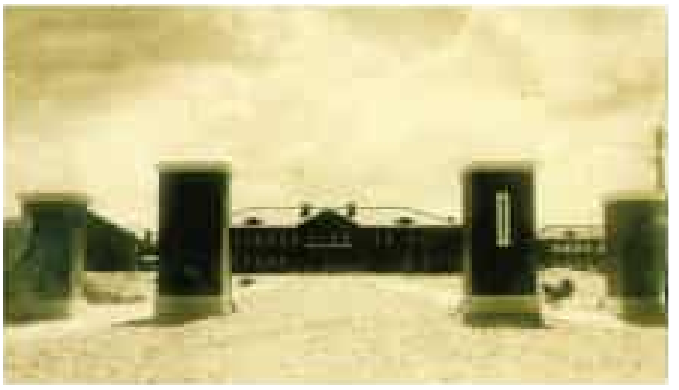
鄭惠瓊、『朝鮮の青年よ 皇国臣民となれ』（韓国語）、西海文集、2010年。

東南アジア・南太平洋地域



光化門街行軍の様子　1942.9.12

朴洛淳（パク・ナクスン）が、朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所に在所当時、光化門街を行軍する様子である。朴洛淳は歩兵第 79 連隊に動員され、東部ニューギニア（New Guinea）で死亡した。（朴ウィチュンの寄贈）



朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所の全景（朴ウィチュンの寄贈）



訓練所入所式の様子

写真の下段に「眞崎学務局長閣下 訓示」と記載されている。（印ギョンスルの寄贈）

入営者歓迎記念写真

印金寿（イン・グムス）が軍人として動員された時、動員された他の人たちと一緒に撮った記念写真である。300 人余りが一緒に撮った団体写真で「祝入所陸軍特別志」と書かれた旗が確認できる。印金寿は南方軍第 8 方面軍第 20 師団に動員され、東部ニューギニアで死亡した。（印ギョンスルの寄贈）





葬式行列　1944

鄭英植（チョン・ヨンシク）は横須賀〔海軍〕施設部の工員として動員されたが、1944 年 1 月 27 日に死亡した。（金チュンジャの寄贈）



葬式祭壇全景　1944

鄭英植は横須賀〔海軍〕施設部の工員として動員されたが、1944 年 1 月 27 日に死亡した。（金チュンジャの寄贈）



第 30 区隊団体写真

黄華淵（ファン・ファヨン）が軍人として動員された時に撮影した団体写真で、裏面には「第 30 区隊 黄山華淵」と記載されている。黄華淵は独立混成第 53 旅団独立歩兵第 348 大隊に動員され、パラオ第 123 兵站病院で死亡した。（黄インファの寄贈）



1942 年度後期第 14 区隊訓練生　1942

金昌鉄（キム・チャンス）が朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所に在所した時に、撮った団体写真である。金昌鉄は前から四列目の右側から六番目にいる。金昌鉄はビルマ方面軍隷下第 49 師団衛生隊の軍人として動員され、ミャンマーで死亡した。（金インスの寄贈）



戦没者合同葬式写真

第 4 海軍施設部工員として動員され、ミリ（Mili）島で死亡した周森平（チュ・サムピョン）らの合同葬式の様子である。写真の下段に「大東亜戦争戦没者横須賀鎮守府合同葬儀」と記載されている。（周ジョンドクの寄贈）



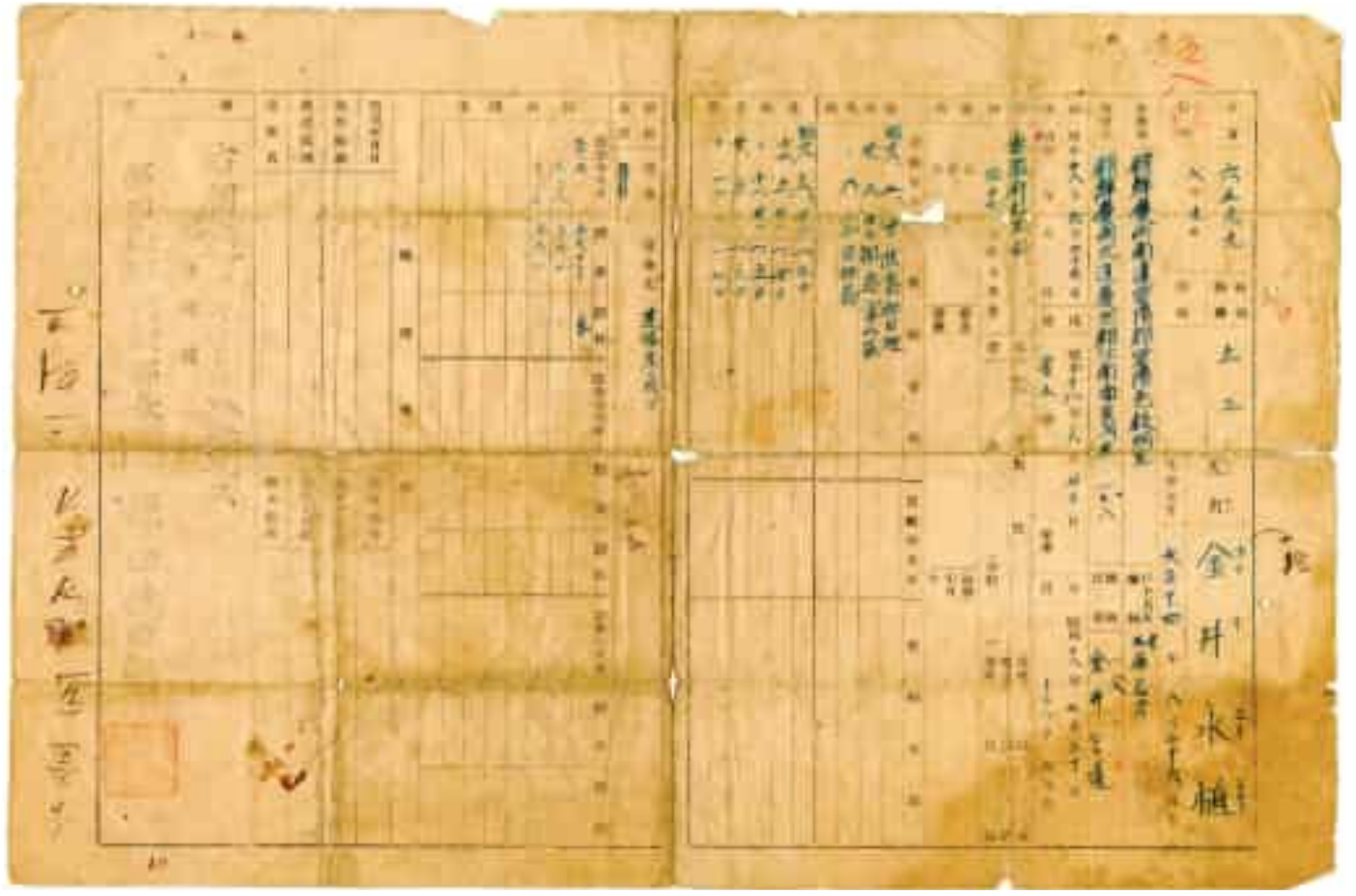
御慰問、祭粢料封筒

第 4 海軍施設部工員として動員され、ミリ島で死亡した周森平〔世田森平〕に、当時の日本赤十字社と大日本婦人会全羅南道支部が贈った慰問金封筒などである。（周ジョンドクの寄贈）



南方トラック島徴用者賃金計算書

兪命同（ユ・ミョンドン）が、「南方トラック島被徴用者名簿」を作成するための根拠資料として使用した文書で、動員された時に支給された稼働額明細書、支給明細書、給料支給明細書、工員給料支給明細書、短期工員給料支給明細書などで構成されている。「南方トラック島被徴用者名簿」は兪命同氏が帰国後、「トラック島朝鮮民団本部」を結成し、部長として活動しながら、トラック島に動員されていた慶尚南道地域の軍務員出身者を調査して作成したものである。この名簿には全部で 356 人の個人身上内訳が姓名、創氏、住所、年齢、徴用年月日、摘要の順に記載され、慶尚南道 348 人（戦死者 32 人含む）、慶尚北道 4 人が登載されている〔合計不一致〕。（兪命同の寄贈）



軍務員経歴証明書　第 4 海軍施設部

この文書は第 4 海軍施設部管轄トラック（チューク、Chuuk）島に土工として動員された金井永植の経歴証明書である。（兪命同の寄贈）





巣鴨刑務所全景

金昌禧（キム・チャンヒ）はインドネシアのジャワ島にあるジャワ捕虜収容所所属の軍務員として動員された。 後に捕虜となり東京都の巣鴨刑務所で服役した後、帰還した。写真の下段には「東京 すがも」と記載されている。（金ジョンレの寄贈）



行軍の際の団体写真・東莱温泉　1942.7.10

金昌禧が東莱温泉〔釜山郊外〕で行軍した当時、同僚たちと撮影した団体写真である。裏面には「昭和十七年七月十日　東莱温泉　行軍○デ　十一士兵戦友」と記載されている。金昌禧は二列目の右側から四番目にいる。（金ジョンレの寄贈）



仮出所証書　巣鴨刑務所 1956.1.6

金昌禧が 1956 年 1 月 6 日に巣鴨刑務所から仮釈放される時、受け取った仮出所証書である。証書の表面には、金昌禧が「平和条約第 11 条による刑の執行及び赦免に関する法律」に基づき、裏面記載事項の遵守を誓約することで、仮出所を証するという内容が記載されている。証書の裏面には仮出所期間中の遵守事項などが記載されている。（金ジョンレの寄贈）



戦没公報　1945.2.8

徐弘在（ソ・ホンジェ）はニューギニアに第 15 設営隊の軍務員として動員され死亡した。1945 年 2 月 8 日横須賀海軍人事部長が徐弘在の遺族に送った戦死通知文である。（徐ドンスの寄贈）



海軍軍属戦死ノ件報告　1945.2.8

海軍軍務員の徐弘在が 1943 年 1 月 22 日、ニューギニア方面で戦死したことを知らせる公文である。1945 年 2 月 8 日、横須賀海軍人事部長が徐弘在の本籍地である〔全羅北道高敞郡の〕古水面長に送った文書である。徐弘在はニューギニアにある第 15 設営隊所属の軍務員として動員され、ニューギニアのギルワでの戦闘で死亡した。（徐ドンスの寄贈）



俸給支払表　1944.6.19

尹周柄（ユン・ジュビョン）がビルマ方面軍第 49 師団衛生隊（狼 18711 部隊）に動員された時、部隊で受け取った俸給支払表である。支給月日、支給額、支給者（部隊名、階級）などの項目で構成されていて、尹周柄への支給額が具体的に記載されている。証票は損傷がひどく表紙と中身が分離している。（尹イクジュンの寄贈）



扇子

当時、南洋群島のポナペ（Ponape、現ミクロネシア共和国のポンペイ）地域で軍務員として動員された成世和（ソン・セファ）の扇子である。同僚の金チョルソンが成世和の扇子に坡州〔京畿道坡州郡〕から一緒に動員された同僚の名前を記載した。（成世和の寄贈）



捕虜バッジ

金鶴伊（キム・ハギ）が 1944 年 2 月 15 日、アメリカ軍によってハワイの捕虜収容所に収容された時、使用した捕虜バッジである。金鶴伊は芝浦補給部所属の軍務員としてクェゼリン（Kwajalein）に動員され、アメリカ軍の捕虜となった。ハワイの捕虜収容所に送られたが、解放後、帰還した。（金ソンボンの寄贈）

日章旗

印金寿は南方軍第 8 方面軍第 20 師団所属の軍人として動員されたが、動員される前に友人と知人たちから受け取ったものである。「祈武運長久　桐島正武君」と記載されている。印金寿は東部ニューギニアで死亡した。（印ギョンスルの寄贈）



旗

印金寿（イン・グムス）が軍人として動員される際に入営歓送式で使用したものである。印金寿は南方軍第 8 方面軍第 20 師団に動員され、1944 年 3 月 6 日、東部ニューギニアで死亡した。（印ギョンスルの寄贈）





写真帳「想ひ出」 1942.6.1

アルバムの表紙には「想ひ出」とあり、表紙内には「17.6.1 慶村忠盛」と手書きで記載されている。アルバムの中には当時、写真が貼られたとみられる痕跡が残っている。金漢秀（キム・ハンス）は南方軍第 8 方面軍第 20 師団歩兵 80 連隊に動員され、〔東部ニューギニア〕アゴで死亡した。〔慶村忠盛は金漢秀の創氏名〕（金フィギュンの寄贈）



朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所　昭和 15 年度前期修了記念アルバム

金漢秀（キム・ハンス）の朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所 1940 年前期修了記念アルバムで、裏面には昭和 15 年度前期生名簿などが収録されている。金漢秀は南方軍第 8 方面軍第 20 師団歩兵 80 連隊に動員され、〔東部ニューギニア〕アゴで死亡した。（金フィギュンの寄贈）



飯盒



水筒



ベルト



陸軍兵志願者訓練所
修了記念メダル

飯盒

丁仁植（チョン・インシク）が、マレーシア捕虜収容所所属の軍務員として動員された時、使用したものである。（丁サンチョルの寄贈）

水筒

丁仁植がマレーシア捕虜収容所所属の軍務員として動員された時、使用したものである。（丁サンチョルの寄贈）

ベルト

丁仁植がマレーシア捕虜収容所所属の軍務員として動員された時、使用したものである。（丁サンチョルの寄贈）

陸軍兵志願者訓練所修了記念メダル　1941

京城府陸軍兵志願者後援会が贈呈した陸軍兵志願者訓練所第 7 回修了記念メダルである。象徴マークと「訓」の字が掘られている。印金寿は南方軍第 8 方面軍第 20 師団に動員され、1944 年 3 月 6 日に東部ニューギニアで死亡した。（印ギョンスルの寄贈）



戦歿者の件通報　1947.5.10

1947 年 5 月 10 日、呉地方海員局人事部長が旧左面長に送った文書で、「戦歿者の件通報」である。第 8 蛭子丸に動員されていた金應寛（キム・ウングァン）が 1945 年 6 月 30 日、マニラ東方方面で死亡したと記載されている。〔旧左面は、現、済州市旧左邑〕（金ソクソンの寄贈）



椰子の実で作った容器

蘇秉哲（ソ・ビョンチョル）が南洋群島にある未詳の作業場に動員された時、使用していたものである。（朴グムナムの寄贈）



帝国在郷軍人会会員徽章と志願兵訓練所修了記念メダル

徽章（右）は李殷承（イ・ウンスン）が帝国在郷軍人会から受け取ったもので、裏面に「帝国在郷軍人会会員徽章」と刻まれている。修了記念メダル（左）は京城府陸軍兵志願者後援会より受け取ったもので、裏面に陸軍兵志願者訓練所第 6 回修了記念と刻まれている。李殷承は南方船舶軍水上勤務第 59 中隊の軍人として動員され、ニューギニアのアイタペ（Aitape）で行方不明となった。（李ムスンの寄贈）



父親から息子に送られた手紙

宋堯憲（ソン・ヨホン）は芝浦海軍補給部から南洋群島のクェゼリン（Kwajalein）島に第 4 施設部の軍務員として動員された。そこから息子の宋健太（ソン･コンテ）に送った手紙である。宋堯憲は 1944 年 2 月 6 日、クェゼリン島で死亡した。（宋健太の寄贈）

手紙の内容〔日本語の手紙を一部仮名遣いを直して採録〕

健太　御覧なさい
朝鮮は今は春でつつじの花やれんぎょうの花も咲く頃でしょうと思います。父ちゃんはね、お前の健康と勉強ばかりを祈って居るのだよ。父ちゃんは元気でやって居ります。お母さんによくつかえてね。お母さんの御言付をよく守り、留守中弟の世話をよくやるのだぞ。主日学校〔キリスト教会の日曜学校〕へもよく行くのかね。衡重、孝童、高島栄成、城山諸君もよく健康で勉強して居るかね。けんかしないでね。父さんはね、来年の春頃　帰る積りだ。学校の先生や校長先生にもよろしく申し上げておくれよ。父ちゃんはうんと働いて帰るから〔ま〕ってね。お前もうんと勉強してね。父ちゃんの帰る頃はもう農学校へちゃんと入学して居る様にね。頼むぞ。さようなら。
現地で　父より

地下足袋を履いた土工員たち

朴錡滿（パク・ギマン）は第 101 施設部所属の土工員としてシンガポールに動員され、軍服を作る仕事をしたという。朴錡滿は最後列の右側から三番目にいる。（朴インジャの寄贈）



南洋群島斡旋労働者

1930 年代、南洋群島への朝鮮人移住は積極的な広報によって募集された。それ以前に南洋興発など日本の会社に就職して定着した朝鮮人たちが〔利用され〕、朝鮮に来て言論で南洋群島を紹介し、平壌など主要都市では「南洋映画大会」を開催して広報することもあった。「南洋群島には勤め先が沢山あり、賃金も高く一日 2 円ももらえる」という内容だった。当時としては破格の条件であり、募集に応じる朝鮮人の数が増えて 1936 年には 500 人を超えるようになった。以後、日本が国際連盟を脱退し、南洋群島に道路などインフラを建設し始めると、1938 年 704 人、1939 年 1,968 人、1943 年 7,899 人と大きく増加した。特に 1939 年からの増加幅が大きいことをみると政策的に募集したものとみられる。

南洋庁の要請を受けた朝鮮総督府は、1939 年よりインフラを構築する労働者と農作業をする農民を選抜して送り出した。1941 年に太平洋戦争が起こった後には、軍人と軍務員も南洋群島に動員された。当時の『東亜日報』と『毎日申報』などの日刊紙を見ると、1939 年 1 月から募集記事が載せられている。土木建設労働者を募集する記事が先に載せられ、7 月以後からは農民を募集する記事が載せられた。彼らを総督府が斡旋したため、斡旋労働者と呼ばれた。南洋庁の依頼を受けた朝鮮総督府内務局は、旱魃や水害被害が大きな地域を事前に選定して募集した。その対象となったのは全羅道、慶尚南道、忠清道だった。

◉ 出典

鄭惠瓊、『朝鮮の青年よ 皇国臣民となれ』（韓国語）、西海文集、2010 年。

南洋群島の絵葉書

全英淇（チョン・ヨンギ）が軍務員に動員された時、持っていたハガキ 2 点であり、南太平洋のパラオ（Palau）の写真である。（全テユンの寄贈）







南洋群島ポナペ（Ponape）から送った写真

朴誨東（パク・フェドン）が家族に送った手紙と一緒に同封されていた写真である。裏面には1943年4月12日付「検閲　南洋庁ポナペ支庁」のスタンプが押されている。朴誨東は南洋群島ポナペ（現、ポンペイ、ミクロネシア共和国）にある未詳の作業場に労務者として動員された後、帰還した。（朴ノスクの寄贈）

南洋群島から送ったハガキ

兪応植（ユ・ウンシク）は南方に派遣され、猛第2086部隊気付朝2054部隊〔歩兵第79連隊〕に配置された。このハガキは友人の姜栄臣〔松岡栄臣〕に送ったものである。兪応植は南方軍第8方面軍所属〔歩兵第79連隊〕の軍人として動員され、東部ニューギニアで死亡した。（兪ビョンドンの寄贈）



付録

用語索引

寄贈者一覧

用語索引

アイタペ（Aitape） アイタペ（Aitape） 170
暁部隊 あかつきぶたい 87, 88
明延鉱山 あけのべこうざん 135
アゴ〔東部ニューギニア〕 アゴ 168
浅野 あさの 17
浅茅野 あさじの 17
旭硝子株式会社 あさひガラスかぶしきかいしゃ 81
旭鉱山 あさひこうざん 116
安蘇郡 あそぐん 41
尼崎工場 あまがさきこうじょう 80, 82
尼崎市 あまがさきし 81, 82
天草諸島 あまくさしょとう 100
鴨緑江 アムノッカン［おうりょくこう］ 122
安別炭鉱 あんべつたんこう 152

飯塚鉱業所 いいづかこうぎょうしょ 101, 103
伊王島鉱業所 いおうじまこうぎょうしょ 109
壱岐島 いきのしま 100
生野鉱業所 いくのこうぎょうしょ 79
石狩神威郵便局 いしかりかもいゆうびんきょく 31
石川島造船所 いしかわじまぞうせんじょ 44, 45
石原産業 いしはらさんぎょう 66
石原産業海運株式会社
いしはらさんぎょうかいうんかぶしきかいしゃ 154
泉大津市 いずみおおつし 73, 77
一時帰鮮証明書 いちじきせんしょうめいしょ 24, 99
イトムカ鉱山 イトムカこうざん 14
伊奈牛鉱業所 いなうしこうぎょうしょ 25
イルミナイト イルミナイト 110, 111
岩美鉱山 いわみこうざん 85
インドネシア インドネシア 160, 165

浮島丸 うきしまる 36
ウグレゴルスク〔旧、恵須取〕 ウグレゴルスク 153, 158
牛島〔済州市〕 ウとう 126, 127
梅香崎支会 うめがさきしかい 109
梅田組 うめだぐみ 45
雨竜鉱業所 うりゅうこうぎょうしょ 14
雨竜炭鉱 うりゅうたんこう 17

恵須取郡 えすとるぐん 152

王子製紙株式会社 おうじせいしかぶしきかいしゃ 152
応徴士 おうちょうし 27, 44, 56, 74, 88, 90, 95, 96, 101
応徴士服務規律 おうちょうしふくむきりつ 44
青梅支部 おうめしぶ 45
大分県協和会 おおいたけんきょうわかい 116
大隈鉄工所 おおくまてっこうしょ 60
大阪海兵団 おおさかかいへいだん 75, 77, 85
大阪工場 おおさかこうじょう 75, 76, 77
大嶽鉱業所 おおたけこうぎょうしょ 59
大津海軍航空隊 おおつかいぐんこうくうたい 68
大津工場 おおつこうじょう 77
大辻炭鉱 おおつじたんこう 101
大泊郡 おおとまりぐん 152
大之浦炭鉱 おおのうらたんこう 102, 103, 104
大原組 おおはらぐみ 154
大間鉄道工事 おおまてつどうこうじ 36
大湊港 おおみなとこう 36
大牟田工場 おおむたこうじょう 103
大夕張鉱業所 おおゆうばりこうぎょうしょ 21, 25, 26

沖縄特設水上勤務
おきなわとくせつすいじょうきんむ 119
小郡駅 おごおりえき 111
落合町 おちあいまち 155
沃溝郡 オックぐん 150
乙種会員手帳 おつしゅかいいんてちょう 45
乙種幹部候補生 おつしゅかんぶこうほせい 42
小野田 おのだ 91
お守り おまもり 51
厳政面 オムジョンめん 87

海軍工廠 かいぐんこうしょう 54
海軍徴用工員規則 かいぐんちょうようこういんきそく 160
海軍飛行場 かいぐんひこうじょう 118
海軍予備補習生 かいぐんよびほしゅうせい 149
貝島炭鉱株式会社
かいじまたんこうかぶしきかいしゃ 101, 102, 103, 104
海南島 かいなんとう〔ハイナンとう〕138, 140, 149
閣議決定 かくぎけってい 52
学徒志願兵 がくとしがんへい 138
掛川市 かけがわし 54
笠之原 かさのはら 118
火葬認許証 かそうにんきょしょう 88
加津佐 かづさ 113
河南省 かなんしょう 141, 147
鐘淵紡績株式会社
かねがふちぼうせきかぶしきかいしゃ 152
鹿屋 かのや 117, 118
樺山飛行場 かばやまひこうじょう 36
嘉穂炭鉱 かほたんこう 100
釜石製鉄所 かまいしせいてつしょ 36
神岡鉱山（鉱業所）
かみおかこうざん（こうぎょうしょ）54, 58
上塔路炭鉱 かみとうろたんこう 152
上山田炭鉱 かみやまだたんこう 100
神威炭鉱 かもいたんこう 28, 29, 30, 32
神威郵便局 かもいゆうびんきょく 31
樺太 からふと 152, 158
樺太協和会 からふときょうわかい 154
樺太鉱業株式会社
からふとこうぎょうかぶしきかいしゃ 152, 153,
樺太人造石油株式会社
からふとせきじんぞうせきゆかぶしきかいしゃ 152, 156, 157
樺太石炭鉱業株式会社
からふとせきたんこうぎょうかぶしきかいしゃ 152
樺太抑留帰還韓国人会
からふとよくりゅうきかんかんこくじんかい 157
樺太抑留帰還者同盟
からふとよくりゅうきかんしゃどうめい 156
カロリン諸島 カロリンしょとう 160
川上炭鉱 かわかみたんこう 152
川崎航空機工業株式会社
かわさきこうくうきかぶしきかいしゃ 58
川崎重工業株式会社
わさきじゅうこうぎょうかぶしきかいしゃ 83
川崎造船所 かわさきぞうせんじょ 81
川南工業株式会社
かわなみこうぎょうかぶしきかいしゃ 113, 114
川南造船所 かわなみぞうせんじょ 108
艦船工場 かんせんこうじょう 83
韓ソの国交樹立
かんそのこっこうじゅりつ 152, 158
カンテラ カンテラ 85
関東機械製作所株式会社
かんとうきかいせいさくしょかぶしきかいしゃ 125
関東大地震 かんとうだいしんさい 38

紀州鉱山 きしゅうこうざん 66, 116
北小沢炭鉱 きたこざわたんこう 152
岐阜工場 ぎふこうじょう 58
脚絆 きゃはん、ゲートル 106, 127, 145

キャップ キャップ 105
旧帝国陸軍編制便覧
きゅうていこくりくぐんへんせいべんらん 55, 106
極東軍 きょくとうぐん 150
極東精密工作所 きょくとうせいみつこうさくしょ 73
慶尚南道労務指導員訓練所
キョンサンナムト（けいしょうなんどう）ろうむしどういんくんれんじょ 89
京城 キョンソン（けいじょう）138, 169, 170
京城工場 キョンソン（けいじょう）こうじょう 125
京城師管区 キョンソン（けいじょう）しかんく 125
京城部隊 キョンソン（けいじょう）ぶたい 88
京城連隊司令部
キョンソン（けいじょう）れんたいしれいぶ 140
ギルバート諸島 ギルバートしょとう 160
勤労報国隊 きんろうほうこくたい 115, 132, 133, 135

光州陸軍兵事部
クァンジュ（こうしゅう）りくぐんへいじぶ 126
光化門 クァンファムン（こうかもん）161
光陽 クァンヤン（こうよう）132, 135
光陽産業戦士隊
クァンヤン（こうよう）さんぎょうせんしたい 135
クェゼリン（Kwajalein）167, 171
釧路市 くしろし 16, 155
釧路協和会 くしろしきょうわかい 15
葛生町 くずうまち 41
熊本県協和会 くまもとけんきょうわかい 115
熊本電熱工業所 くまもとでんねつこうぎょうしょ 115
錦山郡 クムサンぐん（きんざんぐん）78
倉敷絹織（株）くらしきけんしょくかぶしきかいしゃ 98
倉敷航空化工（株）
くらしきこうくうかこうかぶしきかいしゃ 98
クラスノヤルスク収容所
クラスノヤルスクしゅうようじょ 151
呉 くれ 84, 89, 170

開寺里〔現、群山市〕〕ゲサリ 150
健康手帳 けんこうてちょう 95
原子爆弾 げんしばくだん 84, 94, 95
健民修錬所 けんみんしゅうれんじょ 113

工員 こういん 24, 89, 117, 162, 163
皇居 こうぐう［皇宮］/ こうきょ［皇居］110
工作兵 こうさくへい 149
厚生省 こうせいしょう 138, 160
厚生年金保険 こうせいねんきんほけん 58
甲奴郡 こうぬぐん 88
工兵 こうへい 146
香焼島造船所 こうやぎしまぞうせんじょ 110, 113
甲陽園・甲山 こうようえん・かぶとやま 66
国際連合 こくさいれんごう 150
国民徴用令 こくみんちょうようれい 44
国民労務手帳 こくみんろうむてちょう 58
五島列島 ごとうれっとう 100
寿重工業株式会社
ことぶきじゅうこうぎょうかぶしきかいしゃ 53, 73, 77
湖南省 こなんしょう 148
鴻之舞鉱山 こうのまいこうざん 14
鴻之舞鉱山鉱業所
こうのまいこうざんこうぎょうしょ 45

サイパン サイパン 160
佐賀関製錬所 さがのせきせいれんじょ 100
佐世保海軍建築部 させぼかいぐんけんちくぶ 117
佐世保海軍施設部 させぼかいぐんしせつぶ 114
佐世保鎮守府 させぼちんじゅふ 149
薩南諸島 さつなんしょとう 100
札幌市 さっぽろし 20
三山里 サムサンり 129
山陰航空隊 さんいんこうくうたい 85

産業戦士 さんぎょうせんし 18
産業戦士訓練所 さんぎょうせんしくんれんじょ 74
尚州公立農蚕学校
サンジュこうりつのうさんがっこう 144

塩尻工場 しおじりこうじょう 56
地下足袋 じかたび 22, 101, 105
敷香郡 しすかぐん 152
輜重兵 しちょうへい 148
芝浦 しばうら 43, 171
始興郡 シフンぐん 87, 133
嗣平市〔ママ、四平市〕しへいし 146
シベリア シベリア 150
清水市 しみずし 54
下北半島 しもきたはんとう 36
下関 しものせき 34, 84, 90, 92, 143
尺別炭鉱 しゃくべつたんこう 18
ジャルート ジャルート 160
ジャワ ジャワ 165
ジャワ捕虜収容所 ジャワほりょしゅうようじょ 165
中外鉱業株式会社
ちゅうがいこうぎょうかぶしきかいしゃ 59
定光寺 じょうこうじ 155
常磐炭田 じょうばんたんでん 36
昭和鉱業（株）しょうわこうぎょうかぶしきかいしゃ 98
昭和炭砿 しょうわたんこう 17, 18
昭和電極株式会社
しょうわでんきょくかぶしきかいしゃ 83
昭和電工株式会社
しょうわでんこうかぶしきかいしゃ 56
女子挺身勤労令 じょしていしんきんろうれい 62
白浦炭鉱 しらうらたんこう 152
知取炭鉱 しりとるたんこう 152
新下川鉱山 しんしもかわこうざん 27
人造航空燃料会社
じんぞうこうくうねんりょうかいしゃ 127, 128

伸銅所 しんどうしょ 72
新日本製鉄 しんにほんせいてつ 36, 66, 122
新美唄炭鉱 しんびばいたんこう 19
新幌内鉱業所 しんほろないこうぎょうしょ 27

秀巌面 スアムめん 133
水原 スウォン 105
巣鴨刑務所 すがもけいむしょ 165
菅原組 すがわらぐみ 155
砂川鉱業所 すながわこうぎょうしょ 25
住友金属工業 すみともきんぞくこうぎょう 72
住友鉱業（株）
すみともこうぎょうかぶしきかいしゃ 14, 45, 98
住友石炭鉱業株式会社 すみともせきたんこうぎょう
かぶしきかいしゃ 14, 25
淳昌郡 スンチャンぐん 78

青年特別錬成所 せいねんとくべつれんせいしょ 140
瀬戸内海 せとないかい 84
仙崎港 せんざきこう 41
戦時災害 せんじさいがい 97
戦死通知文 せんしつうちぶん 166
戦車第1師団司令部 せんしゃだい1しだんしれいぶ 41
千人針 せんにんばり 131

象山地下壕 ぞうざんちかごう 54
総動員 そうどういん 125
宗谷海峡 そうやかいきょう 158
ソ満国境 ソマンこっきょう 150
空知鉱業所 そらちこうぎょうしょ 20, 28, 29, 32
ソ連 それん 150, 158

第 1 農耕勤務隊 だい 1 のうこうきんむたい 52, 59
第 2 農耕勤務隊 だい 2 のうこうきんむたい 53
第 3 軍務予備訓練所
だい 3 ぐんむよびくんれんじょ 87
第 3 農耕勤務隊 だい 3 のうこうきんむたい 53, 73
第 4 農耕勤務隊 だい 4 のうこうきんむたい 53
大栄炭鉱 たいえいたんこう 152
大同製鋼 だいどうせいこう 74
大日本産業報国会
だいにほんさんぎょうほうこくかい 107
大日本婦人会 だいにほんふじんかい 163
大平炭鉱 たいへいたんこう 152, 158
台湾 たいわん 138
台湾航空隊 たいわんこうくうたい 149
高島鉱業所 たかしまこうぎょうしょ 109, 112
タコ部屋（蛸部屋） たこべや 14
立山炭鉱 たてやまたんこう 100
田中小隊 たなかしょうたい 70
玉野造船所 たまのぞうせんじょ 86
玉藻組 たまもぐみ 97
唐津郡〔忠清南道〕タンジンぐん 37
丹野組 たんのぐみ 17

済州島 チェジュとう〔さいしゅうとう〕17, 126, 127
千島列島、クリル列島
ちしまれっとう、クリルれっとう 150, 155
知人名簿 ちじんめいぼ 52
鎮海 チネ〔ちんかい〕48
鎮海邑 チネゆう 68
鎮海海軍航空廠
チネ〔ちんかい〕かいぐんこうくうたい 61
鎮海海軍工作部工員養成所長
チネ〔ちんかい〕かいぐんこうさくぶこういんようせいしょちょう 143
鎮海海軍志願兵訓練所
チネ〔ちんかい〕かいぐんしがんへいくんれんじょ 140
鎮海海兵団
チネ〔ちんかい〕かいへいだん 68, 118, 130, 131
鎮海警備部 チネ〔ちんかい〕けいびぶ 77
昌原郡 チャンウォンぐん 68
中央線 ちゅうおうせん 132
チューク（トラック） チューク（トラック）160, 164
忠州郡 チュンジュぐん 87, 157
長生炭鉱 ちょうせいたんこう 84
朝鮮 47 部隊 ちょうせん 47 ぶたい 134
朝鮮軍人自営隊 ちょうせんぐんじんじえいたい 149
朝鮮女子勤労挺身隊
ちょうせんじょしきんろうていしんたい 62
朝鮮人の捕虜監視員 ちょうせんじんのほりょかんしいん 160
朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所
ちょうせんそうとくふりくぐんへいしがんしゃくんれんじょ 90, 93, 129, 134, 139, 142, 148, 161, 163, 168
朝鮮農業報国青年隊
ちょうせんのうぎょうほうこくせいねんたい 67
朝鮮有煙炭株式会社
ちょうせんゆうえんたんかぶしきかいしゃ 130
清州 チョンジュ 77
清州駅 チョンジュえき 76
清州警察署 チョンジュけいさつしょ 75
清州神社 チョンジュじんじゃ 76
清州陸軍兵事部長 チョンジュりくぐんへいじぶちょう 148
定州〔平安北道〕チョンジュ 135
清津〔咸鏡北道〕チョンジン 36
清道郡 チョンドぐん 34
全北隊 チョンブクたい 78
珍内炭鉱 ちんないたんこう 153

対馬島 つしまじま 100
土屋部隊 つちやぶたい 87

鶴見製鉄所 つるみせいてつしょ 49

帝国在郷軍人会 ていこくざいごうぐんじんかい 170
帝国砂白金 ていこくさはっきん 14
大邱 テグ 130
大邱師管区 テグしかんく 41
大田 テジョン 64

東亜日報 とうあにっぽう 172
東海護謨工業会社
　とうかいゴムこうぎょうかいしゃ 67
東京麻糸 とうきょうあさいと 62
東京製鉄株式会社
　とうきょうせいてつかぶしきかいしゃ 43
東京大空襲 とうきょうだいくうしゅう 38
東京労務報国会 とうきょうろうむほうこくかい 45
東洋高圧工業株式会社
　とうようこうあつこうぎょうかぶしきかいしゃ 90
東洋工業 とうようこうぎょう 84
東洋コルク工業 とうようコルクこうぎょう 84
塔路炭鉱 とうろたんこう 152
特設陸上勤務隊 とくせつりくじょうきんむたい 55
DOWA ホールディングス どうわホールディングス 36
土工 どこう 45, 71, 154
栃木市 とちぎし 41
轟鉱山 とどろきこうざん 107
泊居郡 とまりおるぐん 152
泊岸炭鉱 とまりけしたんこう 152
豊栄郡 とよさかえぐん 152
豊畑炭鉱株式会社
　とよはたたんこうかぶしきかいしゃ 152, 158
豊原支会 とよはらしかい 154
トラック島朝鮮民団本部
　トラックとうちょうせんみんだんほんぶ 164
東大門 トンデムン 148

内川炭鉱 ないかわたんこう 152
内淵炭鉱 ないぶちたんこう 152, 155, 156
内幌炭砿 ないほろたんこう 152
那珂郡 なかぐん 39
名賀郡 ながぐん 112
長崎県協和会 ながさきけんきょうわかい 109
長崎鉱業（株）
　ながさきこうぎょうかぶしきかいしゃ 109
長崎鉱業所 ながさきこうぎょうしょ 44
中島 なかじま 38
中村警察署 なかむらけいさつしょ 99
中山製鋼所 なかやませいこうしょ 80, 82
名古屋 なごや 54
名古屋航空機製作所
　なごやこうくうきせいさくしょ 60, 62, 64, 65, 67
名古屋の神社 なごや［の］じんじゃ 60
夏瀬 なつせ 37
七ツ館坑 ななつだてこう 36
名張鉱山 なばりこうざん 110, 111, 112
鯰田炭鉱 なまずたたんこう 101, 103
名好郡 なよしぐん 152
名寄市 なよろし 27
奈良市 ならし 74
鳴尾工場 なるおこうじょう 83
南方 なんぽう 160, 170
南方軍 なんぽうぐん 167, 168, 169
南方トラック島被徴用者名簿
　なんぽうトラックとうひちょうようしゃめいぼ 164
南洋群島
　なんようぐんとう 100, 160, 167, 170, 171, 172, 173
南洋群島斡旋労働者
　なんようぐんとうあっせんろうどうしゃ 172
南洋興発 なんようこうはつ 172
南洋庁 なんようちょう 172, 173

西柵丹炭鉱 にしさくたんたんこう 152, 158
西彼杵郡 にしそのぎぐん 113
西内淵炭鉱 にしないぶちたんこう 157
西宮市 にしのみやし 66, 83
二重橋 にじゅうばし 110
日韓請求権 にっかんせいきゅうけん 122
日産化学工業株式会社
　にっさんかがくこうぎょうかぶしきかいしゃ 102
日ソ共同宣言 にっそきょうどうせんげん 157
日中戦争 にっちゅうせんそう 138
日鉄鉱業株式会社
　にってつこうぎょうかぶしきかいしゃ 152
日本軍の大本営 にほんぐんのだいほんえい 54
日本鋼管株式会社
　にほんこうかんかぶしきかいしゃ 38,49
日本鉱業株式会社
　にほんこうぎょうかぶしきかいしゃ 39, 40, 100
日本製鋼所 にほんせいこうじょ 14
日本製鉄 にほんせいてつ 36, 66, 75, 77, 78, 100
日本赤十字社
　にほんせきじゅうじしゃ 25, 163
日本窒素株式会社
　にほんちっそかぶしきかいしゃ 127, 128
日本通運 にほんつううん 14
日本の商工省 にほんのしょうこうしょう 82
ニューギニア
　ニューギニア〔New Guinea〕160, 161, 166, 169, 170, 173
「入市」被爆「にゅうし」ひばく 94

沼津工場 ぬまづこうじょう 62

農耕勤務隊 のうこうきんむたい 36, 52

ノビコボ〔旧、弥満〕ノビコボ〔Novikovo〕154
野村鉱業株式会社 のむらこうぎょうかぶしきかいしゃ 14
論山 ノンサン 27

配置転換 はいちてんかん 67, 116
萩野工場 はぎのこうじょう 60
朴魯学の受信手紙 パク・ノハクのじゅしんてがみ 156
白鳥沢炭鉱 はくちょうさわたんこう 152, 153
白鳥沢炭鉱（鉱業所） はくちょうさわたんこう（こうぎょうしょ）154
函館警察署 はこだてけいさつしょ 24
函館船渠 はこだてせんきょ 14, 24
間組 はざまぐみ 37, 51
坡州 パジュ 167
花岡鉱業所 はなおかこうぎょうしょ 36, 37, 45
パナソニック パナソニック 66
ハバロフスク捕虜収容所
　ハバロフスクほりょしゅうようじょ 151
パラオ パラオ 160
パラオ第 123 兵站病院
　パラオだい 123 へいたんびょういん 162
原野谷 はらのや 54
ハワイの捕虜収容所
　ハワイのほりょしゅうようじょ 119, 167
半島応徴工員 はんとうおうちょうこういん 67
半島応徴士安保愛国寮大隊長
　はんとうおうちょうしあぼあいこくりょうだいたいちょう 114
半島工員 はんとうこういん 114
飯場 はんば 117

ピーヤ（排気排水筒）ピーヤ（はいきはいすいとう）84
彦島工業所 ひこしまこうぎょうしょ 90
美田鉱業所 みたこうぎょうしょ 154
日立 ひたち 39, 40

日立造船（株）ひたちぞうせんかぶしきかいしゃ 66
被徴用死亡者連名簿
ひちょうようしぼうしゃれんめいぼ 138
被保険者台帳 ひほけんしゃだいちょう 58
平壌 ピョンヤン 90, 132, 138
平壌神社 ピョンヤンじんじゃ 93
広島機械製作所 ひろしまきかいせいさくしょ 95, 96
広島護国神社 ひろしまごこくじんじゃ 88
広島製砥所 ひろしませいとしょ 97
広島造船所 ひろしまぞうせんじょ 88
弘山病院 ひろやまびょういん 17

華道面〔江華島〕ファドめん 135
ブイコフ〔旧、内淵〕ブイコフ 156
フィリピン フィリピン 160
会寧郡〔咸鏡北道〕フェリョンぐん 129
福岡県協和会 ふくおかけんきょうわかい 107
釜山 プサン 28, 84
釜山港 プサンこう 41
釜山陸軍兵事部 プサンりくぐんへいじぶ 131
不二越富山工場
ふじこしとやまこうじょう 54, 62, 63, 64
藤田組 ふじたぐみ 36
藤永田造船所 ふじながたぞうせんじょ 78
赴戦江 プジョンガン〔ふせんこう〕122
ふんどし ふんどし 145
興南工場 フンナムこうじょう 127, 128
興南府〔咸鏡南道〕フンナムふ 127, 128

平和条約 へいわじょうやく 165
別子鉱山 べっしこうざん 98

砲工通信補充隊 ほうこうつうしんほじゅうたい 125
奉公袋 ほうこうぶくろ 52
豊国炭鉱 ほうこくたんこう 105, 107
宝珠山炭鉱 ほうしゅやまたんこう 106
北海道炭礦汽船株式会社（株）
ほっかいどうたんこうきせんかぶしきかいしゃ 16, 22, 27, 28, 29, 30, 32
ポナペ（ポンペイ）ポナペ（ポンペイ）160, 167, 173
普門学院 ボムンがくいん 64
洪城 ホンソン 28
本斗郡 ほんとぐん 152

マーシャル諸島 マーシャルしょとう 160
舞鶴〔海軍〕施設部 まいづる〔かいぐん〕しせつぶ 71
毎日申報 まいにちしんぽう 172
真岡郡 まおかぐん 152
松下電器産業（株）
まつしたでんきさんぎょうかぶしきかいしゃ 66
マツダ マツダ 84
マニラ マニラ〔Manila〕170
マラリア マラリア 141
マリアナ諸島 マリアナしょとう 160
丸山ダム まるやまダム 54
マレーシア捕虜収容所
マレーシアほりょしゅうようしょ 169
満洲 まんしゅう 138, 140, 141, 145, 146, 147, 148, 150, 151
満州哈爾浜市 まんしゅうハルビンし 143
満鮮拓殖株式会社
まんせんたくしょくかぶしきがいしゃ 138
満蒙開拓青少年義勇軍訓練所 まんもうかいたくせいしょうねんぎゆうぐんくんれんじょ 143
満蒙開拓青年義勇隊
まんもうかいたくせいねんぎゆうたい 143

三池炭鉱 みいけたんこう 105, 107
三沢飛行場 みさわひこうじょう 36
三井鉱山株式会社
みついこうざんかぶしきかいしゃ 14, 58, 100, 106, 107
三井染料 みついせんりょう 103
三井造船 みついぞうせん 86
三菱鉱業株式会社
みつびしこうぎょうかぶしきかいしゃ 14, 21, 27, 79, 100, 107, 108, 109, 112, 135
三菱重工業
みつびしじゅうこうぎょう 60, 61, 88, 95, 96, 104, 122
南樺太炭礦鉄道株式会社
みなみからふとたんこうてつどうかぶしきかいしゃ 152
美濃波多村 みのはたむら 112
米面 ミめん 150
ミャンマー ミャンマー 160, 163
ミリ（Mili）島 ミリ(Mili)とう 163

無心川広場 ムシムチョンひろば 77
室蘭 むろらん 36
室蘭製作所 むろらんせいさくしょ 14

明治鉱業株式会社
めいじこうぎょうかぶしきかいしゃ 16, 100, 105, 107

牧渓洞 モッケどう 87
木浦神社 モッポじんじゃ 126
元泊郡 もとどまりぐん 152

ヤップ ヤップ 160
八幡製鉄所 やはたせいてつしょ 100
山岡内燃機青年学校
やまおかないねんきせいねんがっこう 80
山田炭鉱 やまだたんこう 102
楊東面 ヤンドンめん 129
楊平郡 ヤンピョンぐん 129

夕張炭鉱 ゆうばりたんこう 24, 27

横須賀海軍病院 よこすかかいぐんびょういん 47
横須賀海軍警備隊
よこすかかいぐんけいびたい 50
横須賀港 よこすかこう 50
横須賀 よこすか 48, 51, 140, 149
横須賀〔海軍〕施設部
よこすか〔かいぐん〕しせつぶ 50, 162
横浜港 よこはまこう 38
麗水 ヨス 84

羅南師管区 らなんしかんく 148

陸軍特別志願兵令 りくぐんとくべつしがんへいれい 142
罹災証明書 りさいしょうめいしょ 97
領家村 りょうけむら 88

レソゴルスク レソゴルスク 158
錬成会 れんせいかい 15

労働証明書 ろうどうしょうめいしょ 151
労務隊 ろうむたい 17

若松造船所 わかまつぞうせんじょ 104
渡川改修工事場 わたりがわかいしゅうこうじば 99
輪西製鉄所 わにしせいてつしょ 14

寄贈者一覧

＊寄贈者と強制動員の被害者（元の所有者）は異なる場合がある。
＊寄贈者は韓国語の子音・母音の順。



姜グァンナム　（87）
広島県
第３軍務予備訓練所 団体写真
写真



姜グァンナム　（88）
広島県
俸給支払証票
文書



姜ソンギュ　（155）
サハリン
石炭運搬装置の前の労務者たち
写真



姜ジュング　（145）
中国
襷（たすき）
博物



高ユンホ　（26）
北海道
弁当箱
博物



郭相紘　（58）
岐阜県
割増金通知書
文書



姜グァンナム　（87）
広島県
暁第 6167 部隊土屋部隊下坂隊 団体写真
写真



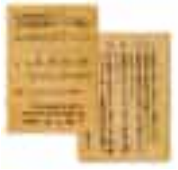
姜ソクボン　（89）
広島県
呉施設部軍属一行の神社参拝
写真



姜聲鉀　（23）
北海道
北海道苦楽歌
文書



姜ジュング　（145）
中国
ふんどしと手袋
博物



郭相紘　（58）
岐阜県
身分証明書　NO.17965
文書



郭相紘　（58）
岐阜県
厚生年金保険被保険者証
文書



権明奎 （151）

シベリア抑留朝鮮人捕虜
労働証明メダル
博物



権五淑 （149）

中国
入営者歓送記念家族写真
写真



権ジングク （155）

サハリン
遺骨保管関連手紙
文書

権ヒョンスク （16）

北海道
給与封筒
写真



金瑋甲 （131）

朝鮮半島
現役兵証書
文書



金グァンスク （57）

岐阜県
岐阜県中部第 4 部隊に動員された軍人たち
写真



金グァンスク （57）

岐阜県
岐阜県中部第 4 部隊に動員された軍人たち
写真



金グァンスク （57）

岐阜県
岐阜県中部第 4 部隊動員同僚団体写真
写真



金奇男 （125）

朝鮮半島
軍鳩通信緑
文書



金基祥 （126）

朝鮮半島
徴兵検査記念写真
写真



金基祥 （126）

朝鮮半島
第一補充兵証書
文書



金基祥 （126）

朝鮮半島
旗
博物



金基祥 （127）

朝鮮半島
脚絆
博物



金基祥 （127）

朝鮮半島
襟章
博物



金基祥 （127）
朝鮮半島
御守袋
博物



金紀浩 （68）
滋賀県
大津海軍航空隊 個人写真
写真



金大卿 （81）
兵庫県
旭硝子株式会社労務者団体写真
写真



金ドクジン （40）
茨城県
家族に送った手紙
文書



金敏経 （95）
広島・長崎における朝鮮人原爆被害
三菱広島機械製作所労務者団体写真
写真



金ボファン （59）
静岡県
大嶽鉱業所労務者団体写真
写真



金ソクソン （170）
東南アジア・南太平洋地域
戦歿者の件通報
文書



金紀浩 （68）
滋賀県
鎮海海兵団教育修了記念団体写真
写真



金ナムヒョン （105）
福岡県
採炭夫勤務証印簿
文書



金ドクジン （39）
茨城県
産業戦士協和褒賞記念団体写真
写真



金瀧卿 （101）
福岡県
大辻炭鉱労務者団体写真
写真



金敏経 （95）
広島・長崎における朝鮮人原爆被害
三菱広島機械製作所 同僚
写真



金奉燮 （150）
シベリア抑留朝鮮人捕虜
シベリア抑留朝鮮人捕虜のハガキ
文書



金ソンボン （167）
東南アジア・南太平洋地域
捕虜バッチ
博物



金英昊 （143）
中国
卒業証書
文書



金英昊 （149）
中国
採用証書
文書



金ヨンボク （129）
朝鮮半島
朝鮮総督府陸軍志願者訓練所の旗
写真



金ヨンボク （130）
朝鮮半島
大邱第 24 部隊訓練終了後記念写真
写真



金容宇 （118）
鹿児島県
鹿児島県海軍飛行場軍属団体写真
写真



金容宇 （118）
鹿児島県
鹿児島県海軍飛行場軍属団体写真（第 3 中隊）
写真



金ヨンヘ （85）
鳥取県
カンテラ
博物



金インス （163）
東南アジア・南太平洋地域
1942 年度後期第 14 区隊訓練生写真
写真



金在連 （99）
高知県
84 連隊第 2 大隊所属軍人団体写真
写真



金在連 （99）
高知県
84 連隊第 2 大隊所属軍人団体写真
写真



金ジョンド （89）
広島県
慶尚南道労務指導員訓練所修了証書
文書



金ジョンレ （165）
東南アジア・南太平洋地域
巣鴨刑務所全景
写真



金ジョンレ （165）
東南アジア・南太平洋地域
巣鴨刑務所全景
写真



金ジョンレ （165）
東南アジア・南太平洋地域
行軍の際の団体写真・東莱温泉
写真



金ジョンレ （165）
東南アジア・南太平洋地域
仮出所証書
文書



金正允 （73）
大阪府
大阪府極東精密工作所団体写真
写真



金鍾根 （90）
山口県
朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練
所入所者歓送写真
写真



金鍾根 （93）
山口県
朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練
所入所式
写真



金鍾根 （93）
山口県
朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練
所入所式　訓示
写真



金鍾根 （93）
山口県
朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練
所入所式 平壌神社
写真



金鍾悳 （141）
中国
個人手帳
文書



金鍾培 （61）
愛知県
瀬戸勤労報国隊三菱美唄礦業
所 誠心寮隣保班精勤競争優勝
記念写真
写真



金鍾郁 （101）
福岡県
三菱飯塚鉱業所鯰田炭鉱労務者
団体写真
写真



金ジョンイル （106）
福岡県
三井田川炭鉱労務者団体写真
写真



金チャンソン （154）
サハリン
協和会会員章
文書



金チュンジャ （162）
東南アジア・南太平洋地域
葬式行列
写真



金チュンジャ （162）
東南アジア・南太平洋地域
葬式祭壇全景
写真



金泰淳 （27）
北海道
新下川鉱山に動員された幼い
労務者
写真



金テジョン　（124）
朝鮮半島
入営歓送家族写真
写真



金テジョン　（124）
朝鮮半島
京畿道第９青訓別科合同訓練所団体写真
写真



金テジョン　（124）
朝鮮半島
入営者団体写真
写真



金ハンギョン　（154）
サハリン
サハリン美田鉱業所へ動員された労務者たち写真



金翰中　（103）
福岡県
三井染料大牟田工場労務者団体写真
写真



金杭魯　（104）
福岡県
三菱若松造船所勤労出動隊記念写真
写真



金ヘスク　（42）
千葉県
第３区隊卒業団体写真
写真



金ヘスク　（42）
千葉県
入隊当時に撮影した団体写真
写真



金フィギュン　（168）
東南アジア・南太平洋地域
写真帳「想ひ出」
博物



金フィギュン　（168）
東南アジア・南太平洋地域
朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所昭和 15 年度前期修了アルバム
文書



金喜庚　（62）
朝鮮女子勤労挺身隊
勤労挺身隊労務者団体写真
写真



金喜庚　（63）
朝鮮女子勤労挺身隊
不二越株式会社寮団体写真
写真



金熙昇　（141）
中国
乗船切符
文書



金熙俊　（78）
大阪府
日本製鉄大阪製鉄所第３期生団体写真
写真



南相烈 （113）

長崎県
証明書
文書



文春基 （117）

鹿児島県
鹿児島県（作業場不詳）団体写真
写真



閔丙鎭 （142）

中国
身分証明書
文書



朴均絃 （39）

茨城県
感謝状
文書



朴ノスク （173）

南洋群島斡旋労働者
南洋群島ポナペ（Ponape）から送った写真
写真



朴來絃 （49）

神奈川県
日本鋼管鶴見製鉄所労務者、神社の前での団体写真
写真



朴ミニョン （96）

広島・長崎における朝鮮人原爆被害
三菱工作機械広島製作所労務者団体写真
写真



柳章錫 （88）

広島県
京城部隊 102 次応徴士一同
団体写真
写真



閔丙鎭 （141）

中国
罹患証明書
文書



朴京鎬 （81）

兵庫県
漆谷郡守の激励に対する応徴士代表答辞
文書



朴グムナム （170）

東南アジア・南太平洋地域
椰子の実で作った容器
博物



朴來絃 （49）

神奈川県
日本鋼管鶴見製鉄所労務者団体写真
写真
写真



朴ミニョン （96）

広島・長崎における朝鮮人原爆被害
三菱工作機械広島製作所動員者家族写真
写真



朴ミンジャ （95）

広島・長崎における朝鮮人原爆被害
応徴士徽章着用 個人写真 三菱工作機械広島製作所
写真



朴ボクドク　（110）
長崎県
名張鉱山転出記念撮影
写真



朴ボクドク　（110）
長崎県
川南工業香焼島造船所労務者団体写真
写真



朴ボクドク　（110）
長崎県
公務旅行証明書
文書



朴ボクドク　（111）
長崎県
名張鉱山派遣工員出勤簿
文書

朴ボクドク　（111）
長崎県
イルミナイト鉱山行き工員名簿
文書



朴ボクドク　（112）
長崎県
出張命令書
文書



朴ボクドク　（112）
長崎県
転出証明書
文書



朴ボクドク　（114）
長崎県
手紙
文書



朴サンガプ　（135）
朝鮮半島
江華島華道面勤労報国隊員団体写真
写真



朴サング　（102）
福岡県
福岡県炭鉱（場所不詳）労務者団体写真
写真



朴ソンヨル　（135）
朝鮮半島
光陽産業戦士隊団体写真
写真



朴ソンヨン　（44）
東京都
応徴士徽章
博物



朴順徳　（64）
朝鮮女子勤労挺身隊
名古屋航空機製作所労務者団体写真
写真



朴彦夏　（53）
農耕勤務隊
第 4 農耕勤務隊動員者家族写真・愛知
写真



朴元萬 （17）

北海道
新美唄炭砿済州島労務隊１周年記念写真
写真



朴ウィチュン （161）

東南アジア・南太平洋地域
朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所の全景
写真



朴定毅 （151）

シベリアに抑留された朝鮮人捕虜
労働証明書
文書



朴鍾成 （24）

北海道
諸給与其他明細表・夕張炭鉱
文書



朴柱栄 （77）

大阪府
壽勤労隊第２期生 団体写真
写真



朴ハグォン （108）

佐賀県
川南造船所第５番船舶製造の様子
写真



朴海玉 （64）

朝鮮女子勤労挺身隊
名古屋航空機製作所寮の前での団体写真
写真



朴ウィチュン （161）

東南アジア・南太平洋地域
光化門街行軍の様子
写真



朴インジャ （171）

東南アジア・南太平洋地域
地下足袋を履いた土工員たち
写真



朴定毅 （151）

シベリアに抑留された朝鮮人捕虜
労働証明メダル
博物



朴鍾成 （27）

北海道
従業員証・夕張炭鉱
文書



朴チャンギュ （156）

サハリン
受信手紙
文書

朴ハグォン （108）

佐賀県
川南造船所第６番船舶製造の様子
写真

朴海玉 （64）

朝鮮女子勤労挺身隊
名古屋航空機製作所労務者団体写真
写真



朴ヘジン （20）

北海道
死亡通知書
文書



朴洪圭 （97）

広島・長崎における朝鮮人原爆被害
玉藻組所属動員者個人写真
写真



裵ナンオク （145）

中国
脚絆
博物



裵順礼 （63）

朝鮮女子勤労挺身隊
不二越株式会社労務者団体写真
写真



裵順礼 （65）

朝鮮女子勤労挺身隊
不二越株式会社 労務者身分証
文書



裵ジョンギル （91）

山口県
労働者年金保険被保険者台帳
記号番号通知票
文書



徐ドンス （166）

東南アジア・南太平洋地域
戦没公報
文書



徐ドンス （166）

東南アジア・南太平洋地域
海軍軍属戦死ノ件報告
文書



徐丙寛 （51）

神奈川県
横須賀線工事労務者個人写真
写真



徐丙寛 （51）

神奈川県
認識票
博物



徐丙寛 （51）

神奈川県
お守り
博物



徐丙寛 （51）

神奈川県
判子と判子ケース
博物



徐丙寛 （51）

神奈川県
日本の金銭
博物



徐丙基 （130）

朝鮮半島
日章旗
博物

徐丙基 （131）

朝鮮半島
鎮海海兵団入営歓送式で使われた旗
博物

徐丙基 （131）

朝鮮半島
千人針
博物



徐正萬 （25）

北海道
日本赤十字有功勲章
博物



徐正萬 （26）

北海道
判子と判子ケース
博物



徐チョルホ （109）

長崎県
協和会会員章
文書



徐チョルホ （112）

長崎県
勤倹預金通帳
文書



成世和 （167）

東南アジア・南太平洋地域
扇子
博物



ソン・スングム （16）

北海道
尺別炭鉱坑口で撮影した団体写真
写真



ソン・スングム、ハ・ヒテ（15）

北海道
釧路協和会尺別支部錬成会記念
写真



孫昌葉 （147）

中国
軍服と認識票
博物



孫海鎮 （74）

大阪府
奈良市産業戦士訓練所入所者団体写真
写真



宋健太 （171）

東南アジア・南太平洋地域
父親から息子に送られた手紙
文書



宋斗煥 （67）

三重県
物品要請証明書
写真



宋ボンホン （132）

朝鮮半島
勤労報国隊光陽第 1 班 中央鉄道工事労務者団体記念
写真



宋ソンホン （116）

大分県
大分県旭鉱山から三重県紀州鉱山へ配置転換部隊記念撮影
写真



宋ウォルレ （156）

サハリン
寄留書類
文書



宋在甲 （91）

山口県
山口県の補充隊所属軍人団体写真
写真



申鉉尚 （150）

シベリアに抑留された朝鮮人捕虜
シベリア抑留朝鮮人捕虜のハガキ
文書



安ミョンボク （156）

サハリン
強制動員された労務者の子どもたちの学校
写真



安承勲 （132）

韓半島
入営者記念写真
写真



厳ボクヒョン （129）

朝鮮半島
1941 年 1 期生京畿道出身者記念写真
写真



宋ソンホン （116）

大分県
協和会会員章
文書



宋義永 （26）

北海道
三井芦別鉱業所労務者団体写真
写真



ソン・テブン （107）

福岡県
協和会会員章
文書



アン・クァンジャ （153）

サハリン
母親から息子に送られた手紙
文書



安承勲 （132）

朝鮮半島
作戦要務令便覧
文書



厳ボクヒョン （123）

朝鮮半島
康川面勤労報国団第 4 回出動隊
写真



厳仁煥 （43）

東京都
東京製鉄株式会社労務者団体写真
写真
写真



厳仁煥 （43）
東京都
東京製鉄株式会社労務者団体
写真
写真



厳正燮 （45）
東京都
身分証
文書



呉景愛 （64）
朝鮮女子勤労挺身隊
不二越株式会社労務者団体写真
写真



呉炳璇 （75）
大阪府
大阪海兵団団体写
写真



呉炳璇 （75）
大阪府
動員前の身体検査
写真



呉炳璇 （75）
大阪府
動員前の思想調査
写真



呉炳璇 （75）
大阪府
忠北道庁に集められた朝鮮人労務者
写真



呉炳璇 （75）
大阪府
清州警察署に集められた朝鮮人労務者
写真



呉炳璇 （76）
大阪府
清州神社参拝後の行進
写真



呉炳璇 （76）
大阪府
清州駅に集結した朝鮮人労務者
写真



呉炳璇 （77）
大阪府
清州無心川広場での強制訓練
写真



柳孟魯 （134）
朝鮮半島
朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所 入所式
写真



柳孟魯 （134）
朝鮮半島
朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所 訓練兵の神社参拝後の行列
写真



柳孟魯 （134）
朝鮮半島
朝鮮 47 部隊野砲兵第 30 連隊補充隊 ガス兵団体写真
写真



兪命同 （164）

東南アジア・南太平洋地域
南方トラック島徴用者賃金計算書
文書



兪ビョンドン （173）

南洋群島斡旋労働者
南洋群島から送ったハガキ
文書



柳ジョンハ （155）

サハリン
解放後、朝鮮学校の教師と学生
写真



尹権浩 （158）

黒い大陸から来た手紙
サハリン豊畑炭鉱 炭車の前の労務者
写真



尹権浩 （159）

黒い大陸から来た手紙
父親から息子に送られた手紙
文書



尹秉烈 （28）

尹秉烈コレクション
タバコ粉
博物



尹秉烈 （28）

尹秉烈コレクション
日本の銭
博物



兪命同 （164）

東南アジア・南太平洋地域
軍務員経歴証明書
文書



柳錫鉉 （113）

長崎県
修了証書
文書



劉ジュニョル （119）

沖縄県
捕虜バッジ
博物



尹権浩 （158）

黒い大陸から来た手紙
サハリン豊畑炭鉱 炭車の前の労務者
写真



尹秉烈 （28）

尹秉烈コレクション
タバコ箱
博物



尹秉烈 （28）

尹秉烈コレクション
日本の紙幣
博物



尹秉烈 （29）

尹秉烈コレクション
トランク
博物



尹秉烈 (29)

尹秉烈コレクション
靴下
博物



尹秉烈 (29)

尹秉烈コレクション
「住みやすい北海道の炭鉱」
文書



尹秉烈 (30)

尹秉烈コレクション
チリ紙
博物



尹秉烈 (30)

尹秉烈コレクション
封筒
博物



尹秉烈 (30)

尹秉烈コレクション
徴用告知書
文書



尹秉烈 (30)

尹秉烈コレクション
餞別金封筒
博物



尹秉烈 (31)

尹秉烈コレクション
電信為替受領証書
文書



尹秉烈 (31)

尹秉烈コレクション
特殊郵便物受領証
文書



尹秉烈 (31)

尹秉烈コレクション
給与明細書
文書



尹秉烈 (32)

尹秉烈コレクション
身分証
文書



尹秉烈 (32)

尹秉烈コレクション
手紙
文書



尹秉烈 (33)

尹秉烈コレクション
決戦増産手当給与通知書
文書



尹ソンジュン (127)

朝鮮半島
日本窒素興南工場 第 1 種養成所第 1 期生訓練修了記念団体写真
写真



尹ソンジュン (128)

朝鮮半島
日本窒素興南工場 動員労務者団体写真
写真



尹ソンジュン （128）

朝鮮半島
日本窒素興南工場 動員労務者
個人写真
写真



尹ソンハン （41）

栃木県
軍隊手帳
文書



尹寿元 （43）

東京都
芝浦海軍軍属団体写真
写真



尹寿元 （43）

東京都
芝浦海軍軍属団体写真
写真



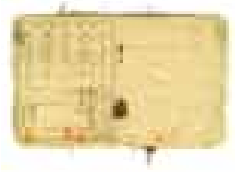
尹ヨンチョル （115）

熊本県
熊本県協和会団体写真
写真



尹ヨンチョル （115）

熊本県
熊本県協和会団体写真
写真



尹イクジュン （166）

東南アジア・南太平洋地域
俸給支払表
文書



尹ピョンウォン （25）

北海道
外套
博物



尹ピョンウォン （25）

北海道
毛布
博物



李貢龍 （106）

福岡県
脚絆
博物



李ダルフン （59）

静岡県
帰還者の持ち物（食器）
博物



李ドンホ （50）

神奈川県
慶尚南道鎮海、朝鮮総督府海軍兵志願者訓練所 訓練兵団体
写真
写真



李レヨル （140）

中国
青年訓練所団体写真
写真



李満承 （45）

東京都
乙種会員手帳
文書



李ムスン （170）

東南アジア・南太平洋地域
徽章（右）と志願兵訓練所修了記念メダル（左）
博物



李ビョンイン （142）

中国
修了証書
文書



李ビョンイン （142）

中国
軍隊手帳
文書



李ビョンイン （147）

中国
防寒用軍帽
博物



李ビョンイン （147）

中国
防寒用下着
博物



李ビョンイン （148）

中国
陸軍兵志願者による東大門前の行軍
写真



李三寧 （50）

神奈川県
横須賀施設部所属軍属見学記念写真
写真



李商雨 （144）

中国
入営者団体写真
写真



李相春 （46）

神奈川県
神社の前での団体写真
写真



李相春 （46）

神奈川県
強制動員労務者（場所不詳）
写真



李サンホ （114）

長崎県
佐世保施設部半島工員団体写真
写真



李西教 （41）

栃木県
鉱業所（不詳、葛生町）の労務者団体写真 写真



李ソキ （139）

中国
朝鮮総督府陸軍兵志願者訓練所 入営歓送式の様子
写真



李ソキ （139）

中国
朝鮮総督府陸軍兵志願者の行軍の様子
写真



李ソヌ （15）

北海道
昭和炭鉱帰還労務者記念団体写真
写真



李スユン （106）

福岡県
宝珠山炭鉱労務者葬式写真
写真



李順男 （65）

朝鮮女子勤労挺身隊
名古屋航空機製作所寮の前での団体写真
写真



李シネ （47）

神奈川県
海軍志願兵団体写真
写真



李シンジク （80）

兵庫県
健康保険被保険者証
文書



李シンジク （82）

兵庫県
衣料切符
文書



李ヨンス （25）

北海道
給与封筒
文書



李スウン （133）

朝鮮半島
第５回勤労報国団出動隊記念写真
写真



李順男 （65）

朝鮮女子勤労挺身隊
名古屋航空機製作所労務者個人写真
写真



李スンガプ （34）

李鍾錫回顧録
李鍾錫回顧録
文書



李シネ （47）

神奈川県
横須賀海軍病院所属軍人の個人写真
写真

李シンジク （82）

兵庫県
中山製鋼所尼崎工場出勤票
文書



李ヨンス （18–19）

北海道
産業戦士への朝鮮総督府の手紙
文書



李ヨング （58）

岐阜県
国民労務手帳
文書



李ヨンギュ （102）

福岡県
大之浦炭鉱労務者写真
写真



李ヨンギュ （103）

福岡県
貝島大之浦炭鉱労務者団体記念写真
写真



李ヨンギュ （104）

福岡県
福岡県〔大之浦炭鉱〕労務者団体写真
写真



李雄馥 （53）

農耕勤務隊
第３農耕勤務隊動員者個人写真
写真



李雄馥 （73）

大阪府
壽重工業株式会社労務者団体写真
写真



李ウォングン （107）

福岡県
国民労務手帳
文書



李殷植 （83）

兵庫県
入隊前の記念写真
写真



李殷植 （83）

兵庫県
入隊前の記念写真
写真



李殷植 （85）

鳥取県
新兵訓練修了写真
写真



李在煥 （130）

朝鮮半島
軍用水筒
博物



李ジェフン （52）

農耕勤務隊
第１農耕勤務隊動員者団体写真
写真



李チュンサン （101）

福岡県
三菱鯰田炭鉱労務者記念写真
写真



李チュンサン （103）

福岡県
表彰状
文書



李学賢 （60）

愛知県
徴用告知書
文書



李フンウ （37）
秋田県
花岡鉱業所労務者の団体写真
写真



印ギョンスル （161）
東南アジア・南太平洋地域
入営者歓迎記念写真
写真



印ギョンスル （161）
東南アジア・南太平洋地域
訓練所入所式の様子
写真



印ギョンスル （167）
東南アジア・南太平洋地域
旗
博物



印ギョンスル （167）
東南アジア・南太平洋地域
日章旗
博物



印ギョンスル （169）
東南アジア・南太平洋地域
陸軍兵志願者訓練所修了記念
メダル
博物



任ドギョ （143）
中国
ハガキ
文書



林炳模 （48）
神奈川県
（第 51 海軍航空廠）団体写真
写真



林炳模 （48）
神奈川県
身分証明書
文書



任ヨン （20）
北海道
北海道炭礦汽船（株）空知鉱業所 労務動員の際の団体写真
写真



任ホンスン （117）
鹿児島県
佐世保海軍建築部川棚部隊
団体写真
写真



任ホンスン （117）
鹿児島県
佐世保海軍建築部川棚部隊
団体写真
写真



張悳煥 （102）
福岡県
日産山田炭鉱労務者団体写真
写真



張ビョンフン （67）
三重県
朝鮮農業報国青年隊写真帳
写真



張セジュン （148）

中国
死亡内報
文書



田文奎 （144）

中国
入営者歓送記念家族写真
写真



田応礼 （107）

福岡県
勤務証印簿
文書



全テユン （172）

南洋群島斡旋労働者
南洋群島の絵葉書
文書



全ヘパル （99）

高知県
一時帰鮮証明書
文書



鄭東柱 （69）

滋賀県
滋賀県・場所不詳・部隊団体写真
写真



張仁植 （27）

北海道
新幌内鉱業所の寮の前で撮影、解放記念団体写真
写真



全ウシク （17）

北海道
死亡診断書
文書



全ジュンホン （129）

朝鮮半島
第 160 師団司令部服務当時撮影写真
写真



全テユン （172）

南洋群島斡旋労働者
南洋群島の絵葉書
文書



鄭東柱 （69）

滋賀県
滋賀県・場所不詳・部隊団体
写真
写真



鄭明出 （140）

中国
鎮海海軍志願兵訓練所団体写真
写真



鄭明出 （149）

中国
朝鮮軍人自営隊名札
博物



丁サンチョル （169）

東南アジア・南太平洋地域
飯盒
博物



丁サンチョル （169）

東南アジア・南太平洋地域
ベルト
博物



丁サンチョル （169）

東南アジア・南太平洋地域
水筒
博物



ジョン・ジンヨン （125）

朝鮮半島
徴用令書
文書



程八男 （115）

熊本県
熊本電熱工業所記念写真帖
文書



趙ギテク （83）

兵庫県
身分証
文書



趙培英 （52）

農耕勤務隊
農耕勤務隊知人名簿・茨城
文書



趙培英 （53）

農耕勤務隊
第２農耕勤務隊動員者団体写真・茨城
写真



曺秉哲 （78）

大阪府
藤永田造船所動員 全北隊団体写真
写真



趙炳春 （24）

北海道
辞令
文書



趙炳春 （24）

北海道
一時帰鮮証明書
文書



趙容泰 （109）

長崎県
長崎鉱業（株）伊王島鉱業所労務者団体写真
写真



趙ゼヒ （44）

東京都
合同葬儀祭壇記念写真
写真



趙昌烈 （86）

岡山県
玉野造船所 労務者写真
写真



チョ・ヒョナム （88）

広島県
火葬認許証
文書



チョ・ヒョナム （97）

広島・長崎における朝鮮人原爆被害
広島製砥所発給罹災証明書
文書



周ジョンドク （163）

東南アジア・南太平洋地域
戦没者合同葬式写真
写真



周ジョンドク （163）

東南アジア・南太平洋地域
祭粢料封筒
博物



崔東善 （92）

山口県
作業場配置前の労務者団体写真
写真



崔ブレ （123）

朝鮮半島
陵西青年勤労報国団中央線工事地出動記念団体写真
写真



趙昌烈 （86）

岡山県
労務者団体写真
写真



チョ・ヒョナム （97）

広島・長崎における朝鮮人原爆被害
広島県発給罹災証明書
文書



朱サンウク （20）

北海道
炭鉱の坑口で弟と撮影した写真
写真



周ジョンドク （163）

東南アジア・南太平洋地域
御慰問封筒
博物



朱学順 （90）

山口県
応徴士証明願
文書



崔夢得 （17）

北海道
浅野雨竜炭鉱労務者団体写真
写真



崔栄根 （140）

中国
陸軍戦時名簿
文書



崔インテク （72）
大阪府
住友金属工業労務者の団体
個人写真
写真



崔インテク （72）
大阪府
住友金属工業労務者の個人写真
写真



崔ジュンファ （119）
沖縄県
傭人徴発旅費支払に関する件
文書



崔ジュンファ （119）
沖縄県
領収証
文書



崔ジュンファ （119）
沖縄県
自由韓人報 第７号
文書



崔哲鎬 （146）
中国
軍用水筒
博物



河テヨン （79）
兵庫県
生野鉱業所労務者団体写真
写真



河テヨン （79）
兵庫県
生野鉱業所労務者個人写真
写真



河憲培 （55）
新潟県
特設陸上勤務隊 119 中隊団体
写真
写真



河憲培 （55）
新潟県
特設陸上勤務隊軍人名簿
文書



河ソクボン （71）
京都府
舞鶴施設部軍属団体写真
写真



河ソクボン （71）
京都府
舞鶴施設部軍属団体写真
写真



韓免熙 （56）
長野県
表彰状
文書



韓免熙 （56）
長野県
感謝状
文書



韓免熙 （56）
長野県
賞状
文書



韓昌洙 （146）
中国
軍服ボタンと銃口掃除用具
博物



韓昌洙 （146）
中国
針箱
博物



許珪 （70）
滋賀県
4199 部隊田中小隊の団体写真
写真



玄スビョン （74）
大阪府
応徴士団体写真
写真



玄昌旻 （61）
愛知県
鎮海海軍航空廠、団体写真
写真



洪正峯 （118）
鹿児島県
軍人履歴票
文書



ハン・ヨンスク （107）
福岡県
徴用解除証明書
文書



韓昌洙 （146）
中国
洗濯ブラシ
博物



許珪 （70）
滋賀県
軍人に動員された時に撮影した団体写真
写真



許在英 （80）
兵庫県
山岡内燃機青年学校労務者団体写真
写真



玄昌旻 （60）
愛知県
三菱名古屋航空機製作所労務者団体写真
写真



洪承厚 （105）
福岡県
三井三池炭鉱三川坑労務者団体写真
写真



黄敬俊 （37）
秋田県
身分証明書
文書



黄敬俊 （37）

秋田県
用途未詳の定期券
文書



黄ムホン （130）

朝鮮半島
朝鮮有煙炭株式会社動員労務者団体写真
写真



黄インクォン （153）

サハリン
衣料通帳
文書



黄インクォン （154）

サハリン
協和会会員章
文書



黄インファ （162）

東南アジア・南太平洋地域
第 30 区隊団体写真
写真

散らばったあの日の記憶

―強制動員収集資料集―

MIX
Paper | Supporting responsible forestry
FSC® C175035
www.fsc.org

본 책은 지속 가능한 산림경영과 산림보호를 위해
국제산림관리협의회(FSC) 산림인증을 받은 용지와
콩기름 잉크로 제작하였습니다.